

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

教授 飯島 明宏 (イイジマ アキヒロ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

私たちの地域にある里地里山は、生物多様性の保全において、重要な自然生態系の一つである。しかし、長い年月をかけて人間の営みを通じて形成・維持されてきた二次的な自然生態系は、少子高齢化や過疎化に伴う地域住民の働きかけの減少によって荒廃しつつあり、生物多様性の減退に伴ってその魅力も失いつつある。人類が十分な生態系サービスを楽しむ続けるためには、二次的な自然生態系への持続的、かつ積極的な働きかけが必要である。本演習では、群馬県庁・群馬県衛生環境研究所での環境研究の経験を活かして、『SATOYAMAイニシアティブ』の理念に基づいた地域づくりの方策を実践的に研究し、環境を「利用する」ことが「保全する」ことにつながるロジックについて演習指導する。このプロセスを通じて、環境データの採取法や分析法を学び、環境動態解析の基本スキルを習得することを目的とする。

達成目標

- ①テキストの輪読を通じて、環境問題に関する基礎知識を習得する。
- ②フィールドワークを通じて、生きたデータを採取し、分析する技法を身につける。
- ③プレゼンテーションやディスカッションを通じて、表現力や論理的な思考力を鍛える。

スケジュール

【前期】

- ・ テキストの輪読 / プレゼンテーション / ディスカッション
- ・ 環境問題の実態 (第1回～第5回)
- ・ 環境と社会 (第6回～第7回)
- ・ 環境と経営 (第8回～第9回)
- ・ 生活と環境 (第10回～第13回)
- ・ 環境と共生 (第14回)
- ・ 合同研究会 (第15回)
- ・ 夏合宿 (フィールドワーク：神流川河川環境調査)

【後期】

- ・ テーマ研究 (第1回～第7回)
- ・ 文献レビュー (第8回～第14回)
- ・ 合同研究会 (第15回)

教科書・参考文献

教科書 環境社会検定試験公式テキスト 東京商工会議所 編著 2015

参考書 環境統計学入門 - 環境データの見方・まとめ方 - 片谷教孝・松藤敏彦 共著 2004 など

授業外での学習

各自が担当する事項については、指定の教科書に限定せずに関連資料からも積極的に情報収集を行うこと。また演習内容をノートに整理し、知識およびスキルの定着を図ること。

評価方法

出席状況、演習に対する積極性、フィールドワークへの貢献等を総合的に評価する。

履修上の注意

週1回の演習に加え、課外でのフィールドワークを随時実施する予定である。意欲的にゼミ活動に取り組む学生を歓迎する。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

教授 井門 隆夫 (イカド タカオ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

演習Iの目標として、第一に「観光の実際の現場で起きている現象や課題」の文献調査を通じて、その解決や創造的破壊（イノベーション）に関する問題意識を持つことができる「観光リテラシー」を養成する。第二に「実際の観光の現場に関わり、社会人と協働する」プロジェクトの実践を通じて、社会人に必要な行動特性である「コンピテンシー」を養成する。前期は、観光に関する現代的課題に関する輪番での発表と全員での討議を行う。同時に夏期休暇中に国内外から選んだフィールド（カンボジアを予定）で実施するプロジェクト（全員参加）やインターンシップ（任意参加）に関する計画と準備を行う。後期は、国内から選んだ観光地のリサーチ等の諸活動を行い、解決策を提言する。

達成目標

- ・ 観光や地域に関する現代的課題を認識し、その解決策やイノベーションを考えることができる。
- ・ 実際の観光現場での体験を通じて、対自己基礎力、対人基礎力、対課題基礎力を向上させる。
- ・ 卒業論文執筆に向けて、問題意識を醸成する。

スケジュール

第1回	オリエンテーション（ゼミの進め方、夏期プロジェクト・インターンシップの説明）
第2回	第1回発表と討議 / 夏期プロジェクト計画
第3回	第2回発表と討議 / 夏期プロジェクト計画
第4回	第3回発表と討議 / 夏期プロジェクト計画
第5回	第4回発表と討議 / 夏期プロジェクト計画
第6回	第5回発表と討議 / 夏期プロジェクト計画
第7回	第6回発表と討議 / 夏期プロジェクト計画
第8回	第7回発表と討議 / 夏期プロジェクト計画
第9回	第8回発表と討議 / 夏期プロジェクト計画
第10回	第9回発表と討議 / 夏期プロジェクト計画
第11回	第10回発表と討議 / 夏期プロジェクト計画
第12回	第11回発表と討議 / 夏期プロジェクト計画
第13回	第12回発表と討議 / 夏期プロジェクト計画
第14回	夏期プロジェクト準備
第15回	夏期プロジェクト準備
第16回	前期のふりかえりと後期のオリエンテーション
第17回	事前学習（調査地に関する学習）
第18回	事前学習（調査方法に関する学習）
第19回	現地事前視察と経営者による現状解説
第20回	調査票の設計
第21回	冬期プロジェクト説明とディスカッション
第22回	調査最終準備
第23回	現地インタビュー調査
第24回	調査結果まとめ（アフターコーディング）
第25回	調査結果まとめ（発表資料の作成）
第26回	調査結果まとめ（発表シミュレーション）
第27回	調査結果発表会
第28回	冬期プロジェクト準備
第29回	冬期プロジェクト準備
第30回	冬期プロジェクト準備

教科書・参考文献

教科書 特になし

参考書 週刊トラベルジャーナル

授業外での学習

ゼミ時間内でグループワークが不足する場合、適宜集まり演習時間外に実施することがある。調査やプロジェクト実施に関し、必要に応じて事前の現地実査が行うことがある。また、前期は3限の演習IIにオブザーバー参加することが望ましい。

評価方法

課題研究発表・調査研究発表に関してはプレゼンテーションのルーブリックで評価する。プロジェクトに関しては終了後のふりかえり面談において評価する。

履修上の注意

本ゼミでは、週1回の演習の他に、夏期休暇中（8月）及び春期休暇中（2月）に国内外でのプロジェクト（数日間の社会人との協働）を行う。また、その準備のために事前の現地実査があることもある。極力低廉な方法を利用するが、旅費がかかることを承知しておくこと。ここでは、対自己基礎力の中でも「柔軟性（臨機応変力）」が求められる機会が多いので、頭を柔らかくして臨むこと。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

担当教員
教授 岩崎 忠 (イワサキ タダシ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

神奈川県職員（総務部、企画部、県土整備部）としての勤務実績及び政策立案・決定・執行・評価の実務経験をいかして、具体的な政策課題への対応や一連の政策過程の視点を中心に演習を行う。
本演習では、公共政策・行政学の研究手法・基本的な理論について研究を進め、演習IIにおいてスムーズに卒論に取りかかれるように準備することを目的とする。

達成目標

演習IIにおける卒業研究の準備段階として位置付け、自治体政策、地方自治制度について、幅広い基礎知識を習得するとともに、学術研究の進め方、仮設の定立・検証、政策分析手法などの体得を目指す。

スケジュール

- 第1回：今年度の授業計画、各自の学習計画を立てる
- 第2回：文献輪読～第1章 自治体の「非常時」と「平時」
- 第3回：文献輪読～第2章 全町避難・全村避難と地方自治
- 第4回：文献輪読～第3章 自治体の震災対応と職員意識
- 第5回：文献輪読～第4章 復興推進体制の設計と展開
- 第6回：文献輪読～第5章 被災自治体に対する政府の財政措置
- 第7回：文献輪読～第6章 災害ボランティア活動の実際
- 第8回：文献輪読～第7章 広域災害時における遠隔自治体からの人的支援
- 第9回：文献輪読～第8章 県外避難者受入自治体の対応
- 第10回：文献輪読～第9章 復興計画の設定と運用
- 第11回：文献輪読～第10章 津波被災地における高台移転
- 第12回：文献輪読～第11章 仮設住宅と災害公営住宅
- 第13回：文献輪読～第12章 震災復興における被災者住宅支援再建支援制度の再開
- 第14回：文献輪読～第13章 忘れき処理をめぐる行動選択
- 第15回：文献輪読の論点のまとめ
- 第16回：ガイダンス（後期研究方針について）
- 第17回：基礎調査①（文献調査）
- 第18回：基礎調査②（情報収集）
- 第19回：論文の書き方
- 第20回：調査報告に対する質疑応答①
- 第21回：調査報告に対する質疑応答②
- 第22回：調査報告に対する質疑応答③
- 第23回：調査報告に対する質疑応答④
- 第24回：調査報告に対する質疑応答⑤
- 第25回：調査報告に対する質疑応答⑥
- 第26回：調査報告に対する質疑応答⑦
- 第27回：論文の書き方①（レポート執筆と論文の違い）
- 第28回：論文の書き方②（脚注と図表の挿入方法）
- 第29回：論文の書き方③（参考文献について）
- 第30回：意見交換・まとめ

教科書・参考文献

- 教科書 稲継裕昭・小原隆治『震災後の自治体ガバナンス』東洋経済、2015年
岩崎忠『自治体の公共政策』学陽書房、2013年
- 参考書 その都度、指示する。

授業外での学習

ニュースに関心をもって、積極的に自治体政策・地方自治制度に関する情報を積極的に収集すること。演習の後には、関連文献などを適宜参照して、学習内容の定着を図る。

評価方法

平常点（出席状況、演習への貢献度）50%、担当回の報告内容50%

履修上の注意

毎回出席が原則である。欠席時の直接連絡を義務付ける。無断欠席、理由のない遅刻・早退は厳禁。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

担当教員
准教授 宇田 和子 (ウダ カズコ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

本演習の目的は、社会調査を通じた研究の方法を学び、実践することである。そのために研究室全体の調査プロジェクトとして以下の諸問題の中から一つを選び、チームで調査を行い、年度末に調査報告書を上梓する。

- 公害発生に伴う地域社会の破壊と復興
- 環境病の予防と回復
- 不確実なリスクや新技術の導入における合意形成

達成目標

- (1)社会調査の方法を理解し、適切に調査を実施できる。
- (2)調査で得られたデータをもとに考察を行い、論文にまとめることができる。
- (3)調査対象者になんらかの成果を返すことができる。

スケジュール

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回～第3回 調査事例の選定について
- 第4回～第6回 テーマ別レポートの報告①
- 第7回～第9回 社会調査の基礎文献の講読
- 第10回～第12回 テーマ別レポートの報告②
- 第13回～第15回 データ収集と調査準備

8月末に実査(予定)

- 第16回 収集データの加工
- 第17回～第20回 先行研究の検討
- 第21回～第24回 論文構想発表①
- 第25回～第28回 論文構想発表②
- 第29回～第30回 論文の集約、報告書作成および発送

教科書・参考文献

教科書 セミ内で適宜示す。

参考書

授業外での学習

調査の準備、実査、調査の片付けなど、ゼミ外の学習時間を確保すること。

評価方法

調査企画への貢献度(50%)、ゼミ論文の完成度(50%)で評価する。

履修上の注意

社会学、フィールドワーク入門、環境社会学を履修することが望ましい。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

教授 大河原 眞美 (オオカワラ マミ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

法はことばで書かれ、裁判はことばで争われる。演習Iでは、この「法と言語」研究の総括を行っていく。前半は憲法、民法、刑法、行政法、商法、民事訴訟法、刑事訴訟法について、ことばから概観することを中心に進める。後半は法廷用語、判決文、供述調書、証人尋問、脅迫・詐欺のことば、偽証・名誉毀損のことば、筆者・話者同定、商標の類否、少数言語の言語権などを扱って、「法と言語」の理解を深める。

達成目標

人間を人間たらしめる「ことば」について、司法領域を中心に深く掘り下げ、各自の言語使用について、社会生活に生かせるように磨きをかける。公務員試験などにも役に立つよう法律のことばについての理解を目指す。

スケジュール

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 法律のことば
- 第3回 大河原(2009)、Tiersma (1999)
- 第4回 憲法のことば
- 第5回 民法のことば
- 第6回 刑法のことば
- 第7回 行政法のことば
- 第8回 商法のことば
- 第9回 民事訴訟法のことば
- 第11回 刑事訴訟法のことば
- 第12回 裁判のことば
- 第13回 Coulthard (1994a)、Coulthard (1994b)
- 第16回 裁判員裁判のことば
- 第17回 Okawara (2012)
- 第18回 司法通訳
- 第19回 Mizuno (2006)
- 第20回 ことばの犯罪：振り込め詐欺のことば
- 第21回 ことばの犯罪：偽証・名誉毀損
- 第22回 ことばの証拠：筆跡鑑定
- 第23回 ことばの証拠：商標の類否等
- 第24回 ことばの誤解—意味内容の解釈をめぐる争い
- 第25回 ことばが記憶を変え—目撃者の記憶の変容
- 第26回 言語権・言語法と言語政策
- 第27回 法務翻訳の実際—英文契約書に関する訳語・訳文の問題点
- 第28回 法言語教育
- 第29回 法言語学の成立と展開 大河原 (1998)
- 第30回 総括

教科書・参考文献

教科書 橋内武・堀田秀吾編 (2012) 『法と言語—法言語学へのいざない』 (くろしお出版)

参考書 前期と後期の初めに詳細な参考文献リストを配布する。

授業外での学習

次のゼミに関連する項目について、指定した資料・教科書・参考書をよく読んで予習しておいて下さい。

評価方法

ゼミ生の報告内容や活動状況から総合的に評価する。

履修上の注意

2年次に「国際法言語論」を履修しておくこと。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

准教授 大澤 昭彦 (オオサワ アキヒコ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

都市計画、景観計画に関わる理論と実践の研究を通じて、魅力ある都市空間や景観のあり方を考える力を養うとともに、都市計画学を中心とする基礎的な知識および研究方法・視点の習得を目標とする。
具体的には、(1)都市、地域の現場の実態や課題を把握するために、フィールドワークを実施する(2)フィールドワークによる調査結果をプレゼンテーション及び討議することなどを行う。

達成目標

この演習では、(1)都市計画を中心とする領域の理解を深め、基礎的な研究方法・視点を習得すること(2)調査研究を通じて、論理的な思考方法および論理的に他者へ伝える技術を習得すること(3)都市や地域への関心および問題意識を醸成すること、の三点を目標とする。

スケジュール

【前期】

グループ研究：

第1回～第5回 問題発見

第6回～第10回 調査設計

第11回～第15回 調査

【後期】

グループ研究：

第1回～第4回 調査

第5回～第12回 分析

第13回～第15回 発表準備・発表

上記の間に、個人研究：卒業論文に向けた研究計画の準備を行う。

教科書・参考文献

教科書 適宜指示する。

参考書 適宜指示する。

授業外での学習

授業中にあげる文献・資料を率先して読み、自らの考えを整理すること。
国内外を問わず、様々な都市を訪れ、見聞を広めること。

評価方法

受講状況と受講態度をもとに、総合的に評価する。

履修上の注意

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

担当教員
准教授 小熊 仁 (オグマ ヒトシ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

本演習では、交通・観光に関わる基礎理論を学習し、その上で各自の研究テーマに沿った基本文献の講読、および様々な質的・量的分析手法の取得を通して、卒業論文執筆のための土台を築くことが目的です。具体的には、(1) 交通・観光に関する基本文献の輪読によって基礎知識の取得や研究の方法・視点を探ること、(2) 自らの研究テーマを発見し、基礎文献の読み込みを通して自らの分析スタイルを確立させること、(3) 報告を通じてプレゼンテーションのための基礎的な力を養うことが目標です。

達成目標

- ・ 交通・観光に関する基礎理論や基礎知識を身に付けること
- ・ 自らの研究テーマを発見し、それを解決するための分析手法を身に付けること
- ・ プレゼンテーションおよび論文執筆のための基本的スキルを身に付けること

スケジュール

【前期】

- ・ 基礎テキストの輪読・報告
- ・ 各自研究テーマに沿った文献の講読・報告
- ・ 研究ノートの提出 (月1回)
- ・ 夏合宿 (8月or9月) 卒論計画の作成・報告と論文執筆のための基礎スキルの取得

【後期】

- ・ 各自研究テーマに沿った文献の講読・卒論計画進捗状況の報告
- ・ 研究ノートの提出 (月1回)
- ・ 卒論テーマの絞り込み・確定
- ・ フィールドワーク・アンケート等の実施

教科書・参考文献

教科書 受講生の関心や希望に応じて決定します。

参考書 講義中に適宜指示します。

授業外での学習

各自の関心に沿った研究指導や研究の進捗状況を把握するため、月に1回「研究ノート」の提出を求めます。また、ゲストスピーカーによる講義やフィールドワークを行うこともあります。

評価方法

出席状況、受講態度、活動への貢献などをもとに総合的に評価します。

履修上の注意

無断欠席、および理由のない遅刻、早退は厳禁です。自らの研究テーマに自発的・積極的に取り組む学生を歓迎します。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

教授 片岡 美喜 (カタオカ ミキ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

地域社会における課題（人口減少、産業の低迷、高齢化）と、その改善方策として、観光分野を含めた地域活動が重要なものとなる。こうした課題解決に向けて、地域社会では地域活動を牽引できる専門知識と共に、高い志を持った人材が求められる。

そこで本演習では、地域づくりの観点から観光資源の適正な保全と利活用のあり方をとらえるために必要な知識と見解を、実践的な学習から醸成することを目的とする。3年次のゼミ活動では「年間研究」として、対象となる一地域をフィールドにした調査研究を行なう。「年間研究」でのフィールドワークや、専門書の輪読を通して、上記の目的の達成を図るものとする。

主なテーマ：観光資源の適正な利活用、グリーンツーリズム・エコツーリズム、食と農業に関する教育

達成目標

本ゼミでは、演習での学習や調査研究を進めるにあたって、各自が課題意識と自発性を持つことが最も重要であると考えている。3年次は、フィールドワークを通して、様々な人に出会い、地域の現状を見つめて、自分の中の課題意識を高めてほしい。加えて、ゼミ生は互いに切磋琢磨しながらも仲間の良いところを見つけ大切に親交を深めてほしい。

スケジュール

【前期】

第1回 講義ガイダンス

第2回～14回 専門学習

・文献の輪読（LTD手法による学習）

・年間研究（グループでの現地調査、論文作成、プレゼンテーション）

上述の演習内容に必要な調査手法や分析の方法を、適宜習得するものとする。

第15回 前期期間中の学習報告会

その他

・ゼミ合宿（8月に2泊3日程度）

【後期】

第16回～第29回 専門学習

・文献の輪読

第30回 年間研究の取りまとめ（報告書の作成、調査成果の地域への還元等）

その他

・春合宿を行なう場合も有り

教科書・参考文献

教科書 講義中に教員より指示を行うものとする。

参考書 ゼミ活動の内容に応じて、随時紹介する。

授業外での学習

講義時間中に講義時間外での学習について指示を行う。主には学外での現地調査や専門文献の精読などである。

評価方法

ゼミ活動への取組状況や成果等、総合的に判断する。

履修上の注意

本ゼミでは、週に1回の演習の他にも、現地調査や地域活動への参加、合宿などの機会がある。意欲を持って、ゼミ活動に取り組みたい学生を歓迎する。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

教授 担当教員 金光 寛之 (カネミツ ヒロユキ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

民法とは、我々が生活するうえで必要不可欠な法律であると考えられる。そのため民法の知識がないと生活をする上で不都合が生じる場合があると予想される。金光ゼミでは、基本的に事前課題を配布し、その課題に対して毎回授業の時までに2人1組のグループにレジュメを作成してもらい、そのレジュメに沿って発表・報告をしてもらう。その発表・報告をもとに全員でディスカッションを行い、法的知識の養成を行う。授業内容については民法財産法の基本事例問題について毎回検討を行うことにする。その他、ゼミ生からの実態調査や裁判所見学等の要望があれば全面的に協力する次第である。

達成目標

民法全体の知識を更に広げるとともに理解を深めることを目標とする。同時にこれらの法的知識を実生活の中で活用できるようにすることも目標とする。また演習の題材については、各種資格試験・公務員試験の内容にも配慮し、ゼミ生が希望する資格の取得及び公務員試験等に合格することも目標とする。

スケジュール

- 第1回 民法における基本原則に関する事例研究
- 第2回 権利の主体に関する事例研究
- 第3回 制限行為能力者に関する事例研究
- 第4回 物とは何かに関する事例研究
- 第5回 法人の権利能力に関する事例研究
- 第6回 法律行為の実現可能性に関する事例研究
- 第7回 民法90条に関する事例研究
- 第8回 錯誤に関する事例研究
- 第9回 詐欺及び強迫に関する事例研究
- 第10回 無権代理に関する事例研究
- 第11回 表見代理に関する事例研究
- 第12回 取得時効に関する事例研究
- 第13回 物権とは何か。物権的請求権に関する事例研究
- 第14回 民法176条と民法177条に関連する事例研究
- 第15回 前期のまとめ
- 第16回 債務不履行に関する事例研究
- 第17回 債権者代位権に関する事例研究
- 第18回 債権者取消権に関する事例研究
- 第19回 連帯保証に関する事例研究
- 第20回 債権譲渡に関する事例研究
- 第21回 相殺に関する事例研究
- 第22回 一般不法行為に関する事例研究
- 第23回 特別な不法行為に関する事例研究
- 第24回 特別法上の不法行為に関する事例研究
- 第25回 不動産登記に関する事例研究
- 第26回 抵当権に関する事例研究
- 第27回 先取特権に関する事例研究
- 第28回 非典型担保に関する事例研究
- 第29回 用益物権に関する事例研究
- 第30回 後期のまとめ

教科書・参考文献

教科書 適宜指示をする。

参考書 適宜指示をする。

授業外での学習

毎週、最低一つの裁判例をよく読むこと。

評価方法

ゼミ活動を総合的に判断して評価する。

履修上の注意

様々な事柄について興味をもって取り組み、自分を磨きたいと考えている学生を歓迎する。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

担当教員
教授 熊澤 利和 (クマザワ トシカズ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次	単位区分	単位数	開講時期
3	必修	4	通年

目的

熊澤研究室では、医療や福祉の現場で生じる課題に対するソーシャルワークを専門領域としています。近年の課題として、「終末期医療における意思決定支援」「医療福祉におけるスピリチュアルケア」「地域福祉計画に対する政策的評価」「看護師や介護福祉士等の職員のストレス」などから研究をしています。この演習Iでは、基礎演習で学習したことを踏まえ、医療福祉領域における問題を理論と実際、双方の視点から学びます。具体的には、地域政策における社会福祉の位置づけを俯瞰しつつ、「意思決定支援 (decision making)」「自己決定」「権利擁護」「リハビリテーション」「就労支援」「触法」「依存」「アディクション」「ストレス-コーピング」「(職員の)バーンアウト」等をキーワードとして医療福祉、高齢者福祉、障害者福祉の現状と諸問題を検討します。希望があれば、「地域福祉計画に対する政策的評価」等の調査に協力してもらいます。

達成目標

- ① 医療福祉、高齢者福祉、障害者福祉、等に関連する課題を見いだすことができる。
- ② 基本的な研究方法について理解できる。
- ③ 学習をしてきた過程・結果を、ゼミの活動報告書としてまとめられる。
- ④ ゼミ生相互の関係を大切することができる。

スケジュール

- 第1回 はじめに
- 第2回 討論：なぜ、老後の「不安」が生じるのか？
- 第3回 論文レビュー (行動経済学関連)
- 第4回 論文レビュー (医療福祉関連)
- 第5回 論文レビュー (地域福祉関連)
- 第6回 論文レビュー (行動科学関連 (認知行動療法等))
- 第7回 患者と医療者の考えていることはなぜズレるのか、意思決定支援に関する課題について (量的調査法を含める)
- 第8回 患者と医療者の考えていることはなぜズレるのか、意思決定支援に関する課題について (質的調査法を含める)
- 第9回 地域福祉における機関連携に関する統計的分析について
- 第10回 討論：なぜ、障害者に対する差別はなくなるのか？
- 第11回 論文レビュー (障害者福祉関連)
- 第12回 論文レビュー (倫理学 (規範倫理学) 関連)
- 第13回 自己のテーマを探求・報告①
- 第14回 自己のテーマを探求・報告②
- 第15回 振り返り
- 第16回 前期の振り返り
- 第17回 卒業研究のデザインを考える① (全体のデザイン)
- 第18回 討論：なぜ、LGBTは、「障害」としてとらえられてきたのか？
- 第19回 論文レビュー (障害者福祉関連)
- 第20回 論文レビュー (社会福祉政策関連)
- 第21回 卒業研究のデザインを考える② (調査法：量的調査)
- 第22回 論文レビュー (高齢者福祉関連)
- 第23回 論文レビュー (地域福祉関連)
- 第24回 討論：なぜ、老いを受け入れることは難しいのか？
- 第25回 老化に関する研究について
- 第26回 卒業研究のデザインを考える② (調査法：質的調査)
- 第27回 卒業研究構想 (1巡目)
- 第28回 卒業研究構想 (2巡目)
- 第29回 卒業研究構想 (3巡目)
- 第30回 振り返り

教科書・参考文献

- 教科書 小澤温編『よくわかる障害者福祉 (第6版)』ミネルヴァ書房 2016
大竹文雄 平井啓編(2018)『医療現場の行動経済学-すれ違う医者と患者』,東洋経済新報社
- 参考書 演習生の理解度に応じて適宜紹介をする。

授業外での学習

各自の課題にそって演習前に自己学習、グループ学習を行うこと。参考書や論文を読み、自分のノートを作成する。

評価方法

演習への参画 (40%)、課題の提出 (60%) を基準に評価する。

履修上の注意

学生の主体性をより重んじます。自ら学習課題を見いだす努力が必要となります。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

教授 黒川 基裕 (クロカワ モトヒロ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

黒川研究室では、開発途上国の課題に対処する開発経済学を専門領域としています。中心となる専門領域は、工業化支援、産業開発ですが、近年の課題として、「BOPビジネス向けの商品企画」「クリエイティブ産業の振興」「デザインのローカライズ」を推進しています。演習1では、開発経済学の導入教育と並行して、希望があれば、途上国向けの商品企画などにも参画してもらいます。

達成目標

1. 開発経済学の基礎理論を理解する。
2. 商品企画・製品開発のプロセスを習得する。
3. プレゼンテーション能力を向上させる。

スケジュール

- 第1回 はじめに
- 第2回 デザインと開発 (BOPビジネス)
- 第3回 デザインと開発 (農産品のアップグレード)
- 第4回 論文レビュー (開発経済学関連)
- 第5回 調査実習 (コンセプト)
- 第6回 調査実習 (調査票作製)
- 第7回 論文レビュー (デザイン学関連)
- 第8回 デザインと開発 (コンテンツ輸出)
- 第9回 調査実習 (実査)
- 第10回 調査計画 (データ分析)
- 第11回 デザインと開発 (ローカライズ)
- 第12回 プロジェクトレビュー (BOPビジネス関連)
- 第13回 論文レビュー (経営学関連)
- 第14回 調査実習 (プレゼンテーション)
- 第15回 振り返り
- 第16回 前期の振り返り
- 第17回 VE研修
- 第18回 論文レビュー (デザイン学関連)
- 第19回 プロジェクトレビュー (評価関連)
- 第20回 商品企画実習 (コンセプトメイク)
- 第21回 論文レビュー (デザイン学関連)
- 第22回 商品企画実習 (アイデアマネジメント)
- 第23回 論文レビュー (デザイン学関連)
- 第24回 品質管理研修
- 第25回 商品企画実習 (アイデア想起)
- 第26回 論文レビュー (デザイン学関連)
- 第27回 卒業研究構想 (1巡目)
- 第28回 卒業研究構想 (2巡目)
- 第29回 卒業研究構想 (3巡目)
- 第30回 振り返り

教科書・参考文献

教科書 指定しない。

参考書 黒崎卓・栗田匡相 (2016) 『ストーリーで学ぶ開発経済学』有斐閣

授業外での学習

論文レビュー、プロジェクトレビューにおいて、関連する先行研究も積極的に収集すること。

評価方法

授業への参画 (40%)、課題の提出 (60%) を基準に評価する。

履修上の注意

実習課題を通した評価が中心なので、メンバーと協力して作り込まれたものを提出してください。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

准教授 木暮 律子 (コグレ リツコ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

本演習では、多言語・多文化状況にある社会の実態を取り上げ、多文化社会における問題とその背景、解決策を検討しながら多文化共生に向けた地域づくりについて考察する。また、異文化接触場面で生じるコミュニケーション上の問題から日本人の言語行動や外国人の話す日本語の特徴を学び、よりよいコミュニケーションを成立させるための方法について探っていく。
前期はグループ研究に関する文献を読んで、研究方法を学びながら調査の計画を立てていく。後期はグループ研究の分析を行い、報告書の作成を通して論文の書き方を学ぶ。

達成目標

- 1) 異文化コミュニケーションに関する基礎的な知識と研究方法を身に付ける。
- 2) 多言語・多文化社会について理解し、多文化共生社会の実現に向けた課題を提示できるようになる。
- 3) 卒業研究につながる研究テーマを確立し、適切な調査方法が選べるようになる。

スケジュール

【前期】

- 第1回 ガイダンス(進め方・スケジュールの確認)
 - 第2回 グループ研究(テーマ設定)、文献紹介
 - 第3回～第7回 グループ研究(文献報告と討論)
 - 第8回～第10回 グループ研究(調査計画の立案、計画書の作成)
 - 第11回～第15回 グループ研究(調査に向けた作業、グループ討議)
- 夏休み：調査の実施

【後期】

- 第16回 ガイダンス(進め方・スケジュールの確認)
 - 第17回 グループ研究(調査概要の報告)
 - 第18回～第23回 グループ研究(調査結果の分析・考察)
 - 第24回～第29回 グループ研究(報告書の作成)
 - 第30回 報告会の準備
- 春合宿：調査の報告会

教科書・参考文献

教科書 特に指定しない。

参考書 ゼミ生の関心に応じて必要な文献を随時紹介していく。

授業外での学習

毎回必ず予習をして授業に臨むこと。自分の担当箇所だけでなく、他のゼミ生の担当箇所についても問題意識を持って十分な準備をしてくること。

評価方法

受講状況・ゼミ活動への貢献度(30%)、発表・レジュメ(20%)、グループ研究への取り組み方(20%)、レポート(30%)を総合的に判断して評価する。

履修上の注意

遅刻・欠席厳禁。やむを得ず欠席する場合は必ず事前に連絡すること。
ゼミでの活動に自発的、積極的に参加することで自分を高めていってほしい。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

担当教員
教授 小牧 幸代 (コマキ サチヨ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次	単位区分	単位数	開講時期
3	必修	4	通年

目的

本演習は、「自分にとっての他文化探し」から始まる。ここでいう「他文化」とは、国内・出身地・大学・部活・アルバイト先・旅先・自宅・カフェなど、身近な場所やお気に入りの空間で見つかるものかもしれないし、インターネット・SNS・小説・マンガ・映像のなかに見出せるものかもしれない。そうした「他文化」すなわち「自分(の感覚)とは違う」とヒト・モノ・コトを発見することができたら、今度はそれを文化人類学の理論と方法に基づいて調査し、分析し、言語化・視覚化して発表し、議論する。文化人類学の理論と歴史は、講義科目「文化人類学」で学び、調査方法論(フィールドワークの理論と実践)は、2年後期の「基礎演習」で習得する。本演習では、それらの学び・習得の成果を、まずは自分史と個人研究の調査・発表の段階で活用・発揮する。そして、思考の整理とその言語化の訓練を経て、3年次論文の執筆・完成につなげる。

達成目標

自分史と個人研究の発表を通じて、資料検索とフィールドワーク実践、効果的なレジュメとパワーポイントの作成・活用、議論・討論のスキルなど、学問の技術的側面に磨きをかける。同時に、「自分にとっての他文化」に関する調査研究の成果を論文にまとめることで、「自文化」観を問いなおす。「他文化探し」とは、翻って「自分探し」でもある。この作業を、20歳前後で試みることの意義は、非常に大きい。

スケジュール

- 第1回 サブゼミA・B・C班分け、自分史ガイダンス@PC室
- 第2回 自分史作成@PC室(プレゼン10分・質疑応答5分)
- 第3回 自分史発表@PC室
- 第4回 自分史発表@PC室
- 第5回 進級論文ガイダンス、必読文献検索@PC室&図書館
- 第6回 個人研究発表(A班) 研究テーマに関する「必読文献」のうち数冊の要点をまとめて報告(発表15分、質疑応答5分)
- 第7回 個人研究発表(B班) 研究テーマに関する「必読文献」のうち数冊の要点をまとめて報告
- 第8回 個人研究発表(C班) 研究テーマに関する「必読文献」のうち数冊の要点をまとめて報告
- 第9回 個人研究発表(A班) 研究テーマの目的・意義・着想の背景、重要文献の要点をまとめて報告(発表15分、質疑応答5分)
- 第10回 個人研究発表(B班) 研究テーマの目的・意義・着想の背景、重要文献の要点をまとめて報告
- 第11回 個人研究発表(C班) 研究テーマの目的・意義・着想の背景、重要文献の要点をまとめて報告
- 第12回 個人研究発表(A班) 現地調査の対象・方法・項目・時期・人数などに関する構想(発表15分、質疑応答5分)
- 第13回 個人研究発表(B班) 現地調査の対象・方法・項目・時期・人数などに関する構想
- 第14回 個人研究発表(C班) 現地調査の対象・方法・項目・時期・人数などに関する構想
- 第15回 夏季休暇中の現地調査&文献研究の計画書提出(全員で計画書の内容を確認し助言し合う)
- 第16回 夏季休暇中の現地調査&文献調査の成果に関するスピーチ(全員)
- 第17回 個人研究発表(A班) 全体構想:章立てと各章・節・項の内容の詳細な箇条書き(発表15分、質疑応答5分)
- 第18回 個人研究発表(B班) 全体構想:章立てと各章・節・項の内容の詳細な箇条書き
- 第19回 個人研究発表(C班) 全体構想:章立てと各章・節・項の内容の詳細な箇条書き
- 第20回 個人研究発表(A班) 夏季調査中に収集した事例の紹介と分析(発表15分、質疑応答5分)
- 第21回 個人研究発表(B班) 夏季調査中に収集した事例の紹介と分析
- 第22回 個人研究発表(C班) 夏季調査中に収集した事例の紹介と分析
- 第23回 個人研究発表(A班) 結論・序論・要旨(発表15分、質疑応答5分)
- 第24回 個人研究発表(B班) 結論・序論・要旨
- 第25回 個人研究発表(C班) 結論・序論・要旨
- 第26回 論文の推敲作業:全員
- 第27回 論文の仮提出:全員
- 第28回 進級論文発表練習:全員@PC室

教科書・参考文献

教科書 個人研究の進捗状況に応じてそれぞれに指示する。

参考書 綾部恒雄・桑山敬己編 『よくわかる文化人類学 第2版』 ミネルヴァ書房

授業外での学習

論文作成のためのフィールドワーク(参与観察、アンケート調査、インタビュー調査、ライフヒストリー調査)は、基本的に各人がそれぞれに、授業外の都合のよい日時に実施する。そのためにも、普段から、様々な媒体を通じて情報・データを収集する習慣、そしてメモを取る習慣を身につけておくこと。

評価方法

ゼミでの活動(自分史・個人研究の発表、論文の完成度、出席状況など)を総合的に判断して評価する。個人研究および論文のテーマ設定に際しては、視点の独創性をとくに高く評価する。

履修上の注意

「常識」を疑って、自分の目と耳と足で確かめる文化人類学の方法を、十全に理解しておくこと。そのためにも、講義科目「文化人類学/比較文化論」もしくは「宗教学」のどちらか一方または両方を事前に履修しておくことが好ましい。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

准教授 木暮 律子 (コグレ リツコ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分
必修

単位数

開講時期
通年

目的

本演習では、多言語・多文化状況にある社会の実態を取り上げ、多文化社会における問題とその背景、解決策を検討しながら多文化共生に向けた地域づくりについて考察する。また、異文化接触場面で生じるコミュニケーション上の問題から日本人の言語行動や外国人の話す日本語の特徴を学び、よりよいコミュニケーションを成立させるための方法について探っていく。
前期はグループ研究に関する文献を読んで、研究方法を学びながら調査の計画を立てていく。後期はグループ研究の分析を行い、報告書の作成を通して論文の書き方を学ぶ。

達成目標

- 1) 異文化コミュニケーションに関する基礎的な知識と研究方法を身に付ける。
- 2) 多言語・多文化社会について理解し、多文化共生社会の実現に向けた課題を提示できるようになる。
- 3) 卒業研究につながる研究テーマを確立し、適切な調査方法が選べるようになる。

スケジュール

【前期】

- 第1回 ガイダンス(進め方・スケジュールの確認)
 - 第2回 グループ研究(テーマ設定)、文献紹介
 - 第3回～第7回 グループ研究(文献報告と討論)
 - 第8回～第10回 グループ研究(調査計画の立案、計画書の作成)
 - 第11回～第15回 グループ研究(調査に向けた作業、グループ討議)
- 夏休み：調査の実施

【後期】

- 第16回 ガイダンス(進め方・スケジュールの確認)
 - 第17回 グループ研究(調査概要の報告)
 - 第18回～第23回 グループ研究(調査結果の分析・考察)
 - 第24回～第29回 グループ研究(報告書の作成)
 - 第30回 報告会の準備
- 春合宿：調査の報告会

教科書・参考文献

教科書 特に指定しない。

参考書 ゼミ生の関心に応じて必要な文献を随時紹介していく。

授業外での学習

毎回必ず予習をして授業に臨むこと。自分の担当箇所だけでなく、他のゼミ生の担当箇所についても問題意識を持って十分な準備をしてくること。

評価方法

受講状況・ゼミ活動への貢献度(30%)、発表・レジュメ(20%)、グループ研究への取り組み方(20%)、レポート(30%)を総合的に判断して評価する。

履修上の注意

遅刻・欠席厳禁。やむを得ず欠席する場合は必ず事前に連絡すること。
ゼミでの活動に自発的、積極的に参加することで自分を高めていってほしい。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

担当教員
教授 櫻井 常矢 (サクライ ツネヤ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次	単位区分	単位数	開講時期
3	必修	4	通年

目的

生涯学習・社会教育は、諸個人のキャリア形成、あるいは地域の自治や住民参加、NPOをはじめとする各種の共同実践による地域づくり、社会教育施設運営や教育専門職についてなど、地域と向き合う社会的な組織や実践に幅広い角度からアプローチする研究領域である。本演習では、生涯学習・社会教育の基礎理論への理解を深めながら、現代生涯学習の方向性やあり方について検討する。また日々の地域づくりやそこで繰り広げられる住民の学習は実践的かつ共同的なものであるため、それに学ぼうとする本演習においてもゼミ生全員の参加に基づく演習運営ということを重視する。

達成目標

本演習では、①生涯学習・社会教育に関する基礎理論が理解できること、②現代生涯学習の方向性やあり方について自分なりの知見を得ること、③ゼミ生同士の相互理解や共同関係を構築することを目標とする。

スケジュール

- 第1回：オリエンテーション①（演習の進め方、スケジュール確認）
- 第2回：文献の輪読①（社会教育と生涯学習）
- 第3回：文献の輪読②（子どもの学校外教育）
- 第4回：文献の輪読③（学校教育と社会教育の連携・協働）
- 第5回：文献の輪読④（社会的排除と社会教育）
- 第6回：文献の輪読⑤（学ぶ側に視点を置いた理論）
- 第7回：文献の輪読⑥（社会教育・生涯学習の法制度）
- 第8回：文献の輪読⑦（社会教育の施設と学習の支援者）
- 第9回：文献の輪読⑧（社会教育行政とNPO・ボランティア）
- 第10回：文献の輪読⑨（社会教育・生涯学習計画の創造）
- 第11回：輪読文献の論点整理
- 第12回：事例調査①（調査の視点について）
- 第13回：事例調査②（情報収集）
- 第14回：事例調査③（ヒアリング項目の整理）
- 第15回：前半のまとめ・小括
- 第16回：オリエンテーション②（演習の進め方、スケジュール確認）
- 第17回：事例調査④（調査のまとめ1）
- 第18回：事例調査⑤（調査のまとめ2）
- 第19回：事例調査⑥（総括討論）
- 第20回：事例調査⑦（調査報告書の作成イメージ）
- 第21回：文献の輪読⑩（ソーシャルキャピタルと社会教育1）
- 第22回：文献の輪読⑪（ソーシャルキャピタルと社会教育2）
- 第23回：文献の輪読⑫（持続可能な地域経営と社会教育1）
- 第24回：文献の輪読⑬（持続可能な地域経営と社会教育2）
- 第25回：文献の輪読⑭（社会教育施設の再編と地域づくり1）
- 第26回：文献の輪読⑮（社会教育施設の再編と地域づくり2）
- 第27回：卒業論文の作成①（論文作成の手順）
- 第28回：卒業論文の作成②（各人の問題関心とテーマ設定）
- 第29回：卒業論文の作成③（各人の問題関心とテーマ設定）
- 第30回：演習Iのまとめ

教科書・参考文献

教科書 受講生とともに検討する。

参考書 ゼミ生の理解度や興味に応じて、適宜紹介する。

授業外での学習

次回の演習範囲に関連する内容について、演習内で指定（配布）した資料などをよく読んで予習をしておくほか新聞やニュースなどからも積極的に情報収集すること。また、演習後は必ずノートや配布資料に目を通し学習内容の定着を図ること。

評価方法

演習への取り組み姿勢、発表内容等を総合的に判断して評価する。

履修上の注意

本演習では文献講読を基本とするが、発表、コメント、そして演習全体のコーディネーター役など、講読体制も工夫し全員参加での演習づくりを心がけること。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

教授 佐藤 彰彦 (サトウ アキヒコ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

本ゼミでは、地域社会で生起している出来事が一体、どのような構造・要因によって生じているのかを社会学的な視点から読み解いていきます。私たちの社会で起きている事柄には、必ずそこに関与する人や組織が存在し、さらに、慣習や制度など社会に組み込まれたシステムが作用しています。すなわち、「身の回りの出来事から社会の構造を読み解く」ことを学んでいきます。より具体的には、卒論を念頭に、地域社会学にかんする基本書やゼミ生の研究に関係する専門書などの輪読を通して、研究の基礎的な力を養います。また、研究作法、調査研究計画の立て方、社会調査方法などのスキルとともに、基本的なプレゼンテーションの方法を学びます。

達成目標

- ・ 基本的な調査研究作法を習得し、自ら計画を立て遂行することができる。
- ・ 地域社会で生起している出来事を、社会構造的に読み解き、説明することができる。
- ・ コミュニケーションならびにプレゼンテーションの基本的スキルを習得し、実践できる。

スケジュール

- 第1回 ・ インタロダクション (ゼミの進め方、役割分担、輪読書についてほか)
第2回 ・ 各自の研究テーマ報告
第3回 ・ 輪読とディスカッション
~8回 (この間、各自、研究テーマの絞り込み作業：文献調査などを随時行う)
第9回 ・ 途中で、各自、研究構想と文献調査の結果を報告
~13回 輪読とディスカッション / 社会調査の基本を学ぶ
- 第14回 ・ 各自、研究構想と文献調査の結果を報告
~15回
- ・ 【共同FW】 夏季合宿 (長野県信濃町) グループごとに現地調査~まとめ~発表、役場等総評
 - ・ 【卒論】 テーマ設定、先行研究を踏まえた問い・仮説づくり、作業計画の検討
 - ・ 【卒論】 作業計画にもとづいた研究調査
 - ・ 【卒論】 輪読してみたい専門書を精査
- 第16回 ・ 各自、研究調査作業の進捗を報告、ディスカッション
~17回
- 第18回 ・ 各自の研究テーマに関係する専門書の輪読、ディスカッション
~25回
- 第26回 ・ 各自、卒論に向けた構想発表 (問題所在、問い / 仮説、目次、序章~先行研究の執筆)
~30回

教科書・参考文献

教科書 輪読書はゼミ生の希望をふまえて決定する。

参考書 必要に応じて紹介。なお、地域社会学の入門教科書：森岡清志『地域の社会学』（有斐閣アルマ、2008）。同様に社会学：秋元律郎ほか『新版社会学入門』（有斐閣新書、1990）。

授業外での学習

研究テーマが決まるまでは、誰もが大海を彷徨い「抜け出せないのでは……」と悩みます。日々、色んなことに興味・疑問を持ち、自分の研究関心に引きつけながら問い続けましょう。やがてテーマが確定します。その時、すでに研究 (卒論) の8割は完成しています。でもそれは、日々の勉強の積み重ねでしか達成できません。

評価方法

ゼミでの活動を総合的に判断して評価する。

履修上の注意

社会学、地域社会学、都市社会学、農村社会学、コミュニティ振興論のいずれか、もしくは複数科目を履修していること。
その上で、他の履修科目の受講に際しても、社会学的な観点から批判的な解釈に努める。あるいは逆に、社会的な考え方を批判的に捉えるよう、習慣的に心がけてほしい。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

教授 佐藤 公俊 (サトウ キミトシ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

演習Iにおいては政治学、行政学の基礎理論を学び、その上で政策過程分析の方法を習得する。研究対象は主に地方の政治、政策過程であるが、中央レベルの政治や政策過程も取り扱う。演習は基本的には(1)指定された文献について担当者がパワーポイントを用いて報告する、(2)報告の内容について議論を行う、(3)ゼミ員を少数のグループに分け各グループが設定した政策課題の解決策についてのプレゼンテーション・バトルを行う、(4)政策ディベートを行う、(5)各自研究課題を設定し、卒業論文のための準備を行う、といった内容となる。

達成目標

佐藤ゼミは、政治学、行政学の専門的知識を習得し使いこなすことができるようになることを目標とする。その過程で、今まで経験のないほどの質的量的に濃密な思考の機会を提供し、さらに様々な課題を解決して行く過程を通じて組織の円滑な運営を行う技量を養うことをも同時に目指す。最終的には(1)政治学・行政学の専門家としての入り口にたつこと、(2)社会人、市民としての最低限の素養を身につけること、以上を目指す。

スケジュール

【前期】

- (1) ディベート(4月:ゼミ内ディベート(第1、7回))
- (2) 自治体政策課題の調査、分析(4月、第2回)
- (3) (2)に関する個人研究個人プレゼンテーション(4~6月(第2回~6回))
- (4) 基本テキストの輪読(5、6月、第8回~9回)
- (5) 合同ゼミ合宿のためのグループ共同研究論文作成(6月以降(第10回~14回))
- (6) 合同ゼミ合宿のためのグループ共同研究論文報告(7月(第15回))

【後期】

- (1) 応用テキストの輪読(9~10月(第1回~4回))
- (2) 第1回卒業論文中間発表でのコメント(11月(第5、6回))
- (3) 共同研究(GW)調査、分析(11月(第7回~10回))
- (4) 共同研究(GW)プレゼンテーション(第11回~13回)
- (5) ゼミ合宿(12月:茨城大学、富山大学との合同ゼミ合宿)における研究報告
- (6) 第2回卒業論文中間発表でのコメント(1月(第14回~15回))

教科書・参考文献

教科書 適宜指示する。

参考書 適宜指示する。

授業外での学習

ゼミはアウトプットの場合なので、事前準備をしっかりと行うこと。またゼミ終了後速やかに問題点の解決を図ること。

評価方法

ゼミにおける活動を総合的に評価する。

履修上の注意

特になし。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

教授 佐藤 徹 (サトウ トオル)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

人口減少、少子・高齢化、住民の価値観の多様化、財政危機の深刻化等により行政には、住民に対する説明責任、サービスの効率化、成果重視の行政運営が求められている。こうしたなか、行政はいかにして住民ニーズに対応した政策を立案・実施すればよいのだろうか。また、行政はどのようにNPOや民間企業などと連携・協働しながら地域課題の解決や公共サービスの提供を行えばよいのか。本演習では、上記の諸課題に対し「行政経営」「都市政策」「政策評価」「住民参加・協働」などを研究テーマとして、理論と実践の両面からアプローチしていく。

達成目標

4年次における卒業研究の準備段階として位置づけられる。したがって、地域政策、自治体政策に関して幅広い基礎知識を学習するとともに、本ゼミの特徴であるリサーチ・プロジェクト (Research Project :RP) を通じて学術研究の進め方、仮説の定立・検証、政策分析手法、アンケート設計、データ分析、インタビュー調査などについても体得することをめざす。

スケジュール

【前期】

- 第1回 今年度の計画の概観
- 第2～4回 リサーチ・プロジェクト (RP) のテーマ検討、決定
- 第5～6回 「研究とは何か」「学術論文とは何か」について考える
- 第7～9回 テキストの輪読、プレゼンテーション
- 第10～13回 文献の調査と読み込み
- 第14～15回 論点整理ワークショップ、夏合宿 (8月又は9月、2泊3日) を有意義に行うための準備など

【後期】

- 第16～18回 リサーチテーマに関する仮説の設定
- 第19～24回 自治体へのアンケート調査の設計、作成
- 第25～28回 自治体へのヒアリング調査の準備・実施 (11月又は12月)
- 第29～30回 仮説検証と考察、まとめ

教科書・参考文献

教科書 受講時に指示する。

参考書 その都度指示する。

授業外での学習

新聞やニュースなどに関心を持って、積極的に行政や政策に関する情報の収集に努めること。授業後は、関連文献などを適宜参照し、学習内容の定着を図ること。

評価方法

課題 (文献調査、プレゼンテーション等) の遂行 (50%) , ディスカッションでの発言 (50%) 。

履修上の注意

ゼミの詳細は研究室ホームページ等を参照のこと。具体的な研究内容を知りたい場合は、同ホームページに掲載された書籍・論文、これまでにゼミで使用したテキストなどが参考になる。またゼミ生が主体となって運営するFacebook、twitterを参照されたい。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

教授 佐藤 英人 (サトウ ヒデト)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

現代の都市問題に焦点をあて、都市地理学や経済地理学の視点から問題を提起し、解決する方法を検討して、自らの研究成果を発表する手段を学ぶ。毎回数名から報告を求め、その報告をもとに討論する。前期は各自の問題関心に基づいて文献研究を行い、後期は卒業論文に向けた立論ならびに調査方法を議論する。

達成目標

発表や討論を通じて、問題自己発見能力、問題自己解決能力、プレゼンテーション能力の素養を高めることが本講義の目標である。

スケジュール

【前期】	第1回目	前期のガイダンス
	第2回目	問題関心についてのプレゼンテーション (1)
	第3回目	問題関心についてのプレゼンテーション (2)
	第4回目	問題関心についてのプレゼンテーション (3)
	第5回目	文献リストの作成 (1)
	第6回目	文献リストの作成 (2)
	第7回目	文献研究 (1)
	第8回目	文献研究 (2)
	第9回目	文献研究 (3)
	第10回目	文献研究 (4)
	第11回目	文献研究 (5)
	第12回目	文献研究 (6)
	第13回目	調査実務の検討 (1)
	第14回目	調査実務の検討 (2)
	第15回目	前期のまとめ
【後期】	第16回目	後期のガイダンス
	第17回目	夏季休業中の調査報告 (1)
	第18回目	夏季休業中の調査報告 (2)
	第19回目	夏季休業中の調査報告 (3)
	第20回目	改善点・修正点の検討 (1)
	第21回目	改善点・修正点の検討 (2)
	第22回目	改善点・修正点の検討 (3)
	第23回目	改善点・修正点の検討 (4)
	第24回目	改善点・修正点の検討 (5)
	第25回目	改善点・修正点の検討 (6)
	第26回目	卒業論文に向けた立論 (1)
	第27回目	卒業論文に向けた立論 (2)
	第28回目	卒業論文に向けた立論 (3)
	第29回目	卒業論文に向けた立論 (4)
	第30回目	後期のまとめ

教科書・参考文献

教科書 教科書は特に定めない。

参考書 梶田真・加藤政洋・仁平尊明編著『地域調査ことはじめ-あるく・みる・かく』、ナカニシヤ出版、2007、257p ※参考文献は講義中に適宜紹介する。

授業外での学習

世の中で起こっている出来事に関心を持ち、自分自身の意見や考えを整理しておくことが望ましい。また、各自でさまざまな地域に赴いて、地域を見る目を養ってほしい。

評価方法

プレゼンテーションの内容、討論への参加度、レポートの完成度等によって総合的に評価する。

履修上の注意

出席に自信のない者の履修は認めない。発表者が無断欠席した場合、履修停止 (不合格) となるので注意すること。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

講師 鈴木 耕太郎 (スズキ コウタロウ)
担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分

単位数
4

開講時期
通年

目的

本演習では、日本国内（できれば群馬県内）の民俗事例（習俗・信仰・祭祀・伝説など）について歴史的背景を探るとともに、その民俗事例が人々にどう影響を与え、また現在にはどのような意味があるかを検討する。なお、テーマは各自で設定してもらう（統一テーマは設けない）。
学問領域でいえば、いわゆる民俗学を中心に据えるが、フィールドワークを伴わない形でのテーマ設定も可能とする（その場合は、いわゆる説話文学や神話学領域になる）。
なお、卒論執筆まで1年となっていることを踏まえ、前期は研究史をきちんと抑えることに全力を注ぐ（輪読中心）。夏休みを挟んで後期からは各自が卒論で取り上げたいテーマについて、発表してもらう。

達成目標

以下2点を最低限の達成目標とする。

1、方法論・研究史・課題の整理と提示

…自分がやろうとしている研究が過去どう扱われ、また今どのような課題が残されているのか、自分は何をし

スケジュール

【前期】

第1回 ガイダンス・1年間のスケジュール把握

第2回～第7回 各自、気になる論文の提示と輪読（1）

第8回 前期フィールドワーク（巡見） ※土日におこなう。

第9回～第14回 各自、気になる論文の提示と輪読（2）

第15回 前期総括

※学期末にレポート提出

※夏期休暇中の課題あり

【後期】

第1回～第2回 夏期休暇中の課題に関する発表

第3回～第8回 各自、卒論予定となるテーマでの発表（1）—何をやりたいのか・どこが問題か・研究史はどうか

第9回 後期フィールドワーク（巡見） ※土日におこなう。2年生基礎演習と合同。

第10回～第15回 各自、卒論予定となるテーマでの発表（2）—(1)をうけて、選んだテーマの可能性と現段階での考察

※学期末に4年生時を見越した1年先の学習計画を提出してもらう。

教科書・参考文献

教科書 指定しない。

参考書 事前には指定しない。必要なものは適宜、指示する。

授業外での学習

輪読に際しては担当外であっても質疑などが出来るように必ず本文を読み込んでおくこと（疑問点や詳しく説明が聞きたい点などは各自、メモを取るなりしておくこと）。

評価方法

日常評価点（60%）+成果点（40%）。日常評価には、ゼミへの参加態度、発表担当会の出来や質疑に対する受け答え、他者発表時の積極的な質疑や議論への参加度合などで判断。成果点は、前期末のレポート・後期開始直後（夏期休暇中課題）のミニレポート・後期末の4年生進学時を見据えた学習計画の内容から判断。

履修上の注意

1、無断欠席などは成績評価に直接響く。発表担当時のドタキャンはゼミ出席停止—単位不認定につながるので注意。

2、自分の担当・担当外にかかわらず、輪読などで指定された文献や論文は必ず一読し、自分なりにどこがわからなかったか、またどこに興味を持ったかをメモしておくこと。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

教授 高橋 伸次 (タカハシ シンジ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

現代のスポーツは、大衆化や高度化とともに、さまざまな価値や概念が認められる多様性をも、その背景としている。したがって今日のスポーツを理解するためには、スポーツそのものだけでなく、それを取り巻く社会環境の変化やそこで生きる人びとのスポーツへの関わり方を理解する必要がある。
そこで本演習は、「スポーツと現代社会」というテーマに対して多角的な接近を試み、スポーツという人間文化が、社会や人びとのものとして機能するための政策的視点を模索し、もってそれが表現できるスポーツ研究へと方向づけることを目的としている。

達成目標

スポーツに関するさまざまな資料や文献にあたることでスポーツへの科学的視点をもたせ、スポーツ研究への発想を導く。また、資料の整理や報告の技術を高める。

スケジュール

【前期】

第1回目～15回目 文献購読・報告・討議
夏期合宿 (研究視点の報告・討議)

【後期】

第16回目～18回目 研究視点の設定
第19回～30回目 研究視点に関する関係資料の収集・報告・討議

教科書・参考文献

教科書 適宜指示する。

参考書 適宜指示する。

授業外での学習

新聞、雑誌、テレビ等のスポーツ情報の収集。

評価方法

出席状況、受講態度、報告の内容等を総合的に判断して評価する。

履修上の注意

スポーツ研究に繋がるスポーツ的発想は、スポーツの経験を通して導かれるものである。したがって、積極的なスポーツ活動をしている学生の参加を希望する。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

准教授 高橋 美佐 (タカハシ ミサ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

本演習では、意思決定問題のための確率、オペレーションズ・リサーチ (OR) 分野の基本理論を学び、実際に応用する力を養う。自治体、企業などの組織や個人は将来の計画や日常の運営においてさまざまな意思決定が必要になる。たとえば企業の生産・販売活動で何をどれくらい作ればよいか、リスクを分散するために何にどのくらい投資すればよいか等の問題である。このようなときORでは、必要な情報を集め、問題の構造を明確にして(モデル化という)、確率、統計やコンピュータシミュレーションの数理的分析をおこない、意思決定のための判断材料を提供する。テキストで基本理論と手法を勉強し、卒業論文で実際の問題に取り組むことで、情報収集、問題の明確化から分析までの一連プロセスを経験する。

達成目標

1. テキストの輪読等を通して、統計学や数理科学分野の基礎に関する学習方法を身につける。
2. 数理的手法とモデル化に関する基本的知識を習得し、論理的思考力を鍛える。
3. 問題に応じて、データの収集や分析に関する研究計画をたてる。

スケジュール

【前期】

- 第1回： 前期ガイダンス
第2～9回： テキストの輪読 / ディスカッション
第10～14回： 情報演習 (プログラミング入門)
第15回： 学習の振り返り

【後期】

- 第16回： 後期ガイダンス
第17～19回： テキストの輪読 / ディスカッション
第20～25回： 各自の研究対象の選定と課題設定
第26～29回： データ収集と関連情報や参考文献の調査
第30回： 学習の振り返り

教科書・参考文献

教科書 オペレーションズ・リサーチ、確率・統計学の分野の入門的テキストのいくつかの候補から、ゼミ生と相談して決定する。

参考書 松井泰子ほか『入門オペレーションズ・リサーチ』今野浩『数理決定法入門～キャンパスのOR～』高橋幸雄ほか『混雑と待ち』、森雅夫ほか『オペレーションズ・リサーチ』など

授業外での学習

次回の内容について、テキスト等をよく読み、予習しておくこと。また、授業後は、学習内容を思い出し定着を図ること。特に報告担当者は、十分な事前準備が欠かせない。他のテキストも参考にしたり、教員のアドバイスが必要な場合は早めにコンタクトをとるなどの心がけが必要である。

評価方法

演習での報告内容、参加姿勢、出席状況などをもとに総合的に評価する。

履修上の注意

特になし。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

担当教員
准教授 田戸岡 好香 (タドオカ ヨシカ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分

単位数
4

開講時期
通年

目的

政策やルールを策定しても、思ったような成果をあげられないことがある。昨今では、社会問題を考える際に、人の心の働きを適切に理解することが重要だという指摘があり、社会心理学の研究が注目されるようになってきている。そこで、本演習では、社会心理学の観点から人間行動や心に関する研究を行う。前期では、文献の輪読や論文購読などを通して、社会心理学の基礎知識を習得する。それらの経験を踏まえ、後期には調査もしくは実験の計画を設計し、実施、分析、報告できることを目指す。

達成目標

1年間の演習を通して、心理学の文献を読む力を身に付ける。
受講生自身の手で調査や実験を行うことができるようになる。

スケジュール

前期

第1回 ガイダンス (ゼミの進め方の説明)
第2回～第7回 行動政策学に関する文献の輪読
第8回～第15回 日本語の心理学論文の輪読

後期

第1回～第3回 先行研究の検討
第4回～第8回 調査・実験の企画と準備
第9回～第14回 調査・実験の実施、分析
第15回 研究成果発表会

教科書・参考文献

教科書 特に指定はしない。授業時にプリントを配布する。

参考書 適宜、授業内で紹介する。

授業外での学習

卒業研究に向けて、自分の興味関心を明確にしていくために、さまざまな書籍やメディアから情報を得るようにすること。また、調査や実験の実施には、授業外の取り組みが必要となる。毎週進捗状況を報告しあいながら、着実に研究を進めていくという姿勢を持って欲しい。

評価方法

輪読の際の発表、研究成果の発表、授業への参加意欲などから総合的に評価する。

履修上の注意

「社会心理学」「社会調査(量的調査)」の授業を履修しておくことが望ましい。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

教授 担当教員 坪井 明彦 (ツポイ アキヒコ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次	単位区分	単位数	開講時期
3	必修	4	通年

目的

現在、マーケティングは企業ばかりでなく、非営利組織や地方自治体など、顧客が存在するあらゆる組織にとって必要な考え方となっている。これは、地域にとっても例外ではない。地域には、住民や買い物客、観光客、企業、勤労者など様々な顧客が存在している。しかし今日、多くの地域が中心市街地の衰退、進出企業の撤退、観光客の減少などの問題を抱えている。
本ゼミでは、企業のマーケティングとともに、こうしたさまざまな地域問題に対するマーケティング視点からのアプローチについて、議論し学んでいく。また、理論だけでなく、現実の企業活動や地域の現状についての理解を深めることを目的とする。

達成目標

マーケティングの基本的な考え方を理解するとともに、
①ゼミでの議論や論文執筆・プレゼン大会への参加などのグループ活動、地域活性化に係わる調査やプロジェクトの企画・運営などを通して、チームワークやコミュニケーション能力、論理的思考能力を身につけてほしい。
②テキストや雑誌や新聞記事などから、世の中にどんな企業や仕事があるのかを理解し、視野を広げてほしい。

スケジュール

- 第1回 オリエンテーション (授業の進め方、スケジュールの確認、グループ課題の設定)
- 第2回 マーケティングを学ぶ
- 第3回 競争戦略
- 第4回 セグメンテーションとターゲティング
- 第5回 グループ課題の中間発表①
- 第6回 ポジショニング
- 第7回 消費者行動
- 第8回 マーケティング・リサーチ
- 第9回 地域活性化にかかる調査事業の準備①
- 第10回 地域活性化にかかる調査事業の準備②
- 第11回 グループ課題の中間発表②
- 第12回 新製品開発
- 第13回 価格戦略
- 第14回 流通チャネル戦略
- 第15回 グループ課題の中間発表③
- 第16回 グループ課題の中間発表④
- 第17回 地域活性化にかかる調査事業の企画①
- 第18回 地域活性化にかかる調査事業の企画②
- 第19回 マーケティング・コミュニケーション
- 第20回 ブランド構築
- 第21回 サービス・マネジメント
- 第22回 グループ課題の成果発表①
- 第23回 グループ課題の成果発表②
- 第24回 経験価値マーケティング
- 第25回 リレーションシップ・マーケティング
- 第26回 ウェブ・マーケティング
- 第27回 地域活性化にかかる調査事業の成果発表①
- 第28回 地域活性化にかかる調査事業の成果発表②
- 第29回 卒業論文の書き方①
- 第30回 卒業論文の書き方②

教科書・参考文献

- 教科書 青木幸弘ほか (2015) 『ケースに学ぶマーケティング』有斐閣
廣田章光ほか (2009) 『1からのマーケティング第3版』中央経済社
- 参考書 ゼミ生の理解や興味に応じて適宜紹介する。

授業外での学習

毎回、テキストの演習問題から課題を提示するので、それについて調べたり、考えてくること。

評価方法

ゼミでの発表や質問など授業への貢献度60%、グループ課題への貢献40%で評価する。

履修上の注意

ゼミの時間はゼミ活動の一部にすぎない。ゼミで議論するためには、事前の下調べが不可欠である。
また、地域活性化にかかわるプロジェクトへの参加など、通常のゼミの時間以外の活動も、自身のさまざまな能力を高めるためには必要である。積極的に参加してほしい。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

教授 友岡 邦之 (トモオカ クニユキ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

本演習では、人々の文化的経験に対して地域社会の諸条件が与える影響、および地域社会の活性化にとっての文化的資源の意義を主な研究対象とする。研究対象の具体的な例としては、自治体文化政策の実際、美術館・博物館・文化ホールなどの文化施設の運営、フェスティバルやイベントの実施効果、地域文化・伝統芸能の現代的意義、コミュニティおよびコミュニケーション環境の現状、そして文化政策をめぐる思想的問題などが挙げられる。「文化」は、単に私たちの個々の人生を豊かにしてくれるものというだけではない。それをめくっては、社会の情報化やグローバル化が進展する中で、さまざまな問題が発生してもいる。文化的経験と社会的要因、特に「地域性」という、情報化・グローバル化に対立する要因とが、どのように結びつき、何を帰結するのかについて、なるべく広い視野から検討することにしたい。

達成目標

- ・文化政策や市民の文化活動に関する諸事例、文化理論についての理解を深める。
- ・3年次から進級論文を執筆することを通して、自ら問いを立てることの難しさを知る。
- ・様々なデータを収集し分析するための技法を学ぶ。
- ・自己の主張を論理的で説得力のある文章で表現する。

スケジュール

- 第1回 現段階での研究構想の説明
- 第2回 研究テーマの妥当性の検討(1)
- 第3回 研究テーマの妥当性の検討(2)
- 第4回 研究テーマの妥当性の検討(3)
- 第5回 研究テーマの妥当性の再検討(1)
- 第6回 研究テーマの妥当性の再検討(2)
- 第7回 研究テーマの妥当性の再検討(3)
- 第8回 先行研究の調査(1)
- 第9回 先行研究の調査(2)
- 第10回 先行研究の調査(3)
- 第11回 先行研究の再調査(1)
- 第12回 先行研究の再調査(2)
- 第13回 先行研究の再調査(3)
- 第14回 研究の方向性の確認
- 第15回 夏季休暇期間中の調査計画の確認
- 第16回 夏季休暇期間中の調査についての結果報告
- 第17回 研究テーマの妥当性の再検討(1)
- 第18回 研究テーマの妥当性の再検討(2)
- 第19回 研究テーマの妥当性の再検討(3)
- 第20回 進級論文構成案の発表(1)
- 第21回 進級論文構成案の発表(2)
- 第22回 進級論文構成案の発表(3)
- 第23回 研究の方向性の最終確認
- 第24回 執筆状況の報告・添削(1)
- 第25回 執筆状況の報告・添削(2)
- 第26回 執筆状況の報告・添削(3)
- 第27回 進級論文の提出
- 第28回 進級論文合評会(1)
- 第29回 進級論文合評会(2)
- 第30回 進級論文合評会(3)

教科書・参考文献

教科書 特に指定しない。

参考書 適宜指示するが、文化政策論、文化理論、社会学等の領域に関する文献を自発的に読み進めていくこと。また、論文執筆の技法に関する書籍を必ず購入しておくこと。

授業外での学習

自分の研究テーマに関係するものにとどまらず、多くの論文と学術書を読み、論文の執筆技法を当たり前のものとして身につけること。

評価方法

ゼミ活動への参加の積極性、調査研究活動への取り組み方を踏まえ、総合的に評価する。

履修上の注意

聞き取り調査や論文執筆といった作業が必須であることを鑑みると、コミュニケーション能力と文章表現能力に自信のない学生にとってはハードルが高い内容だと思われる。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

教授 中村 匡克 (ナカムラ タダカツ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

少子化による人口減少や高齢化が進展する中で地方自治体は多くの課題に直面しており、政策の企画・立案に關わる高度な人材に対するニーズはますます高まっています。そこで本ゼミでは、地域政策について考える際の土台を築くために、経済学の考え方（特に、政治経済学の一分野である公共選択論）や計量分析の手法を学んでいきます。経済学の考え方は、地域社会が抱えるさまざまな課題を発見したり解決に導くための政策について考えるにあたって、計量分析の手法は、課題の原因や政策の効果を明らかにしたりする際に役立つものです。なお、4年生のときに取り組む卒業研究は、各自の興味・関心にもとづいて選んだテーマに取り組んで構いません。たとえば、過去のゼミ生は、財政・地方財政、地方分権、地域金融、中小企業、環境・景観、まちづくり、観光・交通、スポーツ振興などの問題に取り組んでいます。

達成目標

本ゼミでは、次のような目標を掲げてさまざまな活動を行っています。
(1) お互いの個性を尊重しあい、良いところをさらに伸ばしていこう。(2) 自ら判断して、積極的に行動できようになろう。(3) 社会にでてからも強く生きて行ける、たくましさをも身につけよう。(4) 自分自身をよく見つめ直し、将来、本当にやりたい仕事をみつけよう。(5) 一生の宝となる友人・仲間をつくろう。

スケジュール

- 第1回 インタロダクション (全体・前期) : 概要やスケジュール、評価方法の説明など
- 第2回 ビブリオバトル (1) : 春休み中に読んだ本を紹介し合う!
- 第3回 グループ研究 (1) : 公共選択「学生の集い」に向けた成果の中間発表
- 第4回 テキストの輪読 (1)
- 第5回 テキストの輪読 (2)
- 第6回 テキストの輪読 (3)
- 第7回 テキストの輪読 (4)
- 第8回 グループ研究 (2) : 公共選択「学生の集い」に向けた成果の中間発表
- 第9回 テキストの輪読 (5)
- 第10回 テキストの輪読 (6)
- 第11回 テキストの輪読 (7)
- 第12回 テキストの輪読 (8)
- 第13回 グループ研究 (3) : 公共選択「学生の集い」に向けた成果の中間発表
- 第14回 ビブリオバトル (2) : 前期に読んだ本を紹介し合う!
- 第15回 まとめ (前期) と到達度の自己診断
- 第16回 インタロダクション (後期) : 概要やスケジュール、評価方法の説明など
- 第17回 ビブリオバトル (3) : 夏休み中に読んだ本を紹介し合う!
- 第18回 グループ研究 (1) : 公共選択「学生の集い」に向けた成果の中間発表
- 第19回 テキストの輪読 (9)
- 第20回 テキストの輪読 (10)
- 第21回 グループ研究 (4) : 公共選択「学生の集い」に向けた成果の中間発表
- 第22回 テキストの輪読 (11)
- 第23回 テキストの輪読 (12)
- 第24回 グループ研究 (5) : 公共選択「学生の集い」に向けた準備
- 第25回 グループ研究 (6) : 公共選択「学生の集い」に向けた準備
- 第26回 グループ研究 (7) : 公共選択「学生の集い」に向けた成果の最終発表
- 第27回 グループ研究 (8) : 公共選択「学生の集い」に向けた準備 (予備)
- 第28回 ビブリオバトル (4) : 後期に読んだ本を紹介し合う!
- 第29回 ビブリオバトル (5) : 冬休み中に読んだ本を紹介し合う!
- 第30回 まとめ (全体・後期) と到達度の自己診断

教科書・参考文献

教科書 関連するテキストの中からゼミ生と相談の上で決定します。

参考書 リーディングリストを提示しますが、その他にゼミ生の理解度や興味に応じて適宜紹介します。

授業外での学習

ミクロ経済学やマクロ経済学、財政学、公共選択論、計量経済学などの知識は、サブゼミや自主学習を通じて身に付ける必要があります。また、卒業研究で選定したテーマについて自分なりに学習・調査をする必要もあります。

評価方法

ゼミにのぞむ姿勢や発言から総合的に判断して評価します (100%)。

履修上の注意

教員の担当する科目ならびに関連する科目をしっかりと履修してください。またゼミ活動は多岐にわたるため、授業外での学習時間を必要とします。単位のためではなく、自分を磨きたいと考えている学生を歓迎します。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

担当教員
教授 西沢 淳男 (ニシザワ アツオ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次	単位区分	単位数	開講時期
3	必修	4	通年

目的

地域史は、一つの地域を多角的に考察し、民衆史や生活史のなかから、これから取り組んで行かなくてはならない地域の課題を解明していく研究です。地域の数だけ地域史があります。

前期には、大学のある群馬県の近世史を多様なテーマから概観します。地域の歴史は史料から解き明かされることを学びます。

後期には、原則各自の出身地域の中から興味あるテーマを選び、研究・報告し、次年度の卒論への足がかりとしてもらいます。郷土を理解し多様な地域社会の様相を垣間見ることによって地域の今を知り、地域を考える機会としてもらいたい。

達成目標

地域史研究の方法を学び、各自の関心だけでなく全国各地のゼミ生の報告から多様な地域の歴史があることを理解すること。

卒論テーマを考える契機とする。

スケジュール

- 第1回 オリエンテーション(授業の進め方、スケジュールの確定)
- 第2回 担当教員の専門研究(歴史学の実際を知る)
- 第3回 群馬県の歴史の変遷(国の成立から県庁移転問題)
- 第4回 『史料で読み解く群馬の歴史』(絵図でみる近世の安中城)
- 第5回 『史料で読み解く群馬の歴史』(代官岡上景能と足尾銅山街道)
- 第6回 『史料で読み解く群馬の歴史』(中山道の要衝、碓氷関所)
- 第7回 『史料で読み解く群馬の歴史』(利根川水運と河岸)
- 第8回 『史料で読み解く群馬の歴史』(湯治場、草津温泉の賑わい)
- 第9回 『史料で読み解く群馬の歴史』(三井越後屋からみた天明絹一揆)
- 第10回 『史料で読み解く群馬の歴史』(天明浅間焼け)
- 第11回 『史料で読み解く群馬の歴史』(高野長英と吾妻の蘭学)
- 第12回 『史料で読み解く群馬の歴史』(上州世直しと質物の返還)
- 第13回 『史料で読み解く群馬の歴史』(幕臣小栗上野介と最初の株式会社)
- 第14回 『史料で読み解く群馬の歴史』(維新当初の高崎藩五万石騒動)
- 第15回 『史料で読み解く群馬の歴史』(群馬県会の誕生)
- 第16回 『史料で読み解く群馬の歴史』(高まる国会開設請願運動)
- 第17回 『史料で読み解く群馬の歴史』(全国にさががけた娼妓廃絶の運動)
- 第18回 ~ 20回 『史料で読み解く群馬の歴史』の学習振り返り
- 第21回 ~ 第29回 卒論構想発表表(各人の卒論テーマの予備選定のための報告と討論)
- 第30回 まとめ(演習の総括)

教科書・参考文献

教科書 前期は『史料で読みとく群馬の歴史』(山川出版社)。研究室より貸与します。

参考書 各テーマ、各人に必要に応じて紹介する。

授業外での学習

事前に十分テキストを読み込み、報告に対しての質問ができるようにしておくこと。各報告について新たな知見を得たことの定着を図っておくこと。

評価方法

演習においての報告・発言(70%)、出席状況(30%)等により総合的に判断する。特に、無断欠席・報告のドタキャンは厳正に対処します。平常点で評価する以上、報告は義務であり、定期試験に相当するものであることを明記しておきます。

履修上の注意

ほうれんそう=報告・連絡・相談 これを徹底して下さい。無断欠席、ドタキャンは厳禁です。各自自覚を持って演習に望むこと。これができない人は、履修しないこと。積極的に問題意識を持って発言するようにする。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

教授 西野 寿章 (ニシノ トシアキ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

山村地域を研究するゼミナール。過疎化の進む山村地域の現状を人口、産業、教育、地域社会、文化等から分析し、研究する。研究に当たっては、基本的な文献、論文、資料の輪読を行ったうえで、具体的な調査対象地域を毎年設定し、夏休みに現地調査を行う。現地調査では、面接による住民アンケート、行政、商工会、森林組合農協等へのヒアリングなどを行う。そして後半は、担当分野を分担し、調査データを分析して、調査報告書を作成する。近年の調査地は次の通りである。

2017年度：山形県金山町 2016年度：長野県塩尻市 2015年度：長野県南木曾町 2014年度：群馬県旧万場町 2013年度：群馬県上野村 2012年度：群馬県下仁田町 2011年度：群馬県高山村 2010年度：群馬県片品村、2009年度：群馬県川場村、2008年度：群馬県下の山間集落調査、2007年度：群馬県上野村・神流町

達成目標

事前研究、現地調査、データ分析、補充調査を行い、調査報告書の刊行を目標とする。西野ゼミナールの目標は、「ひとつのことをみんなでやり遂げる」ことにある。チームワークを重視し、一人の言動はゼミナール全体の問題として捉える。研究を通して、協調を覚え、みんなで調査報告書を作り上げる。

スケジュール

- 第1回 前期オリエンテーション 今年度の研究計画の説明、輪読文献の紹介
- 第2回 今年度の地域調査の対象地域と目的について説明。
- 第3回 輪読① 1コマ当たり2人～3人が報告し討論する。
- 第4回 輪読②
- 第5回 輪読③
- 第6回 輪読④
- 第7回 今年度の地域調査の調査項目と分担についての説明。
- 第8回 輪読⑤
- 第9回 輪読⑥
- 第10回 地域調査予備研究報告① 分担毎に事前に調べたことを報告し、共有する。
- 第11回 地域調査予備研究報告②
- 第12回 地域調査予備研究報告③
- 第13回 地域調査予備研究報告④
- 第14回 地域調査予備研究報告⑤ 地域調査調査票の検討
- 第15回 現地調査打ち合わせ
- 第16回 後期オリエンテーション 後期の研究計画について説明する
- 第17回 地域調査アンケート票の集計作業①
- 第18回 地域調査アンケート票の集計作業②
- 第19回 地域調査アンケート票の図表化作業
- 第20回 分担毎の研究報告① 1コマに2～3人が研究報告を行い、討論する。
- 第21回 分担毎の研究報告②
- 第22回 分担毎の研究報告③
- 第23回 分担毎の研究報告④
- 第24回 分担毎の研究報告⑤
- 第25回 分担毎の研究報告⑥
- 第26回 研究報告書の執筆要領と注意事項について説明
- 第27回 研究中間報告会 2～4年生が出席して、研究報告、討論を行う。
- 第28回 地域調査研究報告書の第一次原稿提出
- 第29回 提出された報告書原稿に対する総評、修正要求を行う。
- 第30回 第二次原稿提出。印刷所へ出荷する。

教科書・参考文献

教科書 特に使用しない

参考書 西野寿章(2013)『山村における事業展開と共有林の機能』、原書房、6,700円

授業外での学習

ゼミナールは、能動的に学習、研究を行ってこそ成果が得られる。積極的な学習と研究を進めることを心得ておいてもらいたい。

評価方法

上記の全スケジュールをこなすことが必須である。成績は取り組み態度、研究内容、報告書原稿の内容によって評価する。本ゼミナールは、チームワークが第一なので、協調性を重視する。

履修上の注意

問題意識をしっかりとって、調査、研究にあたってもらいたい。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

教授 新田 浩司 (ニッタ ヒロシ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

憲法、行政法について基本的な理解を深めると共に法的思考（リーガル・マインド）を身に付ける。それにより、法的な価値判断ができるようになるのである。そして、それを表現するためのディベート力が必要となる。基礎知識を身につけた上で、具体的な事件を分析検討するのが判例研究である。

達成目標

受講生は、具体的なテーマについて、自らの考えをまとめ、文章化し、発表し、ディベートを行うことにより各自がリーガル・マインドを身に付け、卒業論文のテーマを明確化することがここでの到達目標である。

スケジュール

- 第1回 ガイダンス（今年度の授業計画、各自の学習計画を立てる）
第2回 文献の輪読①
第3回 文献の輪読②
第4回 文献の輪読③
第5回 グループ発表（担当判例の紹介、質疑応答）
第6回 グループ発表（担当判例の紹介、質疑応答）
第7回 グループ発表（担当判例の紹介、質疑応答）
第8回 デイベート
第9回 グループ発表（担当判例の紹介、質疑応答）
第10回 グループ発表（担当判例の紹介、質疑応答）
第11回 グループ発表（担当判例の紹介、質疑応答）
第12回 デイベート
第13回 グループ発表（担当判例の紹介、質疑応答）
第14回 グループ発表（担当判例の紹介、質疑応答）
第15回 デイベート及び夏季合宿準備
第16回 グループ発表（担当判例の紹介、質疑応答）
第17回 グループ発表（担当判例の紹介、質疑応答）
第18回 デイベート
第19回 グループ発表（担当判例の紹介、質疑応答）
第20回 グループ発表（担当判例の紹介、質疑応答）
第21回 グループ発表（担当判例の紹介、質疑応答）
第22回 デイベート
第23回 グループ発表（担当判例の紹介、質疑応答）
第24回 グループ発表（担当判例の紹介、質疑応答）
第25回 グループ発表（担当判例の紹介、質疑応答）
第26回 デイベート
第27回 グループ発表（担当判例の紹介、質疑応答）
第28回 グループ発表（担当判例の紹介、質疑応答）
第29回 グループ発表（担当判例の紹介、質疑応答）
第30回 グループ発表（担当判例の紹介、質疑応答）

教科書・参考文献

- 教科書 金井洋行＝新田浩司著『プロローグ行政法』八千代出版
別冊ジュリスト『行政判例百選（第7版）I・II』有斐閣
参考書 適宜指示する。

授業外での学習

新聞等のニュースに注目し、法学的見地から分析してみる。記事を切り抜き、どのような法的問題があるのか調べてみる。

評価方法

報告、プレゼンテーション能力：50%、質問に対する応答の仕方：20%、参加態度：10%

履修上の注意

社会における法の役割、とりわけ行政法の果たす役割を具体的な事件を通して立体的に把握するために、毎日の事件、出来事について主体的に考える能力を養うよう努めること。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

教授 福間 聡 (フクマ サトシ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

本ゼミでは、様々な哲学・倫理学文献をゼミ生と共に読み解き、その中で論じられている問題について熟議します。中心的なテーマは「コミュニティにおける正義」であり、このテーマに関連する諸問題、マクロには国家間の正義であるグローバル・ジャスティス（途上国への援助、移民の受け入れ、国際司法、人道的介入）や一国内での財の再分配の問題、またミクロには医療資源の適正な分配や雇用の確保、所得の無条件的最低保障や教育に対する平等の機会といった問題を検討します。こうした「正義」にまつわる諸問題を現代の哲学者（ジョン・ロールズ、アマルティア・セン、ピーター・シンガー、マイケル・サンデル、ジョナサン・ウルフ等）の文献を読解することを通じて、また、メディアやマスコミで取り上げられている社会的な事象を踏まえながら考察します。

達成目標

社会的・公共的な問題について哲学的・倫理的に考察している文献を読み解きながら、いかなる社会が望ましいのか、現代社会の一員としていかに私たちは考え・行動すべきなのかについて考える力を養う。

スケジュール

【前期】

第1回目 インTRODクシヨン 今後の進め方についての打ち合わせ
第2回目～第8回目 指定した教科書の輪読・ディスカッション
第9回目～第14回目 ゼミ生が選択した文献の輪読・ディスカッション
第15回 まとめ
夏合宿の予定

【後期】

第16回目～第26回目 ゼミ生が選択した文献の輪読・ディスカッション
第27回目～第29回目 卒論テーマの絞り込みと構想の発表
第30回 まとめ

* 輪読・ディスカッションで行うこと

- ① 担当部分の考察・発表
- ② 担当者が疑問に思ったことについてのゼミ全体による討議
- ③ 自分の考察・発表に対する反省コメント

教科書・参考文献

教科書 福間聡『「格差の時代」の労働論』（現代書館 2014）
ジョナサン・ウルフ（大澤・原田訳）『「正しい政策」がないならどうすべきか』（勁草書房 2016）
参考書 適宜授業内で紹介します。

授業外での学習

レジュメの担当者以外も文献を熟読し、問題意識を持ってゼミに臨むこと（コメントの提出が必須）。授業後は自分が考えていたことを発言できたか、また参加者の意見を適切に理解することができたかを反省し、次回のゼミでの改善点を明確にすること。

評価方法

ゼミでの活動を総合的に評価して判定します。

履修上の注意

本を読み、映画やドキュメンタリー映像を見たりしながら、社会的な問題に対して常に関心を高めておくこと。またそうした問題を哲学・倫理的な観点から考察するよう努めること。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

教授 細井 雅生 (ホソイ マサオ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

福祉政策は家族政策でもある。この演習では個別のテーマは様々ながら、福祉と家族に焦点を当てることで、メンバーが問題関心を共有していることが多いように思われる。演習では、個々の家族、福祉への「問い」はもちろん、家族依存型福祉の「ひずみ」など、多様な課題が議論されている。児童福祉、母子福祉、障害児や家族介護などが基本的なテーマとなる。各自の発表・討論の積み重ねを通して、参加者各自の「社会福祉学的想像力」の覚醒、各自の経験的生活世界の相対化を基本として、各自のテーマ設定を促していく。個人研究の具体的テーマは里親、児童養護、家族介護、母子・父子家庭、保育、非行、児童虐待、DV、障害児福祉、子育て支援等、各自の興味関心に基づいて取り組んでほしい。

達成目標

細井ゼミでは次のような目標をもって、児童相談所一時保護所の補助員、児童養護施設、児童自立支援施設等の学習ボランティア、群馬県里親会のボランティア、大学祭での知的授産施設のリンゴ販売などさまざまな活動に取り組んでいる。(1) お互いのことばが聴けるようになること (2) 途中で投げ出さず、自分のことばで考えを説明できるようになること (3) 自分のやりたいこと、「たいせつなわたし」を発見する

スケジュール

【前期】

第1回～第4回 演習生の関心分野についての発表 各自30分程度

第5回～第7回 グループ研究 1

・対人援助論としてミヒヤエル・エンデ「はてしない物語」を解読する

第8回 グループ別プレゼンテーションと討議

第9回 教員からのコメントと対人援助についての講義(児童相談所一時保護所補助員、各種ボランティア、

実習等のオリエンテーションを兼ねて)

第10回～第12回 演習生の関心分野についての第2回発表 各自30分程度

第13回～第15回 グループ研究 2

・あるところとこどもが3歳になるまで父母とも働いてはいけない国がありました・・・という書き出しのファンタジーを

その国の社会保障政策を含め、リアルに創作する

・あるところに子どもが中学生になるまでは、里親にあずけなければならない国がありました・・・という書き出しのファンタジーをその国の社会保障政策を含め、リアルに創作する

合宿 夏合宿、前後に施設(9月、2泊3日)など。

見学先は八ッ場ダムと障害者施設シャローム・恵の園を中心に検討

八ッ場ダムについては、水没による代替地の福祉を考える。

グループワーク2のプレゼンテーション

大学祭での展示、プレゼンテーション・リンゴ販売の考え方の検討

・傾聴訓練等

【後期】

第16回～18回 大学祭の準備 内容

第19回 学祭 大学祭でのプレゼンテーションの練習

第20回～第25回 個人研究のプレゼンテーション(1回2名45分)

第26回～第30回 個人研究のプレゼンテーション2回目(1回2名45分)

1月 4年生の卒論発表会リハーサルへの参加

2月 4年生の卒論発表会への参加

2月 卒論テーマ個別面談(希望者のみ)

随時 一時保護所、施設ボランティア等の参加者によるカンファランス セミ開始前に草津重監房資料館の見学

教科書・参考文献

教科書 参加者との相談で決定する。

参考書 各人のテーマに応じて推薦する。

授業外での学習

発表予定のレジュメは二日前までに作成し、教員にメールする。ゼミ中になされた議論のなかでの課題点、疑問点を個々整理すること。

評価方法

ゼミでの学習発表内容、研究合宿、その他活動を総合的に判断して評価する。

履修上の注意

ゼミは通常、4時限目であるが、必要に応じて別に時間をとる場合もありうる。ケースカンファランスその他、興味に応じて学習会を行う。柔軟な思考をもち、自分の盾をおろす機会として参加する意図をもった学生を歓迎する。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

教授 増田 正 (マスダ タダシ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

本演習では、政治学の方法と基本的な理論について学習を進め、演習IIにおいてスムーズに卒論に取りかかれるように準備することを目的とする。資料収集の方法から分析手法の習得までを効率的に学び、必要に応じて助言し合うために、演習生を2、3のグループに編成し、ワークショップ的に作業を進めてもらうことが多い。演習Iでは、夏合宿、社会見学を含め、一つの標準カリキュラムとするが、希望者は演習IIの企画（冬合宿等）にも参加してよい。

参加者は、普段からPCの使用に親しみ、パワーポイント、ワード、エクセル等の基本的なソフトの習熟に努めてほしい。

達成目標

政治学の基礎知識を確実に身に付け、単なる政治評論ではなく、政治学的な思考とそれに基づく、客観的な判断ができるように訓練する。卒業論文の作成に向けた学術技法を習得し、社会問題・政治問題を自分の興味関心に引き付けて積極的に議論できるようにしたい。

スケジュール

- 第1回 前期ガイダンス、役職の決定、活動方針の話し合い
- 第2回 学術論文の技法
- 第3回 社会調査の方法と統計学の基礎
- 第4回 政治理論1（政治学の基礎概念）
- 第5回 政治理論2（政治思想）
- 第6回 政治理論3（政治制度）
- 第7回 政治理論4（民主主義の理論）
- 第8回 政治理論5（国家、議会）
- 第9回 政治理論6（政党と政党制）
- 第10回 書籍紹介1（地方自治の基礎）
- 第11回 書籍紹介2（公共政策の歴史と理論）
- 第12回 書籍紹介3（地域政策学事典）
- 第13回 夏合宿のテーマ設定（選挙の種類）
- 第14回 夏合宿の準備（選挙公報の作成）
- 第15回 総括授業（前期のまとめ）
- 第16回 後期ガイダンス
- 第17回 模擬投票の準備（班分け、下準備など）
- 第18回 模擬投票の準備（公約作成など）
- 第19回 模擬投票の準備（プレゼン発表など）
- 第20回 模擬投票の準備（段取り確認など）
- 第21回 社会見学のための事前学習1（地方議会）
- 第22回 社会見学のための事前学習2（選挙実務）
- 第23回 社会見学のための事前学習3（リーダー研修）
- 第24回 時事問題のプレゼンテーション1（個別報告・グループA）
- 第25回 時事問題のプレゼンテーション2（個別報告・グループB）
- 第26回 時事問題のプレゼンテーション3（個別報告・グループC）
- 第27回 卒業論文のテーマ設定1（選挙啓発）
- 第28回 卒業論文のテーマ設定2（地方議会）
- 第29回 卒業論文のテーマ設定3（条例）
- 第30回 総括授業（演習のまとめ）

教科書・参考文献

教科書 堀江湛編 『政治学・行政学の基礎知識』（第3版）一藝社（2014）

参考書 大山耕輔監修 笠原英彦・桑原英明編著 『公共政策の歴史と理論』ミネルヴァ書房（2013）

授業外での学習

個別報告の準備と発表後のフィードバック、グループ作業の準備・発表内容の集約等について全体の運営方針を確認しながら個別または集団で作業を行う。

評価方法

報告や討論などの主体的な参加度に応じて、平常点で評価を行う。

履修上の注意

欠席時の直接連絡を義務付ける。毎回出席が原則である。演習時間は延長されることがある。希望者は演習IIに参加してよい。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

担当教員
准教授 丸山 奈穂 (マルヤマ ナホ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次	単位区分	単位数	開講時期
3	必修	4	通年

目的

このゼミでは観光と文化、そしてそれにまつわる観光政策について学ぶ。ある地域の文化を観光化するとき、どのようなプロセスを経ていくのが、そのプロセスと政策はどのようにかかわっているのか、観光化は地元住民や文化へどのような影響を与えるのか、そしてどのように観光化したいかを定める権利をもつのは誰なのか、誰が利益を得るのかといったことを考えていく。また、観光が与える影響というのは、地元社会だけに限らない。文化観光は、どのように観光者にどのような影響を与えるのだろうか。本ゼミでは、観光と文化について様々な角度から考察することを目的とする。

達成目標

1. 観光現象を人類学の視点からとらえるための基本的な知識を学ぶ。
2. 各自のテーマについて発表、議論をおこないながら、卒業論文の作成にむけての基礎知識を学ぶ。

スケジュール

第1回	イントロダクション
第2回	輪読 1 (全体)
第3回	輪読 2-1 (グループ)
第4回	輪読 2-2 (グループ)
第5回	輪読 2-3 (グループ)
第6回	輪読 2-4 (グループ)
第7回	輪読 3-1 (グループ)
第8回	輪読 3-2 (グループ)
第9回	輪読 3-3 (グループ)
第10回	輪読 3-4 (グループ)
第11回	グループ研究1
第12回	グループ研究2
第13回	フィールドワークの手法 1
第14回	フィールドワークの手法 2
第15回	グループ研究3 まとめ
第16回	グループ研究 研究計画書の作成1
第17回	グループ研究 研究計画書の作成2
第18回	グループ研究 研究計画書の作成3
第19回	論文の書き方 1 文章の書き方、資料収集方法
第20回	論文の書き方 2 引用の仕方
第21回	論文の書き方 3 研究方法
第22回	論文の書き方 4 アンケート票の作り方
第23回	グループ研究 調査票作成
第24回	グループ研究 中間発表
第25回	グループ研究 分析、執筆
第26回	グループ研究 分析、執筆
第27回	グループ研究 分析、執筆
第28回	グループ研究 分析、執筆
第29回	グループ研究 発表
第30回	卒論に関して

教科書・参考文献

教科書 受講生とともに検討して決定する

参考書 「観光社会文化論講義」 安村克己ほか編
「Tourists and Tourism: a Reader」 Sharon Gmelch 編、その他講義内で適宜指示する

授業外での学習

指定された文献を事前に読み、専門用語を確認し質問事項をまとめてくること

評価方法

ゼミでの活動を総合的に判断して評価する

履修上の注意

ディスカッションへの参加が大切なので、与えられた文献を授業前に読み、テーマについての事前学習をすること

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

担当教員
准教授 宮田 剛志 (ミヤタ ツヨシ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次	単位区分	単位数	開講時期
3	必修	4	通年

目的

日本経済の現局面とそのもとで発現している食料・農業・農村問題に関する研究を行うゼミナールです。脆弱化と再建が並進する農業・農村の現状を分析し、調査研究を行っていただきます。調査研究に当たっては、基本的な文献、論文、資料の輪読を行った上で、具体的な調査対象地域(群馬県内を対象とします)を毎年設定し、夏休みに現地実態調査を行います。現地実態調査では、行政(県庁・農政部、農業指導センター、自治体、農業公社等々)、農協、農業生産者の方々等々へのヒアリングなどを行います。そして、後半は、担当分野を分担し、調査報告書を作成していただきます。具体的には、地域ごとに様々な「顔」を持つ農業構造や地域社会構造の実態について正確な把握を行うことを通じて、地域住民の方々とともにその処方箋を描いていくことです。その際、農業関連の他ゼミ(主に、他大学)と連携しながら現地調査・調査報告書の作成等々を行う場合もあります。

達成目標

事前研究、現地実態調査、データ分析、補足調査を行い、調査報告書の刊行を目標とします。
宮田ゼミナールの目標は、調査研究を通じて、協調性・社会性等の素養を身につけながら、行政(県庁・農政部、農業指導センター、自治体、農業公社等々)、農協、農業生産者等々の全ての皆さんと調査報告書を作り上げていくこととします。

スケジュール

【前期】

- 4月 食料・農業・農村研究に関する意義、研究の視点について講義を行います。
- 5月 基本文献、関連文献、論文の輪読を行い、農業・農村の歴史、現状について理解を深めます。
- 6月 夏休みに実施する農業・農村調査の研究分担のテーマを決定し、調査地域に関わる資料調査を行います。
- 7月 月上旬に予備調査を行い、調査イメージを描いて、行政(県庁・農政部、農業指導センター、自治体、農業公社等々)、農協、農業生産者等々への聞き取り調査の項目について検討し、調査票を作成します。
- 9月 現地実態調査

【後期】

- 10月 行政(県庁・農政部、農業指導センター、自治体、農業公社等々)、農協、農業生産者等々への聞き取り調査の結果の整理を行います。
- 11月 研究分担に基づいて、順次、調査結果、考察すべき点について討論を行います。
- 12月 中間研究報告会を実施します。
- 1月 調査報告書の原稿提出。
- 3月 報告書刊行、研究報告会(場合によっては、農業関連の他大学の研究室と合同)、現地検討会を行います。

教科書・参考文献

教科書 生源寺眞一他『農業経済学』東京大学出版会、1993年、他

参考書 内閣府『経済財政白書』各年次、農林水産省『食料・農業・農村白書』各年次、他

授業外での学習

大学の図書館や関係官公庁等で入手できる統計・資料等は、現地実態調査前に必ず1次整理しておいて下さい。

評価方法

上記の全スケジュールをこなすことが何よりも必須です。成績は取り組み姿勢、研究内容、報告書の内容によって評価を行います。

履修上の注意

問題意識をしっかりと持って、調査・研究に当たることが第一です。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

教授 森 周子 (モリ チカコ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

- * セミナール大会、他大学との合同ゼミナールへの参加に向けて準備を進める。
- * 日本および諸外国における社会政策・社会保障の状況について理解を深める。

達成目標

- * セミナール大会への参加、および、それに向けての準備を通じて、研究力、プレゼンテーション力、論文執筆力などが向上する。
- * 日本および諸外国における社会政策・社会保障の現状・課題・展望について自分なりに分析できるようになる。

スケジュール

【前期】

第1回目	ガイダンス、チーム別話し合い
第2回目	チーム別報告
第3回目から5回目	テーマに関する資料の輪読
第6回目から8回目	チーム別報告
第9回目から11回目	テーマに関する資料の輪読
第12回目から14回目	チーム別中間報告
第15回目	まとめ

【後期】

第16回目から18回目	チーム別中間報告
第19回目から21回目	チーム別最終報告
第22回目から24回目	大会参加予行演習
第25回目	ゼミナール大会反省会
第26回目・27回目	他大学との合同ゼミナールに向けた準備
第28回目	4年ゼミ生との就職懇談会
第29回目	レクリエーション
第30回目	卒論テーマ報告

教科書・参考文献

教科書 棕野美智子・田中耕太郎『はじめての社会保障』有斐閣アルマ、最新版。

参考書 講義中に具体的なテーマに即して適宜紹介。

授業外での学習

ゼミナール大会に向けて、選択したテーマ、および、他のゼミ生が選択したテーマに関する予習・復習、情報収集を欠かさないこと。

評価方法

報告内容 (50%)、質疑応答 (30%)、受講態度 (20%)。

履修上の注意

社会政策・社会保障への問題意識や関心を常に持ち、選定したテーマに関しても幅広い考察・検討を欠かさないこと。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

担当教員
准教授 森田 稔 (モリタ ミノル)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分

単位数
4

開講時期
通年

目的

本講義では、3年次のグループ研究を行ってもらうことを中心に、4年次の卒業論文の作成に向けた準備も行うことを目的とします。

達成目標

本講義の目標は、グループ研究とその報告（外部のコンペへの参加）を通じて、実証分析の方法と論文の書き方、そしてプレゼン能力の向上を図ることを目標とします。

スケジュール

【前期】

第1回目：講義ガイダンス

第2回～14回目：グループ研究&経過報告

第15回目：報告会とコンペ参加に向けたまとめ

（その他：夏合宿を行う予定&フィールド調査として企業・公共施設への見学）

【後期】

第16回～第29回目：グループ研究&コンペ参加に向けた論文・報告資料の作成

第30回目：まとめ

教科書・参考文献

教科書 講義内でアナウンスします。

参考書 講義内でアナウンスします。

授業外での学習

グループ研究の準備&報告資料や論文の執筆

評価方法

ゼミ活動への取り組み状況や報告内容から総合的に評価します。

ただし、無断欠席をした場合にはマイナス9点の減点をします。

履修上の注意

第1回目の講義ガイダンスでアナウンスします。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

准教授 八木橋 慶一 (ヤギハシ ケイチ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

本ゼミでは、社会問題の解決に取り組む新しいタイプの事業組織である社会的企業について学びます。前期は基本文献を輪読し、その内容について議論をします。後期には社会的企業に該当する事業組織（たとえばNPO法人）を実際に訪問し、ヒアリング調査を行います。その調査の結果を発表して討議を行います。学期末には、輪読や調査を通じて得た知見をもとに卒業論文の基礎となるレポートを作成します。ゼミでの学習により、文献やデータの分析力、レポート作成能力、会議での報告や議論に対応できる能力を養うことを目的とします。

達成目標

- ①プレゼンテーション、ディスカッションの能力を高める。
- ②研究論文の作成能力を身に付ける。

スケジュール

【前期】
第1回目 打ち合わせ
第2回目から14回目 基本文献の輪読
第15回目 各自の研究テーマの発表（グループ決定）

【後期】
第16回目から24回目 グループ別のテーマに合わせた輪読
第25回目から30回目 グループ別の調査報告・研究発表

教科書・参考文献

教科書 講義で指示します。

参考書 適宜指示を出します。

授業外での学習

テキストを必ず予習してください。報告準備は入念に行ってください。

評価方法

平常点（受講状況、報告内容など）50%、期末レポート50%

履修上の注意

欠席が多い場合、単位は取得できません。また期末レポートの提出は必須です。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

担当教員
准教授 安田 慎 (ヤスダ シン)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次	単位区分	単位数	開講時期
3		4	通年

目的

本演習では「観光史から地域・社会を考える」という共通テーマで行う。具体的には、「文化」や「伝統」といったものが観光のなかでいかに表現され、地域・社会に関わりを持っていくのか、観光史を調べていくなかで考えていく。そのために、国内外の観光地・観光現象を事例に、旅行記や観光地・観光産業に関連する歴史的な文献・データを用いながら、特定の観光地・観光現象の通時的な展開や社会・地域への影響を明らかにしていく。本演習では、小グループを形成し、関連する文献を収集・分析することを通して、観光史・観光文化に関する学術論文・報告書の作成能力を習得していく。

達成目標

- (1) 関連する情報を収集するリテラシー能力の習得
- (2) 個人・グループで分析する手法の獲得
- (3) 成果を文章として外部に発信していく能力の習得

スケジュール

第1回	オリエンテーション
第2回	【演習】グループ・テーマを考える - 計画から全体像を見る
第3回	【講義】文献悉皆調査
第4回	【演習】情報探索を行う・まとめる：文献悉皆調査
第5回	【発表】文献悉皆調査の結果を発表する
第6回	【講義】文献悉皆調査から内容に入る - 先行研究をまとめる
第7回	【演習】先行研究をまとめる
第8回	【発表】先行研究発表1
第9回	【発表】先行研究発表2
第10回	【講義】演習】研究計画書を作成する
第11回	【講義】先行研究から調査計画を考える - 一次資料を捉える
第12回	【演習】一次資料を探索する
第13回	【発表】一次資料の概要を発表する1
第14回	【発表】一次資料の概要を発表する2
第15回	【演習】ラウンドテーブル - 観光史・観光文化を考える
第16回	オリエンテーション
第17回	【発表】夏休みの成果を発表する1
第18回	【発表】夏休みの成果を発表する2
第19回	【講義】演習】一次資料を読み解いていく
第20回	【発表】一次資料を読み解いていく1
第21回	【発表】一次資料を読み解いていく2
第22回	【講義】論文を書いていく
第23回	【演習】論文のドラフトを書く
第24回	【演習】論文のドラフトを発表する / 議論する
第25回	【演習】アイズプレイク - 観光産業について考える
第26回	【講義】演習】論文を添削する
第27回	【講義】演習】添削内容について議論する
第28回	【演習】報告書の完成稿を示す1
第29回	【演習】添削から報告書の全体像へ
第30回	【演習】ラウンドテーブル - 観光史・観光文化の未来に向けて

教科書・参考文献

教科書 ・ 特になし。

参考書 ・ 岸政彦・石岡丈昇・丸山里美・2016・『質的社会調査の方法 - 他者の合理性の理解社会学』有斐閣

授業外での学習

・ 授業外での取り組み (文献調査・分析・発表準備・報告書作成) や、演習関連のイベント (フィールドワーク、合宿、ゼミ・イベント) がありますので、時間のスケジュールリング、マネジメントはしっかりと行ってください。

評価方法

- ・ 演習内での課題への取り組み (ディスカッション等) : 50%
- ・ 演習外での課題への取り組み (発表・報告書・フィールドワーク等) : 50%

履修上の注意

・ 演習活動は、自らの関与の度合に応じて得るものも変わってきます。ぜひ積極的な取り組みをお願いします。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

教授 吉武 信彦 (ヨシタケ ノブヒコ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

演習の研究テーマは、国際関係論、国際交流史である。国際関係に生ずる様々な問題を理論的、歴史的に解明し、将来を展望することを目的とする。それを通じて、激動する国際関係をみる「眼」を養ってもらいたい。国際的な相互依存関係の進む現在、そうした視点は国内社会の諸問題を考える上でも極めて重要であろう。

達成目標

以下の3点をめざしてほしい。①国際関係の諸問題を批判的に分析できる能力を磨き、自分の意見をもてるようになること。②自分の意見を他人に対して論理的に説明でき、文章でも表現できるようになること。③演習の活動を通して、同期、先輩、後輩との間で切磋琢磨し、コミュニケーション能力を身につけること。

スケジュール

ゼミでは、以下の活動を主に行う。

①国際関係論、国際交流史に関する文献をできる限り多く輪読し、理論的、歴史的な見方を学ぶ。課題の文献は、全員が事前に読み、質問等を考えておくこと。また、文献を輪読した後、その内容に関して毎回レポートを提出すること。

②時事的な国際問題にも関心をもってもらうため、各自テーマ（たとえば、EU、日中関係、アメリカ外交など）を自由に1つ決め、インターネット、新聞、雑誌などを利用して情報を集め、2ヶ月に1回のペースでそのテーマの動向をブリーフィングしてもらう。テーマは、基礎ゼミでのテーマを基本的に延長することが望ましいが、変更も可能。第1回目の講義にて確認するので、それまでに決めておくこと。

③3年生後期のうちに、卒論のテーマを確定し、調査を開始してほしい。そのための報告の機会を設ける。

④フィールドワークとして、国際関係にかかわる場所を訪問したい。

【前期】

第1回目 オリエンテーション（演習の概要説明、進め方、スケジュールの確認）
第2回目～第6回目 専門書の輪読①（国際関係論に関する概説書1）
第7回目～第8回目 ブリーフィング①（各自のテーマに関する報告1）
第9回目～第13回目 専門書の輪読②（国際関係論に関する概説書2）
第14回目～第15回目 ブリーフィング②（各自のテーマに関する報告2）

【後期】

第16回目～第17回目 ブリーフィング③（各自のテーマに関する報告3）
第18回目～第20回目 専門書の輪読③（国際関係論、国際交流史に関する個別文献1）
第21回目 専門書の輪読④（論文の書き方に関する文献）
第22回目 卒論テーマに関する中間報告①（発表、質疑応答）
第23回目～第26回目 専門書の輪読⑤（国際関係論、国際交流史に関する個別文献2）
第27回目～第28回目 ブリーフィング④（各自のテーマに関する1年間のまとめ）
第29回目～第30回目 卒論テーマに関する中間報告②（発表、質疑応答）

教科書・参考文献

教科書 演習で指示する。

参考書 演習で指示する。

授業外での学習

輪読する文献は、各章の担当者以外も事前に読み、内容に関する質問を考えてくること。また、担当者は、章の内容に関して詳しいレジュメを用意し、当日、全員に配布すること。時間があれば、関連文献や資料にも目を通すことが望ましい。

評価方法

試験は行わない。通常の報告（60%）、議論への参加（20%）、レポート（20%）に基づき成績をつける。無断欠席、レポートの未提出は一切認めない。

履修上の注意

演習生は、演習Iと演習IIの両方に参加することが望ましい（サブゼミを兼ねて勉強時間を確保し、先輩・後輩間の関係を円滑にするため）。
随時、フィールドワーク等の行事を行なう予定である。できる限り参加してほしい。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

担当教員
准教授 吉原 美那子 (ヨシハラ ミナコ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

地域の教育は地域の人々とともに作り上げる、地域の教育問題は地域で解決する、学校への関わりを地域住民として深めていく。そのための視座と枠組みを学ぶことが今まさに重要であり、地域で活躍することのできる地域教育のエキスパートの育成、これが日本だけでなく世界各国の共通課題である。そこで「学校と家庭、地域、企業との連携による教育」、「地方分権と教育行政改革」を共通認テーマとして、地域の人々とともに作り上げる地域の教育政策について考察を深めるのが、本演習の目的である。

達成目標

1. 教育に関する基礎的な知識を獲得する。
2. 日本及び諸外国の教育行政の仕組みと問題点を提示できる。
3. 地域社会の変容と教育政策による人材育成の関係を分析し、政策的課題を提起できるようになる。

スケジュール

【前期】

1. ガイダンス (第1回)
 2. 提案型プレゼンテーション (第2回～第4回)
 3. ワークショップからグループ研究へ (第5回～第7回)
 4. 文献購読 (第8回～第10回)
 5. グループ研究とそのプレゼンテーション (第11回～第12回)
 6. フィールドワーク (自治体や教育関連施設) の準備 (第13回～第15回)
- * フィールドワークを実施しない場合は、調査の技法を学ぶ

【後期】

1. グループ研究：フィールドワークの素材をもとにグループごとテーマを設定し、報告書を作成する。(第16回～第18回)
- * フィールドワークを実施しない場合は、講義または調査の技法を学ぶ
2. プレゼンテーション (第19回)
 3. 文献購読とワークショップ (第20回～第25回)
 4. 個人研究のイントロダクションと論文購読：関心のあるトピックを発見し掘り下げる。(第26回～第30回)

教科書・参考文献

教科書 特に指定しない。ただし、第1回の授業にて必要とされる文献等を指示する。

参考書 佐藤郁哉 (2013) 『フィールドワークの技法』新曜社
その他、必要に応じて紹介する。

授業外での学習

プレゼンテーションや文献購読、論文購読には必ず授業外における準備が必要となる。決められた手順に従って資料を準備しておくこと。またプレゼンテーションの後には必ずリフレクションシートを記入すること。

評価方法

プレゼンテーション成果 (30%)、フィールドワークの成果 (30%)、文献購読における課題 (30%)、各発表会における討論内容 (10%) を基準に、最終的には総合的に判断して評価する。

履修上の注意

授業のスケジュールや内容は、履修者の関心や進捗状況によって変更することもあり得るので留意されたい。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

准教授 米本 清 (ヨネモト キヨシ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

都市・地域経済学は経済学の中でも最も現実の世界と密接に関わらざるを得ない分野の一つである。少なくとも短期・中期においては、何が事実上困難なのか、ある政策は当面、誰にどのような影響をもたらすのか、といったことを深く考察しなければならない。

本演習では、都市・地域経済学の理論を応用し、実際の社会・経済問題について分析する。特に、低成長・少子高齢化時代における都市・地域空間構造の変化、中心市街地の空洞化、地域間の人口移動とその要因、災害の地域経済や企業・住民立地への影響を中心に学習を進める。さらに、選好・効用の理論を応用した都市・地域分析の方向性を探る。

達成目標

都市・地域経済学のトピックを主体的に理解し、4年次における専門的な学習・研究の準備を整えることを目標とする。

また地域支援等を通じ、ゼミナールのメンバーとしてコミュニケーション力を高めるとともに、大学におけるアカデミックな世界の空気に触れることで、大学生として成長することを目標とする。

スケジュール

【前期】

第1回～第2回 導入：

受講者の準備状態を確認し、参考書等を選び、今後の研究希望を確認する。

第3回～第9回 輪読：

受講者で基本的な参考書（都市・地域経済学の文献）を輪読し、議論する。

第10回～第12回 グループ研究：

興味の対象に応じ、数班のグループに分かれて研究・発表準備を行う。

第13回～第14回 グループ発表：

興味の対象に応じ、数班のグループに分かれて発表を行う。

第15回 前期まとめ：

後期以降の研究準備をする。

【後期】

第16回～第17回 研究への導入：

研究テーマを仮決定し、発表する（研究にあたっての注意点などを確認する）。

第18回～第23回 研究対象に関する発表：

各自で研究対象の現状やその動向、関連研究・資料などについて調査し発表、受講者で議論する。

第24回～第29回 初歩的な結果の発表：

自ら収集した資料に基づき、初歩的な分析や考察を行ってその結果を発表、受講者で議論する。

第30回 まとめ：

一年間の研究成果をまとめる。

教科書・参考文献

教科書 学生の希望を考慮しつつ、その都度決める。

参考書 その都度、配布する。

授業外での学習

自分の回の発表に備えて学習・研究を行い、スライドの作成を進めること。

評価方法

輪読や研究発表時の発表内容（60%）

その他各行事や全体的な活動状況（40%）

履修上の注意

このゼミナールで学習・研究する内容が、1)卒業後の社会生活において役に立つ、2)学問的な意義を持つ、のいずれかまたは両方になるよう努力してほしい。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

准教授 若林 隆久 (ワカバヤシ タカヒサ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

演習Iでは、①経営学や組織論の知識や考え方を身に付けることと②コミュニケーションに関する能力を高めることを目的とする。世の中のほとんどすべての活動は組織とその経営によって成り立っているため、経営学や組織論の知識や考え方は幅広く活用可能である。そこで、ゼミでの活動を通して、経営学や組織論の知識や考え方を学ぶとともに、あわせて、論理的に考える力、問題を発見・解決する力、自分の意見を表現する力、人と関わる力、といったコミュニケーションに関する能力も高めていく。そのため、座学だけではなく、実務家との関わり、フィールドワーク、ゼミの運営といった実践にも力を入れる。

達成目標

1. 経営学や組織論の基礎的な知識、概念、専門用語、考え方を身に付ける。
2. 現実の企業や組織に対して、それらの考え方を適用し、自分なりの考えを述べることができるようになる。
3. どうすれば他者に自分の考えを上手に伝えられるか、どうすれば他者と円滑に共同作業や議論を行えるかといったことを身に付ける。

スケジュール

【前期】

- 第1回 イン트로ダクション
- 第2～4回 個人と組織の関係性
- 第5～7回 プレゼンテーション
- 第8～13回 テキストの輪読とディスカッション
- 第14・15回 実務家インタビュー

【後期】

- 第16～18回 組織づくり・関係性づくり
- 第19～20回 プレゼンテーション
- 第21回 海外のビジネス
- 第22～27回 テキストの輪読とディスカッション
- 第28・29回 実務家インタビュー
- 第30回 講義のまとめ・振り返り

※ 人数や講義の進行状況などに応じて、講義の順番・回数・内容は変更になることがあります。
※ 学生の希望に応じて、フィールドワーク、ワークショップ、レクリエーション、グループ研究、課題解決型学習、ゼミ合宿などを実施します。

教科書・参考文献

教科書 いくつかの候補の中から受講者と相談して決定する。

参考書 講義の進行状況に応じて、適宜紹介する。

授業外での学習

テキストの該当部分を読み、身近な組織や実在の企業の事例と結びつけて内容を腑に落ちるように理解する。報告の担当となった場合は、レジュメを用意しディスカッションテーマを定めたと上で報告を行う。その他、ゼミの活動内容や運営に関して、準備やグループワークを行う。

評価方法

受講状況および演習での活動状況をもとに総合的に評価する。

履修上の注意

ゼミ内での「つながり」を重視したゼミ運営を行います。学年内だけではなく学年間でも交流を持ちます。ゼミにおける活動・運営・懇親を楽しく積極的に行える人を求めています。活動内容であっても人間関係作りであっても、自分から働きかける意欲を重視します。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

非常勤講師 倪 鏡 (ニイ ジン)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
3

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

(一社)農山漁村文化協会の日中農業交流事業に携わった勤務実績と、(一社)JC総研(現JCA日本協同組合連携機構)での研究経験を活かし、農山村にかかわるフィールドワーク及び問題解決への対応について指導する。

本演習では、3年次に農村調査と報告書の作成を課題としている。そのため、最初は関連図書を輪読する。ディスカッションを重ねていくうち、調査課題を見出し、それに基づき、調査を行う。基本的に地域調査をベースに、課題に応じて小テーマに分け、ゼミ生をグループに分けて実施する。講師は調査計画の作成や調査先との連絡調整などについて、助言とサポートを行う。

達成目標

- 1) 農村地域の実態を把握する。特に調査を通じて、地域政策の課題を見つける。
- 2) 農山村地域振興を担っている行政組織や農協などの地域農業振興政策について、理論的にその有効性を検証する。

スケジュール

【前期】

- 第1回 インタロダクション
- 第2回～第7回 テキストの輪読とディスカッション
- 第8回～第9回 ディスカッションに基づき、調査課題を明確化する
- 第10回 調査課題に基づき、調査のグルーピングを行う
- 第11回～第13回 各グループで調査課題について情報収集と文献整理を行う
- 第14回～第15回 調査準備(調査票の作成、調査先との連絡調整など)

【後期】

- 第16回～第20回 グループごとに農村地域調査を実施(演習時間だけでなく、土日なども活用)
- 第21回～第24回 調査内容の整理と中間報告(必要に応じて追加調査も実施)
- 第25回 調査報告と議論
- 第26回～第30回 調査報告書の作成(必要に応じて現地報告会を開催する)

教科書・参考文献

教科書 特になし。

参考書 必要に応じて紹介する。

授業外での学習

テキストや調査に関する資料を事前に熟読し、理解したうえで演習に出席すること。

評価方法

報告・発表能力：40%、質問の仕方：20%、質問に対する応答の仕方：20%、授業への参加状況：20%

履修上の注意

演習は「受け身」で出席するのではなく、いま自分たちが生きているのがどんな社会で、それがどの方向に向かっているのか、自分がそれに今、そして今後どのように関わっていくのかを日々考えながら出席し、学習するよう心がけて下さい。

なお、欠席時にはメール等で全員に連絡すること。

科目名 演習I
Title Seminar I
科目区分 演習

担当教員
非常勤講師 丸山 宗志 (マルヤマ モトシ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次 3	単位区分 必修	単位数 4	開講時期 通年
-----------	------------	----------	------------

目的

この演習では、観光、地域、文化を主なテーマに、それぞれの領域についての理解を深め、社会学的な思考法や分析方法を身につけることを目標とする。
具体的には、観光社会学、地域社会学に関する文献の輪読と、地域イベントへの参加、地域調査を実施し、調査報告を行う。文献の輪読に際しては、①文献の内容を正確に理解できるようになること、②内容を理解した上で、効果的なプレゼンテーションができるようになること、の2点を目指す。
さらに、地域イベントに参加し、参与観察やインタビュー、調査票調査を行うことで、現在の地域社会や観光の状況を理解し、文献の知識の相対化、今後の可能性の検討などを行う。

達成目標

この演習では、観光、地域、文化を主なテーマに、それぞれの領域についての理解を深め、社会学的な思考法や分析方法を身につけることを目標とする。専門的な知識の習得や、具体的な政策提言能力を身につけてもらうことは当然だが、ゼミでの活動や討論、論文の執筆を通して、今後の自分の生き方=社会のあり方についてもじっくりと考えてもらいたい。

スケジュール

回数	内容	演習の進め方
第1回	イントロダクション	
第2回	各自の研究関心の報告	
第3回	地域社会の成り立ち①	地縁組織の歴史
第4回	地域社会の成り立ち②	地縁組織の現状
第5回	地域社会の成り立ち③	NPOとボランティアの意義
第6回	地域社会の成り立ち④	NPOとボランティアの現状
第7回	地域社会の成り立ち⑤	まちづくりの組織論
第8回	観光研究の視点①	メディア分析 その1
第9回	観光研究の視点②	メディア分析 その2
第10回	観光研究の視点③	観光客動向調査の検討
第11回	観光研究の視点④	観光客動向調査の実施に向けて
第12回	観光研究の視点⑤	観光客動向調査の分析方法
第13回	現代観光の動向①	グローバル化
第14回	現代観光の動向②	インバウンド その1
第15回	現代観光の動向③	インバウンド その2
第16回	各自の調査の現状報告①	
第17回	各自の調査の現状報告②	
第18回	各自の調査の現状報告③	
第19回	各自の調査の現状報告④	
第20回	各自の調査の現状報告⑤	
第21回	観光まちづくりの動向①	地域資源の活用に向けて
第22回	観光まちづくりの動向②	歴史的建造物の活用 その1
第23回	観光まちづくりの動向③	歴史的建造物の活用 その2
第24回	観光まちづくりの動向④	歴史的建造物の活用 その3
第25回	調査報告書の検討①	
第26回	調査報告書の検討②	
第27回	調査報告書の検討③	
第28回	調査報告書の検討④	
第29回	調査報告書の検討⑤	
第30回	調査報告書のプレゼンテーション	

教科書・参考文献

- 教科書 堀野正人ほか著『観光社会学のアクチュアリティ』（晃洋書房、2010年）
橋本和也著『地域文化観光論』（ナカニシヤ出版、2018年）等を予定。授業中に適宜指示する
- 参考書 授業中に適宜指示する

授業外での学習

授業中の指示に従い、予習・復習、報告書の執筆を進めること。

評価方法

文献の理解力とプレゼンテーション能力（50%） 調査活動、調査報告書（50%）

履修上の注意

基本的に授業時間以外に、地域イベントへの参加、調査活動、報告書作成などがあります。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

教授 飯島 明宏 (イイジマ アキヒロ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

本演習では、『持続可能な地域環境の創造』を研究の基軸として、演習Iの内容を踏まえて各自が主体的にテーマを選定し、卒業研究を進める。群馬県庁・群馬県衛生環境研究所での環境研究の経験を活かして、信頼性のあるデータに基づく科学的な分析（環境統計解析）の方法論を指導することにより、客観的に環境問題の実像を捉え、その改善に資する提言に結び付けることができるようになるよう演習する。各自の進捗状況を報告しあい、研究手法の妥当性や結果の解釈等について討論する中で、論理の組み立て方や適切な表現方法を習得していく。

達成目標

- ①演習Iで習得した知識、技能を発展させ、卒業論文を作成する。
- ②環境保全に関わる「専門性」と「分野横断的な俯瞰力」の双方を身につける。

スケジュール

【前期】

- ・卒業研究のテーマ設定（第1回）
- ・研究計画の策定（第2回～第5回）
- ・進捗状況報告（第6回～第9回）
- ・結果の速報（第10回～第13回）
- ・夏季休暇中の研究計画の策定（第14回）
- ・合同研究会（第15回）
- ・夏合宿（フィールドワーク：神流川河川環境調査）

【後期】

- ・中間報告（第1回～第4回）
- ・図表の作成方法（第5回）
- ・参考文献の引用方法（第6回）
- ・クロスレビュー（第7回～第8回）
- ・ピアレビュー（第9回～第10回）
- ・最終校正（第11回）
- ・卒業論文発表会プレゼンテーション準備（第12回～第14回）
- ・合同研究会（第15回）
- ・卒業論文発表会

教科書・参考文献

教科書 指定しない。ゼミ生の理解度や興味に応じて、適宜紹介する。

参考書 環境統計学入門 - 環境データの見方・まとめ方 - 片谷教孝・松藤敏彦 共著 2004 など

授業外での学習

卒業研究ノートを作成し、調査、データ解析等を計画的に進めること。また、必要に応じて研究室にて指導を受けること。

評価方法

卒業研究に対する積極性、演習における報告等を総合的に評価する。

履修上の注意

週1回の演習に加え、課外でのフィールドワークを随時実施する予定である。意欲的にゼミ活動に取り組む学生を歓迎する。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

教授 井門 隆夫 (イカド タカオ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

演習IIでは、様々な観光の現代的課題やイノベーションの必要性といった問題意識をもとに、エスノグラフィの手法をベースとして、卒業論文を計画・執筆していく。計画に際しては、2次データ(文献情報)に加えて1次データ(参与観察、インタビュー、アンケート、実験等)を通じて得られる情報を自ら収集すること。前期は、各自の問題意識の発表と討議を行いながら、具体的なテーマ選定やデータ収集方法の検討等を行いながら、卒論計画書を完成させる。後期は演習に加えて個別指導も実施しつつ、各自リサーチと執筆を行う。

達成目標

- ・ 観光や地域に関する現代的課題をふまえ、その解決策やイノベーションに関する実証的な提言を行うことができる。
- ・ 1次データの収集を通じて、対自己基礎力、対人基礎力、対課題基礎力を向上させる。
- ・ 4年間の問題意識の集大成を卒業論文としてまとめることができる。

スケジュール

- 第1回 オリエンテーション(ゼミの進め方、卒論執筆に関する解説)
- 第2回 第1回発表と討議
- 第3回 第2回発表と討議
- 第4回 第3回発表と討議
- 第5回 第4回発表と討議
- 第6回 第5回発表と討議
- 第7回 第6回発表と討議
- 第8回 各自のテーマ案中間発表
- 第9回 第7回発表と討議
- 第10回 第8回発表と討議
- 第11回 第9回発表と討議
- 第12回 第10回発表と討議
- 第13回 第11回発表と討議
- 第14回 第12回発表と討議
- 第15回 卒業論文計画書発表会
- 第16回 前期のふりかえりと後期のオリエンテーション
- 第17回 リサーチの方法とデータ集計の仕方
- 第18回 経過報告の発表と質疑応答
- 第19回 経過報告の発表と質疑応答
- 第20回 経過報告の発表と質疑応答
- 第21回 中間発表会
- 第22回 卒論執筆と個別指導
- 第23回 卒論執筆と個別指導
- 第24回 卒論執筆と個別指導
- 第25回 ゼミ内卒論発表会
- 第26回 卒業論文の最終チェック
- 第27回 卒業論文の最終チェックと製本
- 第28回 発表準備とシミュレーション
- 第29回 発表準備とシミュレーション
- 第30回 発表準備とシミュレーション

教科書・参考文献

教科書 特になし

参考書 各自のテーマに応じて適宜紹介する。

授業外での学習

データ収集においては教室外での活動がメインとなる。学外の方と接する機会もあるので準備を怠らないこと。

評価方法

発表に関してはプレゼンテーションのルーブリックを活用する(40%)。卒業論文に関しては総合的に内容を評価する(40%)。ゼミへの参加度(20%)。

履修上の注意

就職活動と並行することになるが、就活で欠席の際も事前に必ず連絡すること。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

教授 岩崎 忠 (イワサキ タダシ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

神奈川県職員（総務部、企画部、県土整備部）としての勤務実績及び政策立案・決定・執行・評価の実務経験をいかして、具体的な政策課題への対応や一連の政策過程の視点を中心に演習を行う。
演習IIにおいては、地方自治論、行政学の基礎知識をもとに卒業論文を作成する。研究対象は、自治体政策、国と自治体との政府間関係、自治体組織である。
具体的には、（1）論文作成についての講義（2）論文の骨子<スケルトン>作成（3）論文指導（4）ゼミにおける中間報告、最終報告（5）卒業論文報告会の順に進めていく。

達成目標

演習Iで習得した自治体行政の基礎知識と分析手法をもとに、これまでの学習成果を集大成し、卒業論文を作成する。また、卒業論文発表会に備えてパワーポイントファイルを作成し、プレゼンテーション能力の充実・発展に努める。最終的には冊子としてゼミの卒業論文集を完成させる。

スケジュール

- 第1回 オリエンテーション（演習IIの進め方、スケジュールの確認）
- 第2～5回：卒論のテーマの設定（問題意識の明確化、論文の構成）
- 第6～8回：研究計画の発表と分析手法の精査（ゼミ生を含めた議論）
- 第9～14回：先行研究の調査（先行研究、文献調査に関する情報収集）
- 第15～16回：分析の視点・仮説の設定
- 第17～20回：事例研究（研究に関係する事例を複数調査）
- 第21～24回：複数事例を分析
- 第25～29回：論文のまとめ、加筆・修正
- 第30回：まとめ（演習の総括）

教科書・参考文献

教科書 適宜指示する。

参考書 適宜指示する。

授業外での学習

十分に準備してからゼミにのぞむこと。ゼミで指摘された事項についてすみやかに対応し、次回のゼミに備えること。

評価方法

ゼミにおける活動を総合的に評価する。

履修上の注意

卒業論文に際しては担当教員と十分に連絡をとりあうこと。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

担当教員
准教授 宇田 和子 (ウダ カズコ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分

単位数
4

開講時期
通年

目的

本演習の目的は、各自の関心にもとづいた卒業論文を完成させることである。テーマの選択は自由だが、ディシプリンは社会学に限る。

達成目標

- (1) 自分にとって重要な問いを立てることができる。
- (2) 文献サーベイや現地調査など、適切な手法を用いて研究を遂行できる。
- (3) 自らの問いが有する社会的意義を明らかにし、自分なりに答えを出すことができる。

スケジュール

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回～第5回 卒論テーマ選定について
- 第6回～第9回 卒論構想レポート第一回
- 第10回～第15回 卒論構想レポート第二回
- 第16回 各自の進捗報告
- 第17回～第24回 論文構想レポート第三回
- 第25回～第28回 論文構想レポート第四回
- 第29回～第30回 原稿集約、発表の方法とディフェンスについて

教科書・参考文献

教科書 ゼミ内で適宜示す。

参考書

授業外での学習

調査の準備、実査、調査の片付けなど、ゼミ外の学習時間を確保すること。

評価方法

卒業論文の作成にかけた労力、方法の適切性、論文そのものの完成度、発表の出来で評価する。

履修上の注意

特になし

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

教授 大河原 眞美 (オオカワラ マミ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

法はことばで書かれ、裁判はことばで争われる。演習IIでは、この「ことば」研究の総括を行っていく。演習Iで勉強した、法律用語、法廷用語、法律文、判決文、供述調書、証人尋問、脅迫・詐欺のことば、偽証・名誉毀損のことば、筆者・話者同定、商標の類否、少数言語の言語権などに加えて、演習IIでは「コミュニケーション全般」を広く取上げ、「ことば」をテーマに各自の卒論研究に結び付けていく。

達成目標

卒論の執筆を通して、自分の関心のあるテーマについて、適切な研究方法を使って多くの根拠を示して書き上げる力を身につける。

スケジュール

- 第1回 オリエンテーション(授業の進め方、スケジュールの確認)
- 第2～5回 卒業論文のテーマの設定(問題意識の明確化、論文の構成)
- 第6～8回 研究計画の発表と分析手法の精査(調査に向けた作業、グループ討議)
- 第9～11回 指定されたテキストの輪読(輪読文献の論点整理と今後検討すべき課題の確認)
- 第12～14回 先行研究の調査(先行研究についての現地調査、資料収集)
- 第15～16回 分析、仮説の設定(調査結果の分析、分析を基に仮説設定)
- 第17～20回 文献調査、事例研究(研究テーマに関連した事例の考察)
- 第21～24回 仮説の検証(授業で学んだ手法を用いての仮説の検証)
- 第25～29回 論文のまとめ、修正、加筆(調査、研究についての報告書作成)
- 第30回 まとめ(演習の総括)

教科書・参考文献

教科書 卒論の書き方に関わる本を適宜に紹介する。

参考書 ゼミ生の卒論のテーマに応じて適宜に紹介します。

授業外での学習

図書館に多くある卒論集で、これまでのゼミ生の卒論に批判的に読んでから、毎回のゼミに出てきて下さい。

評価方法

ゼミでの学術的貢献度を中心に総合的に評価します。

履修上の注意

ひらめきを大事にして、それをアカデミックに発展させてください。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

担当教員
准教授 大澤 昭彦 (オオサワ アキヒコ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

都市計画、景観計画を中心とする領域に関わる卒業論文の執筆を通じて、魅力ある都市空間や景観のあり方を考える力を養い、都市計画学を中心とする基礎的な知識および研究方法・視点を習得する。
具体的には、自身の問題意識に基づいて研究テーマを設定し、調査研究を実施する。

達成目標

都市や地域への関心および問題意識を醸成するとともに、論理的な思考方法および論理的に他者へ伝える技術を習得する。

スケジュール

【前期】

第1回～第5回 卒業論文のテーマ設定
第6回～第10回 卒業論文の研究計画の作成、既往研究のレビュー
第11回～第15回 調査・分析

【後期】

第1回～第8回 調査・分析
第9回 中間発表
第10回～第15回 論文作成

教科書・参考文献

教科書 適宜指示する。

参考書 適宜指示する。

授業外での学習

各自の研究テーマについて、自主的に調査研究を行う。

評価方法

卒業論文をはじめとするゼミ活動への取り組み状況をもとに、総合的に評価する。

履修上の注意

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

担当教員
准教授 小熊 仁 (オグマ ヒトシ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分

単位数
4

開講時期
通年

目的

演習Iで決定した交通・観光に関わる自らの研究テーマに沿って、卒業論文を作成するための方法、および論文執筆に関わる指導を行います。毎回数名に進捗状況に関する報告を求め、より早期に論文が完成するよう指導を行います。

達成目標

- ・ 自らの研究テーマについて、問題意識を的確に整理し、研究のスタイルを確立させる。
- ・ 自らの主張を裏付ける資料やデータを的確に活用し、分析する。
- ・ 自らの主張を論理的かつ説得力のある文章で表現する。
- ・ 大学生生活の総仕上げとして自らが納得いく論文を仕上げる。

スケジュール

- 【前期】
- ・ 卒論題目の決定と研究方法の確立
- ・ 各人のテーマに関する口頭発表・個人指導
- ・ 質疑応答
- ・ 中間報告会 (夏休み)
- 【後期】
- ・ 各人のテーマに関する口頭発表・個人指導
- ・ 質疑応答
- ・ 卒論の提出と卒論発表会に向けた資料作成
- ・ 卒業論文集の作成

教科書・参考文献

教科書 講義時に適宜指示します。

参考書 講義時に適宜指示します。

授業外での学習

各人が個別の研究テーマに取り組むことが基本となるので、文献調査、アンケート調査、ヒアリング調査などに積極的に取り組み、そのなかで得られた成果をもとにゼミに臨んで頂きたいと思っております。

評価方法

ゼミへの参加・貢献状況、ならびに研究成果を総合的に判断して評価します。

履修上の注意

無断欠席、および理由のない遅刻、早退は厳禁です。期限に慌てないためにも計画的に取り組んでください。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

教授 片岡 美喜 (カタオカ ミキ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

演習IIでは、卒業論文の完成を到達目標に、ゼミ生各人の課題意識に基づいた個人研究と、それに関わる学習を行なう。特に、論文執筆にあたり、文献精読を通し、分析手法等を重点的に学ぶ。
なお、卒業論文の選択テーマは、これまでのゼミ活動から得たものを活かしながらも、各自の自由とする。
(例：地域社会の観光化とその課題、観光資源の開発・活用・保全保護問題、グリーンツーリズム・エコツーリズム等)

達成目標

最も重要なアウトプットとして、卒業論文の完成を到達目標としている。執筆に係る調査や分析過程を通じ、物事を深く、多角的に見る力を養い、自分なりの地域調査の手法や分析手法を身につけてほしい。

スケジュール

【前期】
第1回 講義ガイダンス
第2回～14回 専門学習
・文献の輪読(LTD手法による学習)
・卒業論文作成に向けての個人研究と進捗状況の報告
第15回 前期期間中の卒業論文中間報告会

その他
・卒論研究会 (1泊2日もしくは2泊3日)

【後期】
第16回～第29回 卒業論文に係る各人の報告と指導
第30回 卒業論文発表会に向けた指導、論文集作成に向けた指導
その他
・春合宿を行なう場合も有り

教科書・参考文献

教科書 演習時に教員より指示を行う。

参考書 各人の研究テーマに沿って、随時紹介する。

授業外での学習

各人による個人研究、文献購読を行うものとする。

評価方法

ゼミ活動への取組状況や成果等、総合的に判断する。特に卒業論文の評価を重視する。

履修上の注意

3年次はグループワークによって、学習・研究を進めてきた。演習IIでは、個人研究となるので、各自がこれまで培ってきたものを活かし、自発的に演習での学習に取り組んでもらいたい。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

教授 金光 寛之 (カネミツ ヒロユキ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

演習Iで学習した民法に関する基本的な理論を基礎として、各学生が主体的に卒業論文の作成を実践する時間である。
また卒業論文の作成をする前に民法とその他の法律との関係を踏まえ、うたえでいわゆる法的な思考を身につけることを目的とする。ゼミ生の主体的かつ積極的な発言および行動に期待をする。

達成目標

卒業論文の作成にむけ、法律に関する様々な問題意識を持つとともに幅広い知識と教養を身につけることを到達目標とする。

スケジュール

【前期】

論文のテーマの設定と文献収集方法
各人の卒業論文のテーマに関する口頭発表
質疑応答
中間報告会

【後期】

各人の卒業論文のテーマに関する口頭発表

教科書・参考文献

教科書 指定しない。

参考書 適宜紹介する。

授業外での学習

卒論作成に関連する文献を適宜読むこと。

評価方法

ゼミでの活動を総合的に判断して評価する。

履修上の注意

ゼミ生の主体的かつ積極的な発言及び行動を期待する。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

担当教員 非常勤講師 河藤 佳彦 (カワトウ ヨシヒコ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

当演習では、「地域資源を活かした地域産業の振興」について探求することを目的とする。すなわち、産業を地域の視点から捉え、地域資源を活かして自律的な発展を促進するための政策について考えることを基本テーマとして取り組んでいきたい。そのためには、背景となる地域経済の特色やその重要な担い手である中小企業の役割について理解することも欠かせない。
研究対象については、製造業、商業といった個別の産業分野、また中心市街地、地場産業地域、企業城下町といった産業において特色のある地域など、多様な視点があつてよい。地域産業の振興という視点から自分の問題意識をしっかりと持ち、各自のテーマに取り組んでいく。

達成目標

地域産業が地域の活力創造に重要な役割を担うことを理解すると共に、各自の研究課題について、文献・資料調査、実地調査などの手法を活用して卒業論文の作成に取り組む。また、論文作成に必要な知識やプレゼンテーションの能力を高める。到達目標は、各自の研究テーマについて卒業論文を仕上げることだが、実質的な最終目標は、自ら課題を見だし、その課題解決のための取組みができる能力を身につけることである。

スケジュール

第1回	研究スキルの講義I	論文作成の重要事項、アンケート調査、ヒアリング調査、実地調査
第2回	研究スキルの講義II	論文作成の重要事項、アンケート調査、ヒアリング調査、実地調査
第3回	各自の研究テーマ	論文構成の報告I
第4回	各自の研究テーマ	論文構成の報告II
第5回	各自の研究テーマ	論文構成の報告III
第6回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第7回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第8回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第9回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第10回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第11回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第12回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第13回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第14回	卒業論文の中間研究会(報告会)	
第15回	卒業論文の中間研究会(報告会)	
第16回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第17回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第18回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第19回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第20回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第21回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第22回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第23回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第24回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第25回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第26回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第27回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第28回	卒業論文発表会に向けた指導	
第29回	卒業論文発表会に向けた指導	
第30回	卒業論文発表会に向けた指導	

※卒業論文提出

教科書・参考文献

教科書 特に指定しない。

参考書 各自の個人テーマに必要な文献や資料については、随時、個別にアドバイスしていく。

授業外での学習

当演習では、各自の個別研究テーマに取り組むことが基本となる。文献調査、実地調査、アンケート調査、ヒアリング調査などに積極的に取り組み、そのなかで得られた成果を基に、ゼミに臨んでほしい。

評価方法

課題意識をしっかりと持ち、少しずつでも粘り強く課題解決に向けた取組みをしてほしい。そして、自らの取組み目標を明確化すると共に、自立して課題解決のための取組みができる能力を、個人研究への取組みやゼミでの討論などを通じて身につける努力をしてほしい。こうした取組みを、総合的に評価する。

履修上の注意

ゼミでは、積極的に自らの意見を出し合い、互いに高め合う努力をしてほしい。自らの実践がなければ、課題解決能力を身につけることはできないことを自覚して、取り組んでほしい。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

教授 熊澤 利和 (クマザワ トシカズ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

前年度後期に設定した各自の卒業研究課題に沿って個別研究を進めます。同時に医療福祉、障害者福祉、高齢者福祉領域におけるより高度な知識の習得を目指します。

達成目標

- ①地域政策における医療福祉、高齢者福祉、障害者福祉等の課題を考究することができる。
- ②ドキュメンテーション能力を向上させることができる。
- ③ゼミ生相互の関係を大切することができる。

スケジュール

- 第1回 はじめに
- 第2回 討論：なぜ、患者と医者はすれ違うのか？
- 第3回 先行研究レビュー（行動経済学関連）
- 第4回 先行研究レビュー（医療福祉関連）
- 第5回 卒業研究の「問い」の深化と仮説形成①
- 第6回 卒業研究の「問い」の深化と仮説形成②
- 第7回 調査実習（コンセプト）
- 第8回 調査実習（調査票作成、又は調査項目作成）
- 第9回 調査実習（調査票作成又は調査項目のワーディング）
- 第10回 調査実習（インタビュー：グループ）
- 第11回 調査実習（データ分析：因子分析）
- 第12回 討論：医療者・社会福祉関連従事者の疲弊感・疲労感について
- 第13回 先行研究レビュー（医療福祉関連）
- 第14回 先行研究レビュー（感情社会学関連）
- 第15回 振り返り
- 第16回 前期の振り返り
- 第17回 研究計画策定 デザインを決める
- 第18回 調査実習（調査票）
- 第19回 調査実習（インタビュー：個人）
- 第20回 調査実習（データ分析：因子分析）
- 第21回 調査実習（データ分析：回帰分析）
- 第22回 先行研究レビュー（障害者福祉関連）
- 第23回 先行研究レビュー（高齢者福祉関連）
- 第24回 医療福祉、高齢者福祉、障害者福祉関連の問題解決をするためのアイデア想起
- 第25回 卒業研究とりまとめ（1巡目）
- 第26回 卒業研究とりまとめ（2巡目）
- 第27回 卒業研究とりまとめ（3巡目）
- 第28回 卒業研究とりまとめ③（報告会資料作成）
- 第29回 卒業研究とりまとめ④（報告会プレゼンテーション作成）
- 第30回 振り返り

教科書・参考文献

- 教科書 石川准 『見えないものと見えるもの - 社交とアシストの障害学』 医学書院 2004
(使用教材は、参加者と適宜話し合って決める。)
- 参考書 演習生の理解度に応じて適宜紹介をする。

授業外での学習

論文レビュー、プロジェクトレビューにおいて、関連する先行研究も積極的に収集すること。

評価方法

演習への参画（40%）、課題の提出（60%）を基準に評価する。

履修上の注意

学生の主体性をより重んじます。自ら学習課題を見いだす努力が必要となります。

配当年次	単位区分	単位数	開講時期
4	必修		通年

目的

当演習では、「地域資源を活かした地域産業の振興」について探求することを目的とする。すなわち、産業を地域の視点から捉え、地域資源を活かして自律的な発展を促進するための政策について考えることを基本テーマとして取り組んでいきたい。そのためには、背景となる地域経済の特色やその重要な担い手である中小企業の役割について理解することも欠かせない。
研究対象については、製造業、商業といった個別の産業分野、また中心市街地、地場産業地域、企業城下町といった産業において特色のある地域など、多様な視点があつてよい。地域産業の振興という視点から自分の問題意識をしっかりと持ち、各自のテーマに取り組んでいく。

達成目標

地域産業が地域の活力創造に重要な役割を担うことを理解すると共に、各自の研究課題について、文献・資料調査、実地調査などの手法を活用して卒業論文の作成に取り組む。また、論文作成に必要な知識やプレゼンテーションの能力を高める。到達目標は、各自の研究テーマについて卒業論文を仕上げることだが、実質的な最終目標は、自ら課題を見だし、その課題解決のための取組みができる能力を身につけることである。

スケジュール

第1回	研究スキルの講義I	論文作成の重要事項、アンケート調査、ヒアリング調査、実地調査
第2回	研究スキルの講義II	論文作成の重要事項、アンケート調査、ヒアリング調査、実地調査
第3回	各自の研究テーマ	論文構成の報告I
第4回	各自の研究テーマ	論文構成の報告II
第5回	各自の研究テーマ	論文構成の報告III
第6回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第7回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第8回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第9回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第10回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第11回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第12回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第13回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第14回	卒業論文の中間研究会(報告会)	
第15回	卒業論文の中間研究会(報告会)	
第16回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第17回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第18回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第19回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第20回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第21回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第22回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第23回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第24回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第25回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第26回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第27回	各自の研究の経過報告	報告、討論、研究指導
第28回	卒業論文発表会に向けた指導	※卒業論文提出
第29回	卒業論文発表会に向けた指導	
第30回	卒業論文発表会に向けた指導	

教科書・参考文献

教科書 特に指定しない。

参考書 各自の個人テーマに必要な文献や資料については、随時、個別にアドバイスしていく。

授業外での学習

当演習では、各自の個別研究テーマに取り組むことが基本となる。文献調査、実地調査、アンケート調査、ヒアリング調査などに積極的に取り組み、そのなかで得られた成果を基に、ゼミに臨んでほしい。

評価方法

課題意識をしっかりと持ち、少しずつでも粘り強く課題解決に向けた取組みをしてほしい。そして、自らの取組み目標を明確化すると共に、自立して課題解決のための取組みができる能力を、個人研究への取組みやゼミでの討論などを通じて身につける努力をしてほしい。こうした取組みを、総合的に評価する。

履修上の注意

ゼミでは、積極的に自らの意見を出し合い、互いに高め合う努力をしてほしい。自らの実践がなければ、課題解決能力を身につけることはできないことを自覚して、取り組んでほしい。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

教授 黒川 基裕 (クロカワ モトヒロ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

前年度後期に設定した各自の卒業研究課題に沿って個別研究を進めます。同時に商品企画やデザインに関するより高度な知識の習得を目指します。

達成目標

1. 商品企画に係る市場調査能力を向上させる。
2. デザインのローカライズ、ブランディングの知識を習得する。
3. ドキュメンテーション能力を向上させる。

スケジュール

- 第1回 はじめに
- 第2回 商品企画実習 (コンセプトメイク)
- 第3回 商品企画実習 (VE活用型)
- 第4回 先行研究レビュー (1巡目)
- 第5回 先行研究レビュー (2巡目)
- 第6回 先行研究レビュー (3巡目)
- 第7回 商品企画実習 (グループインタビュー)
- 第8回 商品企画実習 (コンジョイント分析)
- 第9回 先行研究レビュー (4巡目)
- 第10回 先行研究レビュー (5巡目)
- 第11回 商品企画実習 (アイデアマネジメント)
- 第12回 先行研究レビュー (6巡目)
- 第13回 商品企画実習 (因子分析)
- 第14回 商品企画実習 (プレゼンテーション)
- 第15回 振り返り
- 第16回 前期の振り返り
- 第17回 研究計画策定 (1巡目)
- 第18回 研究計画策定 (2巡目)
- 第19回 研究計画策定 (3巡目)
- 第20回 商品企画実習 (コンセプトメイク)
- 第21回 デザイン実習 (スライドの配色・設計)
- 第22回 商品企画実習 (アイデアマネジメント)
- 第23回 先行研究レビュー (7巡目)
- 第24回 先行研究レビュー (8巡目)
- 第25回 商品企画実習 (アイデア想起)
- 第26回 先行研究レビュー (9巡目)
- 第27回 卒業研究とりまとめ (1巡目)
- 第28回 卒業研究とりまとめ (2巡目)
- 第29回 卒業研究とりまとめ (3巡目)
- 第30回 振り返り

教科書・参考文献

教科書 特に指定しない。

参考書 個々の研究に即して提示します。

授業外での学習

先行研究の収集に力を入れること。卒業研究に伴う現地調査を実施する場合は調査企画を支援します。進学を検討している場合には、個別で対応します。

評価方法

授業への参画 (40%)、課題の提出 (60%) を基準に評価する。

履修上の注意

卒業研究の推進のために、先行研究の収集と解析に努力を払ってください。そのことを通して、論文の体裁なども理解できると考えています。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

准教授 木暮 律子 (コグレ リツコ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分
必修

単位数

開講時期
通年

目的

本演習では多言語・多文化状況にある社会の実態を取り上げ、地域の日本語教育の現状などにも触れながら、多文化共生の地域づくりについて考えていく。

演習IIでは、演習Iで学んだことを踏まえ、各自関心のあるテーマで卒業研究に取り組み、卒業論文を仕上げることが目的とする。前期は、自らの関心があるテーマで先行研究を公表し、研究方法を検討しながら卒業論文のテーマを確立していく。後期は、研究成果の中間発表と全体での討論を繰り返し、卒業論文の完成を目指す。

達成目標

- 1) 自ら研究課題を選び、適切な研究方法を用いて卒業論文を完成させること。
- 2) 多文化共生社会の実現に向けた課題を提示できるようになること。
- 3) 多文化社会において自分を表現することのできるコミュニケーション能力を身に付けること。

スケジュール

【前期】

- 第1回 ガイダンス(進め方・スケジュールの確認)
第2回～第12回 個人研究の発表(文献報告・研究テーマの検討)、討論
第13回 卒業論文計画書の作成(研究課題の設定・研究方法の選定)
第14回～第15回 卒業論文構想発表会

夏休み：各自卒業論文に必要なデータの収集、執筆

【後期】

- 第16回 ガイダンス(進め方・スケジュールの確認)
第17回～第25回 卒業論文の中間報告、討論
第26回～第27回 卒業論文・要旨の作成、ピアレスポンス
第28回～第30回 卒業論文発表会の準備

教科書・参考文献

教科書 特に指定しない。

参考書 ゼミ生の卒業論文のテーマに応じて必要な文献を随時紹介していく。

授業外での学習

毎回必ず予習をして授業に臨むこと。自分の担当箇所だけでなく、他のゼミ生の担当箇所についても問題意識を持って十分な準備をしておくこと。

評価方法

受講状況・ゼミ活動への貢献度(20%)、発表・レジュメ(20%)、卒業論文への取り組み方(30%)、卒業論文の成果(30%)を総合的に判断して評価する。

履修上の注意

遅刻・欠席厳禁。やむを得ず欠席する場合は必ず事前に連絡すること。
ゼミでの活動に自発的、積極的に参加することで自分を高めていってほしい。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

担当教員
教授 小牧 幸代 (コマキ サチヨ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次	単位区分	単位数	開講時期
4	必修	4	通年

目的

本演習では、まず、演習Iで行なった研究の成果を、パワーポイントを使ったプレゼンを通じて確認する。次に、観光文化に関する「基本文献」の輪読と発表を行う。その後で、バージョンアップした個人研究に取り組み、その結晶化としての卒業論文を作成する。卒業論文の作成にあたっては、内容だけでなく形式も重視し、論点を正確に確実に言語化し伝達できるよう技術的な訓練を行う。例えば、「1. はじめに」では①問題提起、②目的・意義を明確に示し、「2. 本研究の位置づけ」では①先行研究レビュー、②方法（文献調査・現地調査の概要）、③全体の構成を明らかにし、「3. ~ 5. 現地調査・文献研究に基づく事例部分」では、たとえば「3. 調査地概況または研究対象概要」「4. 事例1」「5. 事例2」などを具体的に紹介し、「6. 考察」を経て、「1. はじめに」に対応した「7. おわりに」で閉じられるような論理の一貫した文章を書くことを目指す。

達成目標

4年次は、個人研究テーマにそくした現地調査・文献研究をよりいっそう深め、その成果を発表（中間報告）し、全員で議論・討論を重ねながら卒業論文の作成に取り組むことで、事例（知識・情報・資料）の整理と分析、問題の提起と検証、導き出された結論の口頭および文字による言語化、論理の一貫性の追求といった学問の技術的側面のレベルアップを図る。

スケジュール

- 第1回 サブゼミA・B・C班分け、進級論文プレゼン準備、輪読ガイダンス@PC室
- 第2回 進級論文プレゼン練習@PC室（プレゼン10分・質疑応答5分）
- 第3回 進級論文プレゼン@PC室
- 第4回 進級論文プレゼン@PC室
- 第5回 卒業論文ガイダンス、必読文献検索@PC室 & 図書館
- 第6回 輪読発表（A班）テーマ「観光文化と郷里と私」（発表15分、質疑応答5分）
- 第7回 輪読発表（B班）テーマ「観光文化と郷里と私」
- 第8回 輪読発表（C班）テーマ「観光文化と郷里と私」
- 第9回 卒論構想発表（A班）研究テーマの方向性、予想される調査と必読文献に関する報告（発表15分、質疑応答5分）
- 第10回 卒論構想発表（B班）研究テーマの方向性、予想される調査と必読文献に関する報告
- 第11回 卒論構想発表（C班）研究テーマの方向性、予想される調査と必読文献に関する報告
- 第12回 個人研究発表（A班）研究の目的・意義、調査項目、重要文献の要点に関する報告（発表15分、質疑応答5分）
- 第13回 個人研究発表（B班）研究の目的・意義、調査項目、重要文献の要点に関する報告
- 第14回 個人研究発表（C班）研究の目的・意義、調査項目、重要文献の要点に関する報告
- 第15回 夏季休暇中の現地調査 & 文献研究の計画書提出（全員で計画書の内容を確認し助言し合う）
- 第16回 夏季休暇中の現地調査 & 文献研究の成果に関するスピーチ（全員）
- 第17回 個人研究発表（A班）全体構想：章立てと各章・節・項の内容の詳細な箇条書き（発表15分、質疑応答5分）
- 第18回 個人研究発表（B班）全体構想：章立てと各章・節・項の内容の詳細な箇条書き
- 第19回 個人研究発表（C班）全体構想：章立てと各章・節・項の内容の詳細な箇条書き
- 第20回 個人研究発表（A班）夏季調査中に収集した事例の紹介と分析（発表15分、質疑応答5分）
- 第21回 個人研究発表（B班）夏季調査中に収集した事例の紹介と分析
- 第22回 個人研究発表（C班）夏季調査中に収集した事例の紹介と分析
- 第23回 個人研究発表（A班）結論・序論・要旨（発表15分、質疑応答5分）
- 第24回 個人研究発表（B班）結論・序論・要旨
- 第25回 個人研究発表（C班）結論・序論・要旨
- 第26回 論文の推敲作業：全員
- 第27回 論文の仮提出：全員
- 第28回 卒業論文発表練習：全員@PC室
- 第29回 卒業論文発表練習：全員@PC室
- 第30回 論文集掲載用の最終原稿提出：全員

教科書・参考文献

教科書 山下晋司編『観光文化学』新曜社

参考書 綾部恒雄・桑山敬己編『よくわかる文化人類学 第2版』ミネルヴァ書房

授業外での学習

論文作成のためのフィールドワーク（参与観察、アンケート調査、インタビュー調査、ライフヒストリー調査）は、基本的に各人がそれぞれに、授業外の都合のよい日時に実施する。そのためにも、普段から、様々な媒体を通じて情報・データを収集する習慣、そしてメモを取る習慣を身につけておくこと。

評価方法

ゼミでの活動（輪読・個人研究の発表、論文の完成度、出席状況など）を総合的に判断して評価する。個人研究および論文のテーマ設定に際しては、視点の独創性をとくに高く評価する。

履修上の注意

「常識」を疑って、自分の目と耳と足で確かめる文化人類学の方法を、十全に理解しておくこと。そのためにも、講義科目「文化人類学 / 比較文化論」もしくは「宗教学」のどちらか一方または両方を事前に履修しておくことが好ましい。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

担当教員
准教授 木暮 律子 (コグレ リツコ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

本演習では多言語・多文化状況にある社会の実態を取り上げ、地域の日本語教育の現状などにも触れながら、多文化共生の地域づくりについて考えていく。
演習IIでは、演習Iで学んだことを踏まえ、各自関心のあるテーマで卒業研究に取り組み、卒業論文を仕上げることが目的とする。前期は、自らの関心があるテーマで先行研究を公表し、研究方法を検討しながら卒業論文のテーマを確立していく。後期は、研究成果の中間発表と全体での討論を繰り返し、卒業論文の完成を目指す。

達成目標

- 1) 自ら研究課題を選び、適切な研究方法を用いて卒業論文を完成させること。
- 2) 多文化共生社会の実現に向けた課題を提示できるようになること。
- 3) 多文化社会において自分を表現することのできるコミュニケーション能力を身に付けること。

スケジュール

【前期】

- 第1回 ガイダンス(進め方・スケジュールの確認)
第2回～第12回 個人研究の発表(文献報告・研究テーマの検討)、討論
第13回 卒業論文計画書の作成(研究課題の設定・研究方法の選定)
第14回～第15回 卒業論文構想発表会

夏休み:各自卒業論文に必要なデータの収集、執筆

【後期】

- 第16回 ガイダンス(進め方・スケジュールの確認)
第17回～第25回 卒業論文の中間報告、討論
第26回～第27回 卒業論文・要旨の作成、ピアレスポンス
第28回～第30回 卒業論文発表会の準備

教科書・参考文献

教科書 特に指定しない。

参考書 ゼミ生の卒業論文のテーマに応じて必要な文献を随時紹介していく。

授業外での学習

毎回必ず予習をして授業に臨むこと。自分の担当箇所だけでなく、他のゼミ生の担当箇所についても問題意識を持って十分な準備をしておくこと。

評価方法

受講状況・ゼミ活動への貢献度(20%)、発表・レジュメ(20%)、卒業論文への取り組み方(30%)、卒業論文の成果(30%)を総合的に判断して評価する。

履修上の注意

遅刻・欠席厳禁。やむを得ず欠席する場合は必ず事前に連絡すること。
ゼミでの活動に自発的、積極的に参加することで自分を高めていってほしい。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

教授 櫻井 常矢 (サクライ ツネヤ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

社会教育・生涯学習は、諸個人のキャリア形成、あるいは地域の自治や住民参加、NPOをはじめとする各種の共同実践による地域づくり、社会教育施設運営や教育専門職についてなど、地域と向き合う社会的な組織や実践に幅広い角度からアプローチする研究領域である。演習IIでは、各自が上記に関連した研究テーマを設定し、理論的考察や調査を重ね、最終的に卒業論文を完成させる。

達成目標

自らの研究課題への関心を掘り下げ、主体的にフィールドワークに取り組み、過去の研究蓄積にも触れながら自分自身の力で論文を完成させること。また、演習Iからの継続として、他のゼミ生の卒論の検討内容や進捗状況を自らの問題として捉え、ともに深めることができるようになることを目標とする。

スケジュール

- 第 1 回： オリエンテーション
(演習の進め方、スケジュールの確認)
- 第 2~5 回： 卒業論文のテーマ設定
(問題設定、論点整理)
- 第 6~9 回： テーマに関連した情報収集
(先行研究、関連資料、文献等からの論点整理)
- 第 10~13回： 分析・仮説の設定
(収集した情報や仮調査に基づく検討)
- 第 14~15回： 調査準備
(調査対象の選定、質問項目等の検討)
- 第 16~20回： 文献調査・事例調査
(経過報告、全体討議)
- 第 21~25回： 論文の執筆
(構成の検討、加筆・修正)
- 第 26 回： 小括
(研究成果の共有)
- 第 27~29回： 論文の発表について
(発表方法の検討、発表資料の作成)
- 第 30 回： まとめ
(演習の総括)

教科書・参考文献

教科書 特に指定しない。

参考書 ゼミ生の理解度や興味に応じて、適宜紹介する。

授業外での学習

次回の演習範囲に関連する内容について、演習内で指定(配布)した資料などをよく読んで予習しておくほか新聞やニュースなどからも積極的に情報収集すること。また、演習後は必ずノートや配布資料に目を通し学習内容の定着を図ること。

評価方法

各自の研究に関する検討経過、調査状況等の報告、また全体討議への参加状況、そして卒業論文の内容・成果によって総合的に判断する。

履修上の注意

演習Iから継続して求める姿勢となるが、他のゼミ生の問題関心や進捗状況も自らの問題として捉え、各人の研究論文をゼミ生全体で仕上げることを大切にすること

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

教授 佐藤 彰彦 (サトウ アキヒコ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

演習IIでは、演習Iを通じて習得した地域社会学の基礎知識や夏合宿ほかで体験したフィールドワークで学んだことなどをもとに、卒業論文を作成する。基本的に地域社会で生起している事象を研究対象としつつ、それらを外部環境や社会システムとの関係性からとらえ、社会構造的な解明を試みる。受講生は、論文完成にむけたロードマップに沿って、適宜、研究進捗報告を行い、その内容についてゼミ生同士で討議し、切磋琢磨し合うなかで研究の質向上に努める。このなかで、プレゼンテーションや討議の方法を習得する。

達成目標

- ① 自ら研究テーマを設定し、仮説を立て、それを検証していく一連の作業を行うこと。
- ② 社会学的な観点から課題をとらえ、分析し、その成果を卒業論文として完成させること。
- ③ 自らの主張をしっかりと組み立て、他人を納得できるコミュニケーション能力を習得すること。

スケジュール

以下について、随時、報告・討議を通じ、ゼミ生どうしでフィードバックを行い、各自論文の質向上をはかる。なお、下記の進捗状況は各自異なるため、適宜作業を先取りして行うことが望ましい。

【前期】

第1回～第5回

- ・ 卒論のテーマの確定
- ・ 研究計画ならびに作業実施計画（とくに問い、仮説、調査対象や方法などに留意）
- ※ 先行研究レビューや必要な調査は、適宜先行して進めておくこと。

第6回～第10回

- ・ 先行研究レビューと取りまとめ（社会潮流や先行研究レビューにもとづく当該研究の位置づけと意義など）
- ・ 論文構成案の作成・報告
- ・ 研究進捗状況の報告
- ・ 論文作成作業

第11回～第15回

- ・ 論文作成作業と経過報告（毎回2～3名程度が報告し、論文完成に向けて討議・情報共有）

【後期】

第1回～第5回

- ・ 論文の取りまとめ（研究目的、先行研究レビュー、研究課題や仮説など）
- ・ 調査結果（実査と結果）の報告
- ※ 後期開講までに、実査が完了していることが望ましい。

第5回～10回

- ・ 論文の取りまとめ（最終的な提出物の作り込み）

第11～15回

教科書・参考文献

教科書

とくに指定しない。
ただし、論文作成にかんする基本作法を必ず習得しておくこと。

参考書

個々の研究に即し、必要に応じて提示。
また、複数あるいは全員に共通して必要な文献等については適宜指定。

授業外での学習

卒業研究の完成に向け、積極的に調査に取り組み続けること。また、調査内容を適宜、収集・分析・整理し、必ず記録しておくこと。
他のゼミ生の研究に対しても積極的に貢献すること。

評価方法

ゼミへの参加・貢献状況、ならびに、研究成果を総合的に判断して評価する。

履修上の注意

さまざまな場面で自主的に課題を発見し、積極的に行動するよう心がける。
社会学系の授業履修ができていない場合（履修済みが原則）、社会学ならびに地域社会学について学習を済ませておくこと。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

教授 佐藤 公俊 (サトウ キミトシ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

演習IIにおいては政治学、行政学の基礎知識をもとに卒業論文を作成する。研究対象は主に地方の政治、政策過程であるが、中央レベルの政治や政策過程もその対象となる。
演習IIは基本的には(1)論文の書き方についての講義、(2)論文の構想についての中間発表、(3)論文指導、(4)ゼミにおける論文の中間報告および最終報告、(5)卒業論文報告会、の順に進んで行く。

達成目標

演習Iでは、政治学、行政学の専門的知識を習得し使いこなすことができるようになることを目標とし、その過程で、今まで経験のないほどの質的量的に濃密な思考を行い、さらに様々な課題を解決して行く過程を通じて組織の円滑な運営を行う技量を養うことをも同時に目指した。演習IIでは、その経験を卒業論文として結実させることを目指す。

スケジュール

【前期】

- ①卒論の概要及び研究計画に関するプレゼンテーション(4~6月:第1回から第7回)
- ②卒論指導(4~7月:第1回から第15回)
- ③3年生と共同でのディベート演習(5~6月:第8回から第11回)
- ④3年生と共同でのGD(グループディスカッション演習(7月:第12、13回))
- ⑤卒論中間報告会(7月:第14、15回)
- ⑥夏合宿における卒論中間報告

【後期】

- ①第1回卒業論文中間発表(10月:第1回から第3回)
- ②卒論指導(10~12月:第1回から第12回)
- ③第2回卒業論文中間発表(11月:第10回から第12回)
- ④卒業論文最終発表(12~1月:第13回から第15回)
- ⑤卒論報告会(2月)

教科書・参考文献

教科書 適宜指示する。

参考書 適宜指示する。

授業外での学習

十分な事前準備を行いゼミ活動に望むこと。ゼミの時間が終わったらすぐに当日指摘された問題点を解決し、次のゼミの事前準備に移ることができる状態にすること。

評価方法

ゼミにおける活動を総合的に評価する。

履修上の注意

卒論指導に際しては担当者と確実に連絡を取り合うこと。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

教授 佐藤 徹 (サトウ トオル)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次	単位区分	単位数	開講時期
4	必修	4	通年

目的

人口減少、少子・高齢化、住民の価値観の多様化、財政危機の深刻化等により行政には、住民に対する説明責任、サービスの効率化、成果重視の行政運営が求められている。こうしたなか、行政はいかにして住民ニーズに対応した政策を立案・実施すればよいのだろうか。また、行政はどのようにNPOや民間企業などと連携・協働しながら地域課題の解決や公共サービスの提供を行えばよいのか。本演習では、上記の諸課題に対し「行政経営」「都市政策」「政策評価」「住民参加・協働」などを研究テーマとして、理論と実践の両面からアプローチしていく。

達成目標

3年次のリサーチ・プロジェクト (RP) で得られた研究成果を最大限生かし、卒業研究論文を執筆完成させる。

スケジュール

【前期】

- 第1～5回 卒業研究論文のテーマ、構成、分析アプローチ等の検討決定
- 第6～9回 リサーチクエスションに関する仮説の設定
- 第10～15回 卒業論文のアウトラインの作成、卒論の進捗状況の報告とディスカッション

【後期】

- 第16～20回 自治体等へのアンケート調査の実施又はインタビュー調査の実施・指導
- 第21～27回 卒業研究論文の作成指導、添削
- 第28～30回 卒業研究発表のトレーニング・指導 など

教科書・参考文献

教科書 演習の中で指示する。

参考書 演習の中でその都度指示する。

授業外での学習

新聞やニュースなどに関心を持って、積極的に行政や政策に関する情報の収集に努めること。授業後は、関連文献などを適宜参照し、学習内容の定着を図ること。

評価方法

課題 (文献調査、プレゼンテーション、卒業研究の進捗発表等) の遂行 (50%)、ディスカッションでの発言 (50%)。

履修上の注意

ゼミの詳細は研究室ホームページ等を参照のこと。具体的な研究内容を知りたい場合は、同ホームページに掲載された書籍・論文、これまでにゼミで使用したテキストなどが参考になる。またゼミ生が主体となって運営するFacebook、Twitterを参照されたい。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

教授 佐藤 英人 (サトウ ヒデト)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

現代の都市問題に焦点をあて、都市地理学や経済地理学の視点から問題提起するとともに、解決方法を検討しながら、卒業論文を執筆する。毎回数名に卒論の進捗状況について報告を求める。前期は、立論および調査実務の検討、後期は卒業論文の個人指導が中心となる。

達成目標

発表や討論を通じて、問題自己発見能力、問題自己解決能力、プレゼンテーション能力の素養を高めるとともに卒業論文を完成させることが本講義の目標である。

スケジュール

- 第1回 前期のガイダンス
- 第2回 先行研究の整理 (1)
- 第3回 先行研究の整理 (2)
- 第4回 先行研究の整理 (3)
- 第5回 研究対象地域の概要 (1)
- 第6回 研究対象地域の概要 (2)
- 第7回 研究対象地域の概要 (3)
- 第8回 調査実務の検討 (1)
- 第9回 調査実務の検討 (2)
- 第10回 調査実務の検討 (3)
- 第11回 調査実務の検討 (4)
- 第12回 調査実務の検討 (5)
- 第13回 調査実務の検討 (6)
- 第14回 本調査に向けた注意事項
- 第15回 前期のまとめと夏休みの課題について
- 第16回 後期のガイダンスと課題提出
- 第17回 本調査の結果報告 (1)
- 第18回 本調査の結果報告 (2)
- 第19回 本調査の結果報告 (3)
- 第20回 本調査の結果報告 (4)
- 第21回 本調査の結果報告 (5)
- 第22回 本調査の結果報告 (6)
- 第23回 改善点・修正点の検討 (1)
- 第24回 改善点・修正点の検討 (2)
- 第25回 改善点・修正点の検討 (3)
- 第26回 卒業論文の最終チェック (1)
- 第27回 卒業論文の最終チェック (2)
- 第28回 口頭試問に向けたプレ発表 (1)
- 第29回 口頭試問に向けたプレ発表 (2)
- 第30回 後期のまとめ

教科書・参考文献

教科書 特に定めない。

参考書 梶田真・加藤政洋・仁平尊明編著『地域調査ことはじめ-あるく・みる・かく』、ナカニシヤ出版、2007、257p ※参考文献は講義中に適宜紹介する。

授業外での学習

世の中で起こっている出来事に関心を持ち、自分自身の意見や考えを整理しておくことが望ましい。また、各自でさまざまな地域に赴いて、地域を見る目を養ってほしい。

評価方法

プレゼンテーションの内容、討論への参加度、レポートの完成度等によって総合的に評価する。

履修上の注意

出席に自信のない者の履修は認めない。発表者が無断欠席した場合、履修停止(不合格)となるので注意すること。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

教授 高橋 伸次 (タカハシ シンジ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

本演習は、演習Iでの蓄積をふまえた研究論文作成のための過程となる。すなわち、さまざまな研究視点のなかから問題の所在を発見し、それを研究テーマへと発展させ、研究方法や分析・処理方法などに対して討議を重ねて洗練させ、「地域研究」としての「スポーツ研究」への挑戦を意識した論文作成へと導く。

達成目標

スポーツで培った体力と精神力を唯一の頼みにして、最後まで諦めることなく研究論文を完成させる。

スケジュール

【前期】

第1回目～ 3回目 研究テーマの設定
第4回目～ 10回目 研究テーマに関する関係資料の収集・報告
第11回目～15回目 研究方法や分析・処理方法の提案・討議

夏期合宿 (論文構成の報告・討議)

【後期】

第16回目～18回目 論文構成の決定
第19回目～21回目 研究経過の報告・討議
第22回目～30回目 研究論文の作成

研究論文の発表

教科書・参考文献

教科書 適宜指示する。

参考書 適宜指示する。

授業外での学習

新聞、雑誌、テレビ等のスポーツ情報の収集。

評価方法

出席状況、受講態度、報告の内容等を総合的に判断して評価する。

履修上の注意

スポーツ研究に繋がるスポーツ的発想は、スポーツの経験を通して導かれるものである。したがって、積極的なスポーツ活動をしている学生の参加を希望する。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

准教授 高橋 美佐 (タカハシ ミサ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

演習Iで学んだことをもとに、各自の興味関心のある対象に関する課題を見つけ、研究テーマに沿って卒業論文の完成に向けて研究を深めていく。研究の進捗状況について順番に報告し、相互に批評検討してアイデアを出し合う。お互いを高めあいながら、全員がよりよい方向にむけて研究をすすめていくことを目指す。

達成目標

1. 自分の関心のあるテーマについて課題を見つけ、問題点を適切に整理し研究計画をたてる。
2. 大学生生活の総仕上げとして納得のいく卒業論文を完成させる。

スケジュール

【前期】

- 第1回： ガイダンス 前期授業の進め方、スケジュールの確認
第2～5回： 各自の関心のあるテーマに関して報告し、ディスカッションを通して相互に検討し、問題を明確化させる。卒業論文の研究テーマを決定する
第6～8回： 参考文献や関連資料、データの収集をすすめる。各自で収集した資料の概要をまとめ、論点を整理し、報告する
第9～11回： 引き続き参考文献や関連資料、データの収集と論点の整理をすすめる、今後検討すべき課題を確認する
第12～15回： 検討課題に関連した先行研究を調査する。研究方法について検討し、研究計画をたてる

【後期】

- 第16回： ガイダンス、後期授業の進め方、スケジュールの確認
第17～18回： 仮説を設定する
第19～23回： 文献調査、事例研究、データ分析、数値解析を通して、仮説を検証する。必要に応じて、仮説の設定、検証を繰り返しながら、結論を導く
第24～28回： 論文をまとめ、執筆中の原稿を持ち寄り、相互に読み込みを行い、互いの批評をもとに推敲、校正をすすめる、論文の完成度を高める。
第29～30回： 研究発表の練習、まとめ

教科書・参考文献

教科書 特に定めない。

参考書 必要に応じて紹介する。

授業外での学習

演習での報告とディスカッションを裏切るものとするためには十分な事前準備が必要である。各自の研究目的に沿って、参考文献の収集とレビュー、データ収集、分析手法に関する勉強などを計画的にすすめること。

評価方法

出席状況、授業への参加態度、報告内容などをもとに総合的に評価する。

履修上の注意

特になし。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

教授 坪井 明彦 (ツボイ アキヒコ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

演習Iで学習したマーケティングの基本的な知識をもとに、よりテーマを絞った卒業論文の作成を行う。自分自身で問題を発見し、その問題に対して、先行研究を分析したうえで、自分自身の研究・分析を進めてもらいたい。
また、卒業論文だけでなく、3年次よりもより高度な文献の講読やケースに関するディスカッションも行う。

達成目標

論文の書き方のルールに即した論文の書き方を身につけるとともに、自分で問題提起し、説得力のある文章を書く能力を身につける。
マーケティングの理論と実社会で起きている企業活動などの現象を比較し、理論と同じかどうか、違っていたらなぜ理論との違いが生じているのかを自分なりに考えられる能力を養う。

スケジュール

- 第1回 オリエンテーション
- 第2～5回 卒業論文のテーマの決定
- 第6～8回 卒業論文の執筆計画の作成、発表
- 第9～11回 卒業論文の中間発表（先行研究のレビュー）
- 第12～15回 テーマの明確化と調査計画の確認
- 第16～19回 卒業論文の中間報告①と指導
- 第20～23回 卒業論文の執筆内容の指導
- 第24～27回 卒業論文の中間報告②と指導
- 第28～30回 卒業論文発表準備

教科書・参考文献

教科書 ゼミ生の理解や興味に応じて決定する。

参考書 ゼミ生の理解や興味に応じて適宜紹介する。

授業外での学習

毎回の演習で、翌週の課題を提示するので、その課題について必ず調べてくること。

評価方法

ゼミでの活動を総合的に判断して評価する。

履修上の注意

ゼミの時間はゼミ活動の一部にすぎない。ゼミで議論するためには、事前の下調べが不可欠である。就職活動と並行して取り組んでほしい。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

教授 友岡 邦之 (トモオカ クニユキ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

本演習では、人々の文化的経験に対して地域社会の諸条件が与える影響、および地域社会の活性化のための文化的資源の意義を主な研究対象とする。研究対象の具体的な例としては、自治体文化政策の実際、美術館・博物館・文化ホールなどの文化施設の運営、フェスティバルやイベントの実施効果、地域文化・伝統芸能の現代的意義、コミュニティおよびコミュニケーション環境の現状、そして文化政策をめぐる思想的問題などが挙げられる。

具体的には、「演習I」で身につけた調査研究の技法を踏まえて、各自で研究論文の作成に取り組む。論文のテーマは、上述の演習の主旨を踏まえて、各自が自主的に決定する。

達成目標

- ・文化政策や市民の文化活動に関する諸事例、文化理論についての理解を深める。
- ・自ら学術的な問いを立てる。
- ・自己の主張を裏付けるデータを適切に収集し、分析する。
- ・自己の主張を論理的かつ説得力のある文章で表現する。

スケジュール

- 第1回 現段階での研究構想の説明
- 第2回 研究テーマの妥当性の検討(1)
- 第3回 研究テーマの妥当性の検討(2)
- 第4回 研究テーマの妥当性の検討(3)
- 第5回 研究テーマの妥当性の再検討(1)
- 第6回 研究テーマの妥当性の再検討(2)
- 第7回 研究テーマの妥当性の再検討(3)
- 第8回 先行研究の調査(1)
- 第9回 先行研究の調査(2)
- 第10回 先行研究の調査(3)
- 第11回 先行研究の再調査(1)
- 第12回 先行研究の再調査(2)
- 第13回 先行研究の再調査(3)
- 第14回 研究の方向性の確認
- 第15回 夏季休暇期間中の調査計画の確認
- 第16回 夏季休暇期間中の調査研究活動についての報告
- 第17回 研究テーマの妥当性の再検討(1)
- 第18回 研究テーマの妥当性の再検討(2)
- 第19回 研究テーマの妥当性の再検討(3)
- 第20回 論文構成案の発表(1)
- 第21回 論文構成案の発表(2)
- 第22回 論文構成案の発表(3)
- 第23回 研究の方向性の最終確認
- 第24回 執筆状況の報告・添削(1)
- 第25回 執筆状況の報告・添削(2)
- 第26回 執筆状況の報告・添削(3)
- 第27回 論文の提出
- 第28回 プレゼンテーションの練習(1)
- 第29回 プレゼンテーションの練習(2)
- 第30回 プレゼンテーションの練習(3)

教科書・参考文献

教科書 特に指定しない。

参考書 特に指定しない。「演習I」での指導を踏まえ、各自が自主的に文献を収集し、必要に応じて指導教員に相談すること。

授業外での学習

自分の研究テーマに関係するものにとどまらず、多くの論文と学術書を読み、論文の執筆技法を当たり前のものとして身につけること。

評価方法

ゼミ活動への参加の積極性、調査研究活動への取り組み方を踏まえ、総合的に評価する。

履修上の注意

特になし。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

教授 西沢 淳男 (ニシザワ アツオ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

地域史は、一つの地域を多角的に考察し、民衆史や生活史のなかから、これから取り組んで行かなくてはならない地域の課題を解明していく研究である。地域の数だけ地域史があります。とりわけ各自の関心にもとづき出身地域の歴史的解明をするとともに、これから取り組んで行かなくてはならない地域の課題を解決・解明していく基となる卒論完成を目的とする。

達成目標

地域史研究の方法を学びながら演習I後期での発表を発展させ、各自の関心だけでなく全国各地のゼミ生の報告から多様な地域の歴史があることを理解し、各自の卒論作成の参考に出来るように問題意識を持つ。

スケジュール

- 第1回 オリエンテーション(授業の進め方と日程確定)
- 第2回 卒業論文の書き方・技法①(課題設定、文献収集)
- 第3回 卒業論文の書き方・技法②(形式、参考文献記載法)
- 第4回～15回 卒論報告1回目(各自の卒論構想とテーマ設定と指導)
- 第16回～26回 卒論報告2回目(卒論中間報告と執筆一向けの指導)
- 第27回 卒論内容最終指導(完成原稿へ)
- 第28回 卒論提出後の指導(卒論校正・訂正指導)
- 第29～30回 卒論報告会予行(口頭報告に関わる指導)

教科書・参考文献

教科書 特になし

参考書 各人へ必要な文献を指示する。

授業外での学習

各報告者による各地域史の特徴を各自の研究に生かせるように復習すると共に、各自の史料収集を十分に行うこと。

評価方法

演習における報告・発言(70%)、出席状況(30%)等により総合的に判断する。特に無断欠席・報告のドタキャンは厳正に対処します。平常点での評価は報告が義務であり、定期試験と同等のものを明記します。

履修上の注意

ほうれんそう=報告・連絡・相談 これを徹底して下さい。無断欠席、ドタキャンは厳禁です。各自自覚を持って演習に望むこと。これができない人は、履修しないこと。積極的に問題意識を持って発言するようにする。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

教授 西野 寿章 (ニシノ トシアキ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

演習Iでの研究成果をひまえ、卒業論文を作成する。
卒業論文のテーマ設定は、地域政策に関わるテーマであれば、自由に設定できる。とはいえ、最終的に提出される卒業論文には「起承転結」が必要であり、まとめにあたる結論も論理的、科学的であることが求められる。小学生、中学生、高校生、そして大学生の学生生活の締めくくりとして、しっかりとした論文を作成してもらいたい。

達成目標

卒業論文を作成し、提出する。

スケジュール

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 卒業論文の研究テーマと研究目的について発表する① 1コマ当たり3人発表し討論する。
- 第3回 卒業論文の研究テーマと研究目的について発表する②
- 第4回 卒業論文の研究テーマと研究目的について発表する③
- 第5回 卒業論文の研究テーマと研究目的について発表する④
- 第6回 選択した卒業論文テーマに関する先行研究をレビューし、オリジナリティの論述① 1コマ当たり3人
- 第7回 選択した卒業論文テーマに関する先行研究をレビューし、オリジナリティの論述②
- 第8回 選択した卒業論文テーマに関する先行研究をレビューし、オリジナリティの論述③
- 第9回 選択した卒業論文テーマに関する先行研究をレビューし、オリジナリティの論述④
- 第10回 夏休み中の調査研究計画書の提出と発表① 調査先への依頼状も提示すること。
- 第11回 夏休み中の調査研究計画書の提出と発表②
- 第12回 夏休み中の調査研究計画書の提出と発表③
- 第13回 夏休み中の調査研究計画書の提出と発表④
- 第14回 現地調査報告書の作成方法、依頼の仕方について説明。
- 第15回 現地調査報告書の作成方法の説明。
- 第16回 後期オリエンテーション、現地調査報告書提出
- 第17回 現地調査報告書の評価と返却。
- 第18回 予想される章立ての提示と夏休みの現地調査分析報告① 1コマ当たり3人。
- 第19回 予想される章立ての提示と夏休みの現地調査分析報告②
- 第20回 予想される章立ての提示と夏休みの現地調査分析報告③
- 第21回 予想される章立ての提示と夏休みの現地調査分析報告④
- 第22回 各章の概要と結論の発表① 1コマ当たり3人。
- 第23回 各章の概要と結論の発表②
- 第24回 各章の概要と結論の発表③
- 第25回 各章の概要と結論の発表④
- 第26回 提出前のチェック① 教室と研究室で順次行う
- 第27回 提出前のチェック②
- 第28回 卒論発表会の予備発表①
- 第29回 卒論発表会の予備発表②
- 第30回 卒論発表会の予備発表③

教科書・参考文献

教科書 特になし

参考書 斉藤 孝『論文の書き方』日本工ディタースクール

授業外での学習

先行研究レビュー、現地調査、収集データの分析に積極的に取り組むことが必要である。

評価方法

卒業論文の内容によって評価する。

履修上の注意

テーマの設定は自由であるが、現地調査を含む、地域政策学的内容であることに留意されたい。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

教授 新田 浩司 (ニッタ ヒロシ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

各自の設定した卒業論文のテーマについて、各自が研究を進めるに当たり、個別的に指導を行う。

達成目標

各自の設定した卒業論文のテーマに従い、卒業論文を完成させることが、最終的な到達目標である。

スケジュール

第1回 ガイダンス(今年度の授業計画、各自の学習計画、卒業論文テーマの確定)

第2回 卒業論文の書き方について

第3回 卒業論文のテーマ及び指導を受ける理由の発表(全員)

第4回 卒業論文作成の指導を併せて、判例研究を行う。

第5回 卒業論文作成の指導を併せて、判例研究を行う。

第6回 卒業論文作成の指導を併せて、判例研究を行う。

第7回 卒業論文作成の指導を併せて、判例研究を行う。

第8回 卒業論文の中間発表(進捗状況について発表する)。

第9回 卒業論文作成の指導を併せて、判例研究を行う。

第10回 卒業論文作成の指導を併せて、判例研究を行う。

第11回 卒業論文作成の指導を併せて、判例研究を行う。

第12回 卒業論文作成の指導を併せて、判例研究を行う。

第13回 卒業論文作成の指導を併せて、判例研究を行う。

第14回 卒業論文の中間発表(進捗状況について発表する)。

第15回 前期のまとめ。卒業論文作成の指導(夏休みの心構え)

第16回 ガイダンス(卒業論文完成までの計画について)

第17回 卒業論文作成の指導を併せて、判例研究を行う。

第18回 卒業論文作成の指導を併せて、判例研究を行う。

第19回 卒業論文作成の指導を併せて、判例研究を行う。

第20回 卒業論文作成の指導を併せて、判例研究を行う。

第21回 卒業論文の中間発表(進捗状況について発表する)。

第22回 卒業論文作成の指導を併せて、判例研究を行う。

第23回 卒業論文作成の指導を併せて、判例研究を行う。

第24回 卒業論文作成の指導を併せて、判例研究を行う。

第25回 卒業論文作成の指導を併せて、判例研究を行う。

第26回 卒業論文完成に向けての最終点検

第27回 卒業論文発表会の準備

第28回 卒業論文発表会の準備

第29回 卒業論文発表会の準備

第30回 卒業論文発表会の準備

教科書・参考文献

教科書 適宜指示する。

参考書 適宜指示する。

授業外での学習

卒業論文のテーマを確定しようとする場合、新聞等のニュースに注目し法学的見地から分析し、記事を切り抜きどのような法的問題があるのが調べてみることは大変有意義なのである。スクラップブックを作るのもよい。

評価方法

報告、プレゼンテーション能力：50%、質問に対する応答の仕方：20%、参加態度：10%

履修上の注意

四年次は就職活動と併せて卒業論文の作成もあり、多忙となることが予想される。就職活動と並行して卒業論文に関する研究を行わなければならないので、効率的な時間の使い方が要求される。地域政策学部という学部の特殊な踏まえ地域の課題等について行政法学からの検討を行うようなテーマを選ぶのが望ましい。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

教授 福間 聡 (フクマ サトシ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

本ゼミでは、様々な哲学・倫理学文献をゼミ生と共に読み解き、その中で論じられている問題について熟議します。中心的なテーマは「コミュニティにおける正義」であり、このテーマに関連する諸問題、マクロには国家間の正義であるグローバル・ジャスティス（途上国への援助、移民の受け入れ、国際司法、人道的介入）や一国内での財の再分配の問題、またミクロには、医療資源の適正な分配や雇用の確保、所得の無条件的最低保障や教育に対する平等の機会といった問題を検討します。こうした「正義」にまつわる諸問題を、現代の哲学者（ジョン・ロールズ、ピーター・シンガー、マイケル・サンデル、ジョナサン・ウルフ等）の文献を読解することを通じて、またメディアやマスコミで取り上げられている社会的な事象を踏まえながら考察します。演習IIでは演習Iで扱った問題の中から研究テーマを設定し、卒業論文を完成させることを目的とします。

達成目標

社会的・公共的な問題について哲学的・倫理的に考察している文献を読み解きながら、いかなる社会が望ましいのか、現代社会の一員としていかに私たちは考え・行動すべきなのかについて考える力を養う。

スケジュール

【前期】

第1回目 インTRODクシヨン 今後の進め方についての打ち合わせ
第2回目～第5回目 論文の書き方の指導
第6回目～第13回目 各卒業論文に関連する文献の輪読・ディスカッション
第14回目～第15回目 卒業論文確定テーマの報告
夏合宿の予定

【後期】

第16回目 卒業論文アウトラインの報告
第17回目～第22回目 卒業論文草稿の報告と指導・1
第23回目 中間報告会
第24回目～第27回目 卒業論文草稿の報告と指導・2
第28回目～第30回目 卒業論文報告（プレゼン）の練習

* 輪読・ディスカッションで行うこと

- ① 担当部分の考察・発表
- ② 担当者が疑問に思ったことについてのゼミ全体による討議
- ③ 自分の考察・発表に対する反省コメント

教科書・参考文献

教科書 戸田山 和久『新版 論文の教室-レポートから卒論まで』（NHK出版 2012）、松本 茂・河野 哲也『大学生のための「読む・書く・プレゼン・ディベート」の方法』（玉川大学出版部 2007）
参考書 適宜授業内で紹介します。

授業外での学習

レジュメの担当者以外も文献を熟読し、問題意識を持ってゼミに臨むこと（コメントの提出が必須）。授業後は自分が考えていたことを発言できたか、また参加者の意見を適切に理解することができたかを反省し、次回のゼミでの改善点を明確にすること。

評価方法

ゼミでの活動を総合的に評価して判定します。

履修上の注意

本を読み、映画やドキュメンタリー映像を見たりしながら、社会的な問題に対して常に関心を高めておくこと。またそうした問題を哲学・倫理的な観点から考察するよう努めること。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

教授 細井 雅生 (ホソイ マサオ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

基本テーマは演習Iと同様、児童福祉、母子福祉、家族ソーシャルワークを中心とした分野である。演習Iから積み重ねてきた、各自の発表・討論の積み重ねを通して、参加者各自の「社会福祉学的想像力」の覚醒、各自の経験的生活世界の相対化を基本とすることは変わらないが、4年次では各自のテーマ設定に即して、卒業論文作成を計画的に実施する。

達成目標

- 1) 自分の生き方にきちんと関わらせて卒業論文を作成すること。
- 2) アンケート調査、ヒアリング等、も重要な手法であるが、文献研究を徹底的に行えるようになること。
- 3) ゼミ生同士の厳しいクリティークができる関係になること。

スケジュール

【前期】

- 第1回～第6回 1回2名ずつ卒業論文のテーマに関する文献研究の成果を発表する。
第7回～第12回 1回2名ずつ卒業論文のテーマに関する文献研究を継続すると共に、フィールド調査の可能性を検討する

第12回～第15回 夏合宿に向けた研究計画作成と章立ての検討

夏合宿 (卒論成果中間プレゼンテーション)

【後期】

第16回～第21回 インタビュー - や調査研究の成果を含め、手を挙げたものから各自発表する。
1回三名程度

第22回～第25回 論文タイトル、章立ての決定
論文の体裁の教員への仮提出に向けての整備
卒論提出

第26回～第30回 卒論発表会に向けた準備、レジюме、パワーポイントの作成
プレゼンテーションの練習
3年生を交えた卒論発表会リハーサル

卒論発表会

教科書・参考文献

教科書 参加者との相談で決定する。

参考書

授業外での学習

発表に向けて、授業外の自主学習が中心となる。論文の進捗状況を定期的な提出によって確認する

評価方法

ゼミでの活動を総合的に判断して評価する。

履修上の注意

自分の力を尽くして、自己表現ができることを目指してほしい

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

担当教員
教授 増田 正 (マスダ タダシ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次	単位区分	単位数	開講時期
4	必修	4	通年

目的

本演習では、演習Iで学習した政治学の方法と基本的な理論を基礎として、各人が主体的に卒業論文作成を実践し、卒論を完成させることを目的とする。本演習の卒業論文では、研究のオリジナリティを重視する。そのため、他人の研究成果の引き写しや、思いっくままに何かのテーマを調べただけのレポートなどは評価しない。研究の新規性を明らかにするため、先行研究をよく調べるとともに、インタビューや統計データの解析を通じて、新しい知見を獲得することができれば、高く評価される。演習の枠組みとしては、パワーポイントを使い、輪番制で中間報告を行い、討論・助言を通じて論文の完成度を高めていく。参加者には、エクセル等の計算・統計ソフトの活用、図書館やWEB上での十分な資料検索などが要求される。

達成目標

演習Iで獲得した政治学の基礎知識と学術技法をもとに、地域政策学部の最高年次生として、これまでの学習成果を集大成し、卒業論文を作成する。また、卒業論文発表会を機会としてパワーポイント・ファイルを作成しプレゼンテーション能力の充実・発展に努める。最終的には冊子としてゼミの卒論論文集を完成させる。

スケジュール

第1回	前期ガイダンス、発表グループ分け、スケジュールの確認
第2回	グループ1発表：テーマ設定（投票行動）
第3回	グループ2発表：テーマ設定（地方議会）
第4回	グループ3発表：テーマ設定（条例波及等）
第5回	グループ1発表：文献渉猟（投票行動）
第6回	グループ2発表：文献渉猟（地方議会）
第7回	グループ3発表：文献渉猟（条例波及等）
第8回	グループ1発表：クリティカル・リーディング（投票行動）
第9回	グループ2発表：クリティカル・リーディング（地方議会）
第10回	グループ3発表：クリティカル・リーディング（条例波及等）
第11回	グループ1発表：参考文献リストの作成（投票行動）
第12回	グループ2発表：参考文献リストの作成（地方議会）
第13回	グループ3発表：参考文献リストの作成（条例波及等）
第14回	研究手法及び仮説の設定
第15回	総括授業（前期のまとめ）
第16回	後期ガイダンス
第17回	グループ1発表：中間報告（投票行動）
第18回	グループ2発表：中間報告（地方議会）
第19回	グループ3発表：中間報告（条例波及等）
第20回	グループ1発表：研究結果（投票行動）
第21回	グループ2発表：研究結果（地方議会）
第22回	グループ3発表：研究結果（条例波及等）
第23回	グループ1発表：文章化（投票行動）
第24回	グループ2発表：文章化（地方議会）
第25回	グループ3発表：文章化（条例波及等）
第26回	フォーマット、脚注、参考文献表等の体裁の調整
第27回	提出前最終確認と簡易製本化
第28回	卒論最終提出とその報告
第29回	パワーポイントによるプレゼンテーションの準備
第30回	総括授業（演習のまとめ）

教科書・参考文献

教科書 演習で指示する。

参考書 演習で指示する。

授業外での学習

定期的に行われる個別報告のために準備を進めるとともに、教員及び参加者から受けたアドバイスを受けて、卒業論文の完成度を高めるための作業を行う。

評価方法

出席状況と主体的な参加度に応じて、平常点で評価する。

履修上の注意

卒業論文作成は、基本的に個人作業である。就職活動等を理由として欠席することはやむを得ない部分もあるが学業優先が原則である。欠席時には、必ず連絡すること。希望者は演習Iに参加してよい。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

担当教員
准教授 丸山 奈穂 (マルヤマ ナホ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

観光と地域の関わりに関する現状や課題、今後の展望を様々な視点から研究する。データを検証しながら、将来の観光運営や政策について客観的に考える方法を身に付ける。また、自己の研究のアイデアや結果を随時口頭や文章を通じて発表することによって、自分の考えを的確に人に伝えるスキルを身に付ける。

達成目標

1. 国際観光と地域政策にふさわしいテーマを設定し、テーマに関する関連文献を検討し、研究課題を明確にする。
2. 研究計画書を作成し、それにそって、研究を進める。
3. 論文の書き方を学び、卒業論文を完成させる。

スケジュール

第1回 インタロダクション
第2回 研究テーマの設定
第3回 研究テーマの設定
第4回 研究テーマの設定
第5回 研究テーマの設定
第6回 先行研究執筆
第7回 先行研究執筆
第8回 先行研究執筆
第9回 先行研究執筆
第10回 研究の問題設定
第11回 研究の問題設定
第12回 研究の問題設定
第13回 研究の問題設定
第14回 研究計画書仕上げ
第15回 研究計画書仕上げ
第16回 データ収集
第17回 データ収集
第18回 分析および考察執筆
第19回 分析および考察執筆
第20回 分析および考察執筆
第21回 分析および考察執筆
第22回 分析および考察執筆
第23回 分析および考察執筆
第24回 分析および考察執筆
第25回 論文修正
第26回 論文修正
第27回 論文修正
第28回 卒論発表準備
第29回 卒論発表準備
第30回 卒論発表準備

教科書・参考文献

教科書 特に定めない。

参考書

授業外での学習

卒論のテーマに沿った文献を各自で検索し精読すること

評価方法

卒論への取り組み姿勢、成果によって評価。

履修上の注意

卒論作成には、時間がかかることを念頭におき、直前になってあわてることのないよう計画的に取り組むようにしてください。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

准教授 宮田 剛志 (ミヤタ ツヨシ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

演習Iでの研究成果をふまえ、卒業論文の作成を行います。
卒業論文のテーマ設定は、「食料・農業・農村」問題に関するテーマであれば、4年生の問題意識に基づいて自由に設定できます。とはいえ、最終的に提出される卒業論文には、地域ごとに様々な「顔」を持つ農業構造や地域社会構造、食料消費の実態について正確な把握を行うことを通じて、地域住民の方々とともに論理的、科学的にその処方箋を描いていくことが求められます。
大学生生活を締めくくるにあたって、4年生各自にとって「一里塚」となるような論文の作成を期待します。

達成目標

卒業論文を作成し、提出すること。

スケジュール

【前期】

- 4月 食料・農業・農村研究に関する意義、研究の視点について講義を行います。
- 5月 基本文献、関連文献、論文の輪読を行い、農業・農村の歴史、現状についての理解を深めます。
- 6月 4年生各自の卒業論文のテーマ設定を行います。
- 7月 4年生各自の卒業論文のテーマの先行研究の動向の整理を行います。
- 8月 4年生各自の卒業論文のテーマの統計等データの収集を行います。

【後期】

- 9月 4年生各自の卒業論文のテーマの現地実態調査を行います。
(例：2016年度、「農地中間管理事業の実績（明和町、前橋市、玉村町等々）」、「中之条町における中山間地域等直接支払制度の効果」、「嬭恋村における国営・県営農地開発事業と農地流動化」、「集落営農の展開（JA佐波伊勢崎管内）」等々)
- 10月 4年生各自の卒業論文のテーマの現地実態調査の結果報告を行います。
- 11月 補足調査期間。
- 12月 卒業論文の構成、執筆、提出を行います。

教科書・参考文献

教科書 生源寺真一編『改革時代の農業政策 - 最近の政策研究レビュー - 』農林統計出版、2009年、他。

参考書 内閣府『経済財政白書』各年次、農林水産省『食料・農業・農村白書』各年次、他。

授業外での学習

大学の図書館や関係官公庁等で入手できる統計・資料等は、相当量に達すると思われませんが、現地実態調査前に必ず1次整理しておいて下さい。

評価方法

卒業論文の内容によって評価します。

履修上の注意

テーマ設定は自由ですが、現地実態調査を含む「食料・農業・農村」問題に関連する内容であることに注意して下さい。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

教授 森 周子 (モリ チカコ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

- * 卒業論文執筆に向けた準備を行う。
- * 演習Iのゼミナール大会に向けた準備に適宜協力する。

達成目標

卒業論文執筆、および、それに向けた準備を通じて、研究力、探究力、論文執筆力、問題解決力などが向上する。

スケジュール

第1回 ガイダンス・今後のゼミの進め方に関する話し合い
第2回-第5回 卒論テーマ報告
第6回 ゲスト講義
第7回-第10回 卒論テーマ中間報告
第11回 演習Iとの合同ゼミ(ゼミナール大会対策)
第12回-第15回 卒論テーマ中間報告
第16回-第19回 卒論テーマ中間報告
第20回 演習Iとの合同ゼミ(ゼミナール大会対策)
第21回-第24回 卒論テーマ中間報告
第25回 卒論提出直前報告会
第26回-第29回 卒論報告会に向けた準備
第30回 まとめ

教科書・参考文献

教科書 ゼミ生の卒業論文のテーマに応じて決定。

参考書 ゼミ生の卒業論文のテーマに応じて適宜紹介。

授業外での学習

卒業論文執筆に向けて、選択したテーマに関する予習・復習、情報収集を欠かさないこと。

評価方法

報告内容(50%)、議論への参加(30%)、受講態度(20%)。

履修上の注意

社会政策・社会保障への問題意識や関心を常に持ち、選定した卒業論文のテーマに関しても幅広い考察・検討を欠かさないこと。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

准教授 八木橋 慶一 (ヤギハシ ケイイチ)

担当教員 担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

本ゼミでは、卒業論文の完成を目指して各自の研究発表を行います。前期では、演習Iで提出したレポートからどれだけ研究が進捗したかを中心に報告します。後期は卒業論文の草稿を報告し、完成に向けた指導を行います。同時に、論文審査に向けたプレゼンテーションの練習も行います。

達成目標

卒業論文の作成を通じて、①課題発見能力、②調査能力、③論理的な文章の作成能力、この3つの能力を身に付けることを目標とします。

スケジュール

【前期】

第1回目 打ち合わせ
第2回目から15回目 各自の研究発表

【後期】

第16回目 打ち合わせ
第17回目から26回目 各自の研究発表・個別指導(添削など)
第27回目から30回目 論文審査に向けた準備(プレゼンテーションの練習など)

教科書・参考文献

教科書 特になし。

参考書 適宜指示を出します。

授業外での学習

卒業論文の完成に向けて、調査や執筆を行ってください。

評価方法

平常点(受講状況、報告内容など)100%

履修上の注意

欠席が多い場合、単位は取得できません。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

教授 吉武 信彦 (ヨシタケ ノブヒコ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

演習の研究テーマは、国際関係論、国際交流史である。国際関係に生ずる様々な問題を理論的、歴史的に解明し、将来を展望することを目的とする。それを通じて、激動する国際関係をみる「眼」を養ってもらいたい。国際的な相互依存関係の進む現在、そうした視点は国内社会の諸問題を考える上でも極めて重要であろう。

達成目標

以下の3点をめざしてほしい。①国際関係の諸問題を批判的に分析できる能力を磨き、自分の意見をもてるようになること。②自分の意見を他人に対して論理的に説明でき、文章でも表現できるようになること。③演習の活動を通して、同期、先輩、後輩との間で切磋琢磨し、コミュニケーション能力を身につけること。

スケジュール

ゼミでは、以下の活動を主に行なう。

①本年度は、卒業論文の作成を中心に演習を進める。

前期中に1回以上は卒業論文の中間報告を行ない、議論を通してより高い水準の論文をめざしてほしい。特に、前期中にテーマ、章立てを確定し、先行研究などを読み始め、自分自身の研究の問題意識、位置づけを明確にすることが望ましい。

後期は、2つのグループに分かれ、交互に2週間に1回卒業論文の中間報告を行ない、卒論を書き進めてほしい。2週間に1章を書き上げるペースで11月末くらいまでにドラフトを完成されたい。12月は提出に向け、最終調整をし、決定版を提出日に教務課に提出すること(提出日厳守)。1月は、卒業論文発表会に向けて、プレゼンテーションの予行演習を行なう。

なお、夏休み中には、卒業論文のためのフィールドワークなどを各自行なってほしい。

②卒業論文以外の時間は、国際関係論、国際交流史に関する文献を相談の上、決定し、輪読する。なお、文献を輪読した後、その内容に関して毎回レポートを提出すること。

③フィールドワークとして、国際関係にかかわる場所を訪問したい。

【前期】

第1回目 オリエンテーション(前期演習の概要説明、進め方、スケジュールの確認)

第2回目～第6回目 専門書の輪読①(国際関係論、国際交流史に関する個別文献1)

第7回目～第8回目 卒論の中間報告①(テーマ・章立ての確定、質疑応答)

第9回目～第11回目 専門書の輪読②(国際関係論、国際交流史に関する個別文献2)

第12回目～第15回目 卒論の中間報告②(先行研究の読み込みと整理、質疑応答)

【後期】

第16回目 オリエンテーション(後期演習の概要説明、進め方、スケジュールの確認)

第17回目～第27回目 卒論の中間報告③(各章の報告、質疑応答)

第28回目～第30回目 卒論発表会に向けたプレゼンテーション準備(発表、質疑応答、レジюме集の作成)

教科書・参考文献

教科書 演習で指示する。

参考書 演習で指示する。

授業外での学習

輪読する文献は、各章の担当者以外も事前に読み、内容に関する質問を考えてくること。また、卒論の中間報告では、関連文献をじっくり読み、その内容を踏まえた上で、レジюмеを用意し、当日、全員に配布すること。

評価方法

試験は行なわない。通常の報告(60%)、議論への参加(20%)、レポート(20%)に基づいて成績をつける。無断欠席、レポートの未提出は一切認めない。卒業論文の成績は、他の教員も参加する卒業発表会の審査結果に基づいてつけるので、発表会まで気を抜かず準備してほしい。

履修上の注意

演習生は、演習Iと演習IIの両方に参加することが望ましい(サブゼミを兼ねて勉強時間を確保し、先輩・後輩間の関係を円滑にするため)。

随時、フィールドワーク等の行事を行なう予定である。できる限り参加してほしい。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

准教授 吉原 美那子 (ヨシハラ ミナコ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

演習Iで得た研究手法や研究内容を踏まえ、教育政策に関する文献をより深く理解しつつ、各自研究課題を設定し研究計画にそって卒業論文の完成を目指す。

達成目標

1. 専門的な知識を習得し、それに基づきより深い客観的な思考高度な論理的思考能力を獲得する。
2. 卒業論文を通し、自らの学術的関心を深める。
3. 互いの学術的関心と視点を提示し、かつ建設的な議論ができる。

スケジュール

【前期】

1. ガイダンス (第1回)
2. 提案型プレゼンテーション (第2回～第4回)
3. 小レポート作成と卒論の課題設定 (第5回～第6回)
4. 論文の作法を学ぶ、卒業論文の構想を練る (第7回～第11回)
5. 卒業論文構想発表会 (第12回)
6. 構想の修正 (第13回)
7. アブストラクトと序論の作成、調査の準備 (第14回～第15回)

【後期】

1. ガイダンス (第16回)
2. 卒業論文中間発表会 (第17回)
3. 個人指導・調査報告会・執筆進捗報告 (第18回～第24回)
4. 卒業論文第一草稿の提出、第一原稿の輪読と批評、個人添削 (第25回～第27回)
5. 卒業論文の完成稿の提出
6. 卒業論文の輪読、要旨の見直し、卒業論文集編集作業、これまでのゼミ調査報告の編集作業 (第28回～第30回)
7. 卒業論文研究発表会

教科書・参考文献

教科書 戸田山和久 (2013) 『論文の教室』NHK出版。

参考書 必要に応じて紹介する。

授業外での学習

<プレゼンテーション> 授業前には必ずグループで準備をしておくこと。
<卒業論文作成> あらかじめ教科書を読んでおくこと。また、卒業論文作成に伴う課題を提示するので締め切りまでに必ずやっておくこと。卒業論文作成そのものも授業外の学習である。

評価方法

プレゼンテーションの成果 (20%)、卒業論文構想発表会および卒業論文中間発表会での発表 (30%)、卒業論文作成に伴うグループワーク (10%)、提出物 (10%)、卒業論文による成果 (30%) 等によって総合的に判断する (カッコ内は基本的配分を示す)。

履修上の注意

授業のスケジュールは、履修者の進捗状況により変更されることもあり得るので留意されたい。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

担当教員
准教授 米本 清 (ヨネモト キヨシ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

都市・地域経済学は経済学の中でも最も現実の世界と密接に関わらざるを得ない分野の一つである。少なくとも短期・中期においては、何が事実上困難なのか、ある政策は当面、誰にどのような影響をもたらすのか、といったことを深く考察しなければならない。

本演習では、都市・地域経済学の理論を応用し、実際の社会・経済問題について分析する。特に、低成長・少子高齢化時代における都市・地域空間構造の変化、地域間の人口移動とその要因、中心市街地の空洞化、災害の地域経済や企業・住民立地への影響を中心に学習を進める。さらに、選好・効用の理論を応用した都市・地域分析の方向性を探る。

達成目標

都市・地域経済学の様々なトピックの中から自らの関心に応じて一つを選択しテーマを設定、専門的な研究・分析を行い卒業論文を作成する。

また、ゼミナールのメンバーとしてコミュニケーション力を高め、大学生活や進路の情報を交換し、大学におけるアカデミックな世界の空気に触れることで、大学生として成長することにも努める。

スケジュール

【前期】

第1回～第2回 導入：

3年次の研究を見直し、4年次の研究計画を明確にして発表する。

第3回～第8回 中心的な研究手法や資料に関する報告：

中心的な研究手法やメインの資料を提示しながら研究を進め、ゼミ内で報告する。

第9回～第14回 研究の実行とその報告：

研究を再検討するとともに、引き続き研究を行ってゼミ内で報告する。

第15回 前期まとめ：

前期のまとめをし、ゼミ内中間報告会の準備をする。

【後期】

第16回～第17回 後期導入：

ゼミ内中間報告会を行い、コメント等を踏まえて研究の再検討をする。

第18回～第23回 卒業論文の執筆：

研究をとりまとめ、卒業論文の執筆を行う。

第24回～第29回 論文の完成と発表会の準備：

卒業論文を完成し、学部発表会や文集作成の準備を行う。

第30回 まとめ：

一年間の研究成果をまとめる。

教科書・参考文献

教科書 必要性を考慮しつつ、その都度決める。

参考書 その都度、配布する。

授業外での学習

自分の回の発表に備えて学習・研究を行い、スライドや論文の作成を進めること。

評価方法

研究の内容とその発表 (70%)

その他学習やゼミ活動における活動状況 (30%)

履修上の注意

このゼミナールで学習・研究する内容が、1)卒業後の社会生活において役に立つ、2)学問的な意義を持つ、のいずれかまたは両方になるよう努力してほしい。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

担当教員
准教授 若林 隆久 (ワカバヤシ タカヒサ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
4

単位区分
必修

単位数
4

開講時期
通年

目的

演習IIでは、各自の興味関心に従ってテーマを設定した上で、卒業論文の作成に取り組む。大学生生活の締め括りとなる卒業研究は、能動的に自分の興味・関心を掘り下げる機会であると同時に、自分の考えを他者に説得力をもって伝える訓練の一助となる。経営学や組織論の対象とする領域・事例は幅広いので、ゼミ生自身の興味関心に従って自由にテーマを設定してもらった上で、大学生生活の締めくくりとなる卒業論文の作成に取り組んでもらう。

達成目標

演習Iで学んだ内容を活用しながら、自分の興味関心に従って、大学生生活の締め括りとなる卒業論文を完成させる。

スケジュール

【前期】

- 第1回 イン트로ダクション
- 第2～4回 テキストの輪読とディスカッション
- 第5～7回 実務家インタビュー
- 第8～9回 論文とは何か、論文の書き方
- 第10～11回 研究テーマの設定
- 第12～14回 調査および研究の方法
- 第15回 研究のテーマと計画の発表

【後期】

- 第16～18回 卒業論文の第1回中間報告と討論
- 第19～21回 卒業論文の第1回中間報告と討論
- 第22～24回 卒業論文の第2回中間報告と討論
- 第25～27回 卒業論文の全体の論理構成と結論の検討
- 第28～30回 卒業論文報告会の準備・リハーサル

※ 人数や講義の進行状況などに応じて、講義の順番・回数・内容は変更になることがあります。
※ 学生の希望に応じて、フィールドワーク、ワークショップ、レクリエーション、グループ研究、課題解決型学習、ゼミ合宿などを実施します。

教科書・参考文献

教科書 いくつかの候補の中から受講者と相談して決定する。

参考書 講義の進行状況に応じて、適宜紹介する。

授業外での学習

各自が自らの興味関心に従って設定したテーマと研究計画のもと、卒業論文の完成に向けた資料・文献収集、調査、執筆を進めていく。その他、ゼミの活動内容や運営に関して、準備やグループワークを行う。

評価方法

受講状況および演習での活動状況をもとに総合的に評価する。

履修上の注意

ゼミ内での「つながり」を重視したゼミ運営を行います。学年内だけではなく学年間でも交流を持ちます。ゼミにおける活動・運営・懇親を楽しく積極的にに行える人を求めています。活動内容であっても人間関係作りであっても、自分から働きかける意欲を重視します。

科目名 演習II
Title Seminar II
科目区分 演習

担当教員
非常勤講師 丸山 宗志 (マルヤマ モトシ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次	単位区分	単位数	開講時期
3	必修	4	通年

目的

この演習では、観光、地域、文化を主なテーマに、それぞれの領域についての理解を深め、社会学的な思考法や分析方法を身につけ、最終的に各自の関心に従って卒業論文を執筆する。
具体的には、メディア、観光、地域社会についての文献の輪読と、地域イベントへの参加、調査を実施する。文献の輪読に際しては、①文献の内容を正確に理解できるようになること、②内容を理解した上で、効果的なプレゼンテーションができるようになること、③自分の卒業論文、研究への応用ができるようになること、の3点を主な目的とする。
さらに、地域イベントへの参与観察、インタビュー、調査票調査を行うことで、現在の地域社会の状況を理解し、文献の知識の相対化、今後の可能性の検討などを行う。

達成目標

この演習では、観光、地域、文化を主なテーマに、それぞれの領域についての理解を深め、社会学的な思考法や分析方法を身につけることを目標とする。専門的な知識の習得や、具体的な政策提言能力を身につけてもらうことは当然だが、ゼミでの活動や論文の執筆を通して、今後の自分の生き方=社会のあり方についてもじっくりと考えてもらいたい。最終的には、学術的な論文の執筆方法を習得し、卒業論文を作成することが目標となる。

スケジュール

第1回	イントロダクション
第2回	文献輪読 観光する主体の形成
第3回	文献輪読 観光における本物と偽物
第4回	文献輪読 観光と文化をめぐる動態
第5回	文献輪読 観光のフィールドワーク
第6回	文献輪読 観光から読み解くポストコロニアリティ
第7回	文献輪読 民族観光の社会理論
第8回	文献輪読 環境と観光
第9回	文献輪読 観光サービス空間のマネジメント
第10回	文献輪読 宗教と観光
第11回	文献輪読 観光における文化と政治
第12回	文献輪読 グローバル時代の観光と異文化理解
第13回	文献輪読 まちづくりと観光
第14回	文献輪読 観光開発と経営
第15回	卒業論文のための調査について
第16回	卒業論文執筆状況の確認
第17回	卒業論文に関する調査の結果報告①
第18回	卒業論文に関する調査の結果報告②
第19回	卒業論文に関する調査の結果報告③
第20回	各自の卒業論文の検討 メディア
第21回	各自の卒業論文の検討 オーセンシティ
第22回	各自の卒業論文の検討 観光まちづくり
第23回	各自の卒業論文の検討 観光空間
第24回	各自の卒業論文の検討 インバウンド
第25回	各自の卒業論文の報告 メディア
第26回	各自の卒業論文の報告 オーセンシティ
第27回	各自の卒業論文の報告 観光まちづくり
第28回	各自の卒業論文の報告 観光空間
第29回	各自の卒業論文の報告 インバウンド
第30回	まとめ

教科書・参考文献

教科書 『観光社会文化論』、安村克己ほか編、くんぎる、他
その他、授業中に適宜指示する
参考書 授業中に適宜指示する

授業外での学習

授業時間中の指示に従い、予習・復習及び論文の執筆を進めること。また、各自の関心に応じてフィールドワークを進めること。

評価方法

文献の理解力とプレゼンテーション能力 (30%) 調査活動、卒業論文 (70%)

履修上の注意

基本的に、授業時間以外に地域イベントへの参加、調査活動などがあります。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

教授 飯島 明宏 (イイジマ アキヒロ)

担当教員 担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

群馬県庁・群馬県衛生環境研究所での環境研究の経験を活かして、深刻さを増し続けている環境問題の今日的課題を取り上げ、政策を通じた問題解決に資する学術研究への動機付けを養うことを目的とした演習を行う。合わせて、プレゼンテーションおよびディスカッションの基礎的な技法を教示する。

達成目標

- ①テキストの輪読を通じて、環境問題に関する今日的課題を理解する。
- ②プレゼンテーションやディスカッション演習を通じて、考えをアウトプットするスキルを身につける。

スケジュール

- ・ アカデミックスキル (第1回～第5回)
- ・ 人類の発展環境問題 (第6回～第7回)
- ・ 持続可能性を脅かす諸問題 (第8回～第9回)
- ・ 環境と人づくり (第10回～第14回)
- ・ 合同研究会 (第15回)

教科書・参考文献

教科書 日本環境教育学会編、『環境教育』, 教育出版, 2012.

参考書 環境省編, 『環境白書』他

授業外での学習

輪読において各自が担当するセクションについては、指定の教科書に限定せずに関連資料からも積極的に情報収集を行うこと。また演習内容をノートに整理し、知識およびスキルの定着を図ること。

評価方法

出席状況、演習に対する積極性、フィールドワークへの貢献等を総合的に評価する。

履修上の注意

週1回の演習に加え、課外でのフィールドワークを随時実施する予定である。意欲的にゼミ活動に取り組む学生を歓迎する。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

担当教員
教授 井門 隆夫 (イカド タカオ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次 2	単位区分	単位数 2	開講時期 後期
-----------	------	----------	------------

目的

観光政策学科としてのゼミナールのスタートにあたり、各自の興味のアウトプット（輪番でのプレゼンテーション）やミニプロジェクトを行う。プレゼンテーションは、初年次ゼミで学んだスキルをベースとし、図書館データベースも駆使しながら現代観光に関する課題をリサーチして発表する。プロジェクトでは実際の社会人と協働してイベント等を企画する。その他、社会人基礎力を養うため、休みを利用したインターンシップへの参加も推奨する。

達成目標

- ・ 観光政策を学ぶにあたり、現代観光の事象に関して幅広く好奇心を持つことができる。
- ・ 初年次ゼミで学んだスキルを活かし、自らの興味を深掘りしたプレゼンテーションを行うことができる。
- ・ 観光の現場での活動を通じて社会人基礎力（特に柔軟性やコミュニケーション力）を高めることができる。

スケジュール

- 第1回 オリエンテーション（ゼミナールに関する説明、ゼミの進め方、自己紹介、役割分担等）
- 第2回 課題提示と順番決め（各自の興味を深掘りとプレゼン資料の作成に向けて）、リサーチ手法について
- 第3回 プロジェクトの説明
- 第4回 課題発表と講評・討議①
- 第5回 課題発表と講評・討議②
- 第6回 課題発表と講評・討議③
- 第7回 プロジェクト計画①
- 第8回 プロジェクト計画②
- 第9回 プロジェクト計画③
- 第10回 プロジェクト準備①
- 第11回 プロジェクト準備②
- 第12回 プロジェクト準備③
- 第13回 プロジェクト準備④
- 第14回 プロジェクト準備⑤
- 第15回 プロジェクト準備⑥

教科書・参考文献

教科書 特になし

参考書 適宜、紹介する。

授業外での学習

ゼミ時間内でグループワークが不足する場合、適宜集まり演習時間外に実施することがある。プロジェクト実施に際し、必要に応じて事前視察を行うことがある。

評価方法

プレゼンに関してはプレゼンテーションのルーブリックで評価する。プロジェクトに関しては終了後のふりかえり面談において評価する。

履修上の注意

本演習では、週1回の演習の他に、冬期または春期休暇中に国内でのプロジェクト（数日間の社会人との協働）を行う。移動にあたっては極力低廉な方法を利用するが、旅費がかかることを承知しておくこと。また、演習II（3・4年生）との合同ゼミを実施することがある。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

担当教員
非常勤講師 丸山 宗志 (マルヤマ モトシ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次	単位区分	単位数	開講時期
2		2	後期

目的

この演習では、観光、地域、文化を主なテーマに、それぞれの領域についての理解を深め、観光研究における社会学と地理学の基礎的な思考法や分析方法を身につけることを目標とする。具体的には、観光社会学、観光地理学に関する文献の輪読と、調査対象地の祭礼やイベントに参加し、予備調査を行う。文献の輪読に際しては、①文献の内容を正確に理解できるようになること、②内容を理解した上で、効果的なプレゼンテーションができるようになること、の2点を目指す。

達成目標

この演習では、観光、地域、文化を主なテーマに、それぞれの領域についての理解を深め、観光研究についての基礎的な思考法や分析方法を身につけることを目標とする。特に、社会学、地理学の基本的な理論や概念を学ぶと共に、それぞれの視点を踏まえた観光研究の枠組みを理解することが目標となる。

スケジュール

回数	内容	授業の進め方
第1回	イントロダクション	
第2回	観光研究の基礎的視点	観光社会学①
第3回	観光研究の基礎的視点	観光社会学②
第4回	観光研究の基礎的視点	観光社会学③
第5回	観光研究の基礎的視点	観光社会学④
第6回	観光研究の基礎的視点	観光社会学⑤
第7回	観光研究の基礎的視点	観光地理学①
第8回	観光研究の基礎的視点	観光地理学②
第9回	観光研究の基礎的視点	観光地理学③
第10回	観光研究の基礎的視点	観光地理学④
第11回	観光研究の基礎的視点	観光地理学⑤
第12回	観光まちづくりの視点①	日本の現状
第13回	観光まちづくりの視点②	世界での広がり
第14回	観光まちづくりの視点③	今後の方向性
第15回	観光研究の方向性	

教科書・参考文献

教科書 大橋ほか編『観光学ガイドブック』ナカニシヤ出版、2014年。遠藤英樹編『観光社会学2.0』福村出版、2018年。ほか授業中に適宜指示する

参考書 授業中に適宜指示する

授業外での学習

授業中の指示に従い、予習、復習を進める。同時に調査対象地の基本的な特性を理解するため、積極的な課外活動への参加を求める。

評価方法

文献の理解力とプレゼンテーション能力 (70%)、課外活動への参加と報告 (30%)

履修上の注意

基本的に授業時間以外に、地域イベントへの参加、調査活動があります

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

教授 岩崎 忠 (イワサキ タダシ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分
必修

単位数
2

開講時期
後期

目的

神奈川県職員（総務部、企画部、県土整備部）としての勤務実績及び政策立案・決定・執行・評価の実務経験をいかして、具体的な政策課題への対応や一連の政策過程の視点を中心に演習を行う。
本演習では、公共政策・行政学の研究手法・基本的な理論について研究を進め、演習Iにスムーズに取り組めるように準備することを目的とする。

達成目標

演習Iの準備段階として位置付け、自治体政策、地方自治制度について幅広い基礎知識を習得するとともに、二ユースで話題になっている自治体課題について議論を行い、学術研究の進め方、仮説の定立・検証、政策分析手法などの体得を目指す。

スケジュール

第1回	オリエンテーション		
第2回	文献①の輪読～第1章	地方創生とは何か	
第3回	文献①の輪読～第2章	自治体担当者は地方創生をどう受け止めたか	
第4回	文献①の輪読～第3章	国土政策と地方創生との関係について	
第5回	文献①の輪読～第4章	自治政策・国土政策から見た国と地方	
第6回	文献①の輪読～第5章	地域政策の新しいパラダイムを探る	
第7回	文献①の輪読～第6章	地方創生を超えて	
第8回	文献①に関する論点整理・ディスカッション		
第9回	文献②の輪読～事例研究	第1章山形県鶴岡市	第2章宮城県山元町
第10回	文献②の輪読～事例研究	第3章福井県鯖江市	第4章栃木県宇都宮市
第11回	文献②の輪読～事例研究	第5章熊本県山江村	第6章和歌山県北山村
第12回	文献②の輪読～事例研究	第7章岡山県西粟倉村	第8章北海道二セコ町
第13回	文献②の輪読～事例研究	第9章愛媛県今治市	第10章島根県海士町
第14回	文献②に関する論点整理・ディスカッション		
第15回	まとめ		

教科書・参考文献

教科書 文献①:小磯修二・村上裕一・山崎幹根『地方創生を超えて～これからの地域政策』岩波書店,2018年
文献②:増田寛也『地方創生ビジネスの教科書』文芸春秋、2015年
参考書 その都度、指示する。

授業外での学習

ゼミ合宿を実施する予定なので参加すること。ニュースに関心をもって、自治体政策、地方自治制度に関する情報を積極的に収集すること。基礎演習後は、関連文献などを適宜参照して、学習内容の定着を図ること。

評価方法

平常点（出席状況、基礎演習への貢献度）50%、担当回の報告内容50%

履修上の注意

毎回出席が原則である。欠席時の直接連絡を義務付ける。無断欠席、理由のない遅刻・早退は厳禁。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

准教授 宇田 和子 (ウダ カズコ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

本演習の目的は、学術的な読み書きの作法を身につけ、研究を遂行するための基本的な能力を獲得することにある。具体的には、①社会学の基礎文献を講読することによって、文献を批判的に検討し、皆で議論する方法を学ぶ。②社会的アカデミック・ライティングを行い、学術的な文章の書き方や問いの立て方を学ぶ。

達成目標

- (1)社会学の入門的な文献を読み、内容を理解することができる。
- (2)与えられた課題について自ら問いを立て、論理的に答えることができる。
- (3)文献や課題を批判的に検討し、それらについて他者と議論することができる。

スケジュール

- 第1回 オリエンテーション：演習の進め方、レジュメの切り方入門
- 第2回 文献講読①「アランの理論」を読む：私たちはいかに学ぶことができるか
- 第3回 文献講読②「座席取りの社会学」を読む：日常的な行為はどのように社会的か
- 第4回 アカデミック・ライティング①「意見を述べる」：私はこう思う
- 第5回 アカデミック・ライティング②「主張を強める」：あなたはこう思うかもしれないが
- 第6回 アカデミック・ライティング③「批判する」：あなた言うことは正しいか
- 第7回 アカデミック・ライティング④「要約する」：つまりこうだ
- 第8回 文献講読③「自閉症はスペクトラム」を読む：「社会」はどこにあるのか
- 第9回 アカデミック・ライティング⑤「見破る」：国語とはなにか
- 第10回 アカデミック・ライティング⑥「概念を解釈する」：貧困とはなにか
- 第11回 アカデミック・ライティング⑦「論理的に構成する」：文明とはなにか
- 第12回 アカデミック・ライティング⑧「さらに批判する」：臓器を売ることは自由か
- 第13回 文献講読④環境社会学の基礎文献を読む
- 第14回 文献講読⑤環境社会学の基礎文献を読む
- 第15回 全体のまとめ

教科書・参考文献

教科書 セミ内で適宜示す。

参考書

授業外での学習

文献を読み、レジュメを切り、小論文を書くなど、演習外の学習時間を十分に確保すること。

評価方法

課題の提出状況 (50%)、議論への貢献度 (50%) で評価する。

履修上の注意

社会学、フィールドワーク入門を履修することが望ましい。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

准教授 大澤 昭彦 (オオサワ アキヒコ)

担当教員 担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

都市計画、景観計画に関わる基礎的な理論と実践の研究を通じて、魅力ある都市空間や景観のあり方を考える力を養うとともに、都市計画学を中心とする基礎的な知識および研究方法・視点の習得を目標とする。
具体的には、(1)都市計画・景観計画に関わる文献の輪読と討議、(2)街歩き(エクスカージョン)の準備(資料作成)、(3)高崎近郊を対象としたフィールドワーク調査などを行う。

達成目標

この演習では、(1)都市計画を中心とする領域の理解を深め、基礎的な研究方法・視点を習得すること(2)調査研究を通じて、論理的な思考方法および論理的に他者へ伝える技術を習得すること(3)都市や地域への関心および問題意識を醸成すること、の三点を目標とする。

スケジュール

第1回 イントロ
第2回～第7回 輪読及び街歩きの準備
第8回～第14回 フィールドワーク調査
第15回 発表

教科書・参考文献

教科書 適宜指示する。

参考書 適宜指示する。

授業外での学習

授業中にあげる文献・資料を率先して読み、自らの考えを整理すること。
国内外を問わず、様々な都市を訪れ、見聞を広めること。

評価方法

受講状況と受講態度をもとに、総合的に評価する。

履修上の注意

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

担当教員 太田 慧 (オオタ ケイ)
講師 太田 慧 (オオタ ケイ)
担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次 2 単位区分 単位数 2 開講時期 後期

目的

人文地理学に関連する文献を購読し、興味関心のあるテーマを紹介してもらうことで、自身が関心のある人文地理学のテーマについて理解を深めることを目的とする。こちらが指定したテキストまたは学術論文を全員で講読し、毎週1人もしくは2人ずつ文献の内容をA3裏表1枚程度にまとめて紹介する。文献は基本的に発表者が前の週までに全員分をコピーして配布し、出席者は発表者の配ったプリントに目を通しておく。発表者の発表終了後には、出席者全員で発表内容についての議論を行う。第7回と第8回目では、住宅地図を用いて土地利用の変化や解釈について実際に手を動かしながら議論する。また、受講者数によっては受講生との相談の上で日帰りの巡検を行う。

達成目標

人文地理学および関連分野のテキストまたは学術論文に掲載された文献を自分で選び講読し、自分の興味関心のあるテーマに触れる。これにより、卒業論文の制作に必要な文献読解力の基礎を身につける。

スケジュール

- 第1回 ガイダンスとオリエンテーション：演習の進め方の説明
- 第2回 テキストの選定と発表順番の決定
- 第3回 文献の内容紹介と討論(1)：ディスカッション
- 第4回 文献の内容紹介と討論(2)：ディスカッション
- 第5回 文献の内容紹介と討論(3)：ディスカッション
- 第6回 文献の内容紹介と討論(4)：ディスカッション
- 第7回 土地利用調査と地図化(1)：住宅地図を用いた土地利用調査
- 第8回 土地利用調査と地図化(2)：住宅地図を用いた土地利用調査
- 第9回 文献の内容紹介と討論(5)：ディスカッション
- 第10回 文献の内容紹介と討論(6)：ディスカッション
- 第11回 文献の内容紹介と討論(7)：ディスカッション
- 第12回 文献の内容紹介と討論(8)：ディスカッション
- 第13回 文献の内容紹介と討論(9) ※受講者数によっては日帰り巡検
- 第14回 文献の内容紹介と討論(10) ※受講者数によっては日帰り巡検
- 第15回 まとめ

教科書・参考文献

教科書 ツーリズムの地理学—観光から考える地域の魅力。菊地俊夫編著，二宮出版，2018。

参考書 地理学概論(第2版)(地理学基礎シリーズ1)。上野和彦・椿真智子・中村康子(編集)：，朝倉書店，2015。

授業外での学習

授業外での学習として、演習中に指定した書籍を読み、要点をまとめる。

評価方法

発表内容と、演習中の発言・議論の参加状況により評価する。

履修上の注意

欠席回数が高崎経済大学の基準回数を超えた場合、不可となるので要注意のこと。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

准教授 小熊 仁 (オグマ ヒトシ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

本演習では、演習Iに入る前の準備段階として、交通・観光に関わる基本テキストの輪読や雑誌記事等の報告を行い、3年次以降ゼミで研究を実施するための基礎を築くことが目的です。具体的には、(1)交通・観光に関する基礎知識の取得や研究の方法・視点を知ること、(2)自分で書籍や雑誌記事を検索し、報告資料の作成までの基本的な手順を身につけること、(3)報告を通してプレゼンテーション力を養うことの3つが目標です。

達成目標

- ・ 交通・観光に関する基礎理論や基礎知識を身に付けること
- ・ 資料検索・報告資料作成というゼミ研究を行う上での一連の基礎的な作法を身に付けること
- ・ プレゼンテーションの基本的スキルを身に付けること

スケジュール

- ・ 観光・交通に関わる基本テキストの講読および報告
- ・ 研究ノート提出(月1回)
- ・ 研究分野の絞り込み
- ・ フィールドワーク等の実施

教科書・参考文献

教科書 受講生の関心や希望に応じて決定します。

参考書 講義中に適宜指示します。

授業外での学習

できるだけ早く各自の関心に沿った研究スタイルを確立させるため、月に1回「研究ノート」の提出を求めます。また、ゲストスピーカーによる講義やフィールドワークを行うこともあります。

評価方法

出席状況、受講態度、活動への貢献などをもとに総合的に評価します。

履修上の注意

無断欠席、および理由のない遅刻、早退は厳禁です。自分が研究してみたい事に自発的・積極的に取り組む学生を歓迎します。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

教授 片岡 美喜 (カタオカ ミキ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

本講義では、ゼミに配属されたばかりの2年次生を対象に、専門学習の導入を学ぶことと、ゼミ生間の早期の交流を図ることを目的としている。
主な演習内容としては、①専攻の導入にあたる文献を学習すること、②12月に実施されるエコツーリズム学生シンポジウムでの研究発表を行うことを目標に、講義を進めてゆく。

達成目標

- ・ゼミの専攻に関する基礎的な知識を学ぶ
- ・グループ研究を通して、研究の手法を学ぶ

スケジュール

- 第1回 ガイダンス：基礎演習の進め方、今期のスケジュール
- 第2回 グループ研究の課題発表、研究チームのグループわけ
- 第3回 文献学習①
- 第4回 文献学習②
- 第5回 グループ研究中間報告会①
- 第6回 文献学習③
- 第7回 文献学習④
- 第8回 グループ研究の成果報告練習
- 第9回 文献学習⑤
- 第10回 エコツーリズムシンポジウムにむけた研究報告会①
- 第11回 エコツーリズムシンポジウムにむけた研究報告会②
- 第12回 文献学習⑥
- 第13回 文献学習⑦
- 第14回 ワークショップ
- 第15回 基礎ゼミのまとめ：今期の振り返り、春休み中の指示

教科書・参考文献

- 教科書 *学年に応じて適宜指示。
例年は調査手法、エコツーリズム、グリーンツーリズムに関連する専門書を読んでいる。
- 参考書

授業外での学習

文献学習に際して事前の予習、グループ研究では各班で成果をまとめるなどを行う。

評価方法

出席状況、提出物、研究報告などを通じて、総合的に評価を行う。

履修上の注意

ゼミ生間の協力で基礎演習も実施します。文献学習やグループ研究など、主体性が求められる講義ですので、積極的な参画をお願いします。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

教授 金光 寛之 (カネミツ ヒロユキ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

民法を学ぶことにより論理的な思考を身に着けることを目的とする。

達成目標

基礎演習を通じて民法の基本的概念を理解することを目標とする。

スケジュール

- 第1回 ガイダンス 今後の基礎演習の進め方について
- 第2回 民法の基本原則に関する事例研究
- 第3回 権利の主体に関する事例研究
- 第4回 権利の客体に関する事例研究
- 第5回 法律行為に関する事例研究
- 第6回 代理に行為に関する事例研究
- 第7回 時効に関する事例研究
- 第8回 物権変動に関する事例研究
- 第9回 所有権に関する事例研究
- 第10回 担保物権に関する事例研究
- 第11回 保証と連帯保証に関する事例研究
- 第12回 詐害行為に関する事例研究
- 第13回 契約に関する事例研究
- 第14回 不法行為に関する事例研究
- 第15回 まとめ 今後の演習の進め方について

教科書・参考文献

教科書 適宜指示をする。

参考書 適宜指示をする。

授業外での学習

判例集その他の法律的文献をよく読むこと。

評価方法

授業内の発言等で総合的に評価をする。

履修上の注意

私語は慎むように

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

担当教員
教授 熊澤 利和 (クマザワ トシカズ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

熊澤研究室では、医療や福祉の現場で生じる課題に対するソーシャルワークを専門領域としています。近年の課題として、「終末期医療における意思決定支援」「医療福祉におけるスピリチュアルケア」「地域福祉計画に対する政策的評価」「看護師や介護福祉士等の職員のストレス」などから研究をしています。この基礎演習クラスでは、皆さんがこれまで学習してきたことを踏まえ、医療者と患者（援助者と当事者）のズレ（考え方や受け止め方など）に着目し、「問い」をたてるための技法とその謎を解くための方法について学び、学習スキルの深化を図ります。

達成目標

- (1)医療福祉領域における人間関係論について理解できる
- (2)疑問を探究するための「問い」をたてることができる。
- (3)グループ学習を通して、コミュニケーション能力を養う。
- (4)プレゼンテーション能力を養い、成果を公表する方法を学ぶ。

スケジュール

- 第1回 はじめに
第2回 演習①：グループ学習の技法について
第3回 演習②：ファシリテーションの技法について
第4回 文献の輪読①（『医療現場の行動経済学-すれ違う医者と患者』）
・内容を共有する - 合理的な意思決定と逸脱（バイアス）について
第5回 文献の輪読②（『医療現場の行動経済学-すれ違う医者と患者』）
・内容を共有する - 意思決定を促す「ナッジ」とシェアード・ディシジョン・メイキング（shared decision making）
第6回 「問い」をたてる①：文献の輪読を通して、各自「問い」をたてる
第7回 「問い」をたてる②：各自の課題を踏まえて、グループで「問い」を深化させる
第8回 演習③：文献検索とデータベース化
第9回 「問い」の探求①：根拠を調べ、検討する
第10回 「問い」の探求②：根拠を調べ、検討する
第11回 「問い」の探求③：根拠を確かにするために、討議し、まとめる
第12回 相互評価と報告（1巡目）
第13回 相互評価と報告（2巡目）
第14回 相互評価と報告（3巡目）
第15回 振り返り

教科書・参考文献

- 教科書 大竹 文雄 平井 啓編(2018)『医療現場の行動経済学-すれ違う医者と患者』,東洋経済新報社
前田 安正(2018)『マジ文章書けないんだけど』,大和書房
- 参考書 慶應義塾大学教養研究センター監修 新井和広 坂倉杏介(2013)『グループ学習入門-学びあう場づくりの技法』,慶應義塾大学出版会 その他は、演習時に紹介します。

授業外での学習

講義ノートや教材をしっかりと活用するとともに、宿題やグループ学習に積極的に取り組み、学習内容の定着を図ること。

評価方法

演習への参画（40%）、課題の提出（60%）を基準に評価する。

履修上の注意

学生の主体性をより重んじます。自ら学習課題を見いだす努力が必要となります。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

教授 黒川 基裕 (クロカワ モトヒロ)
担当教員 担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

次年度からの演習に向けて、マーケティング調査手法の習得や商品企画プロセスの理解促進を目指します。また、現在進行中のプロジェクトに参画しながら研究室に馴染んでもらいたいと思います。

達成目標

1. マーケティング調査の手法を習得する。
2. 商品企画プロセスを理解する。
3. フィールドワークに向けての準備を進める。

スケジュール

- 第1回 研究室のコンセプト説明
- 第2回 開発経済学の中のデザイン学
- 第3回 途上国とデザイン
- 第4回 BOPビジネス—理論
- 第5回 BOPビジネス—事例集
- 第6回 商品企画プロセス
- 第7回 潜在需要の分析
- 第8回 アンケート調査票の設計
- 第9回 実査計画の立案
- 第10回 実査と解析
- 第11回 解析結果のとりまとめ
- 第12回 シーズ探索
- 第13回 企画案の構成
- 第14回 FGI実習
- 第15回 振り返り

教科書・参考文献

教科書 特に指定しません。

参考書 神田範明 (2000) 『ヒットを生む商品企画七つ道具 よくわかる編』日科技連

授業外での学習

希望者には、2年次の夏休み、春休みからタイ、インドネシア、ガーナでのインターンの機会を提供します。

評価方法

講義内での課題提出、プロジェクトへの貢献を基準として判定します。

履修上の注意

「技術とデザインで途上国を彩る」ことを目的とした開発経済学の研究室です。演習でも一緒に勉強しますが、プロジェクト推進を中心に行っているため、積極的な参画を期待しています。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

教授 小牧 幸代 (コマキ サチヨ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次	単位区分	単位数	開講時期
2		2	後期

目的

本演習の目的は、専門書の輪読を通じて、文化人類学におけるフィールドワークの理論を学び、実際に挑戦し、その成果を短いレポートにまとめることにある。最近では、人文社会科学の多くの分野でも教室の外に出るこゝが推奨され、調査対象となる人にアンケート調査、インタビュー調査、ライフヒストリー調査などの手法を用いたフィールドワークをおこなうことが、かなり普通となってきた。しかし、人類学が最も大切にすることは、「参与観察」である。参与観察とは、調査者と被調査者が同一地平に立って、同じ目線で物事を見たり体験したりすることであり、他者の生き方や考え方を、「他者」として理解しようとする調査法である。そこでは、質問や会話を必要としない場合もある。誰を、「他者」ととらえ、いつどこで「他者」と出会い、いかに「他者」との距離を縮め理解を深めるか、それは「自分」のこれまでの生き方や考え方が問われる実践でもある。

達成目標

フィールドノートを携帯し、常にメモをとる習慣を身につけること。そして、興味をおぼえたらすぐに調べること。基礎学力(教養)・積極性(意欲)・実行力(行動)・会話力(想像力)・独創性(創造力)が身につくよう、意識して日々の生活を送ること。これらが自然とできるようになることが、フィールドワークの基礎を習得しようとする本演習の達成目標である。

スケジュール

第1回	ガイダンス～自己紹介、サブゼミA・B・C班分け、輪読担当決め
第2回	アイスブレイク
第3回	輪読：教科書・序章(A班)、3分間スピーチ(B班)、フィールドワーク構想(C班)
第4回	輪読：教科書・1章(B班)、3分間スピーチ(C班)、フィールドワーク構想(A班)
第5回	輪読：教科書・2章(C班)、3分間スピーチ(A班)、フィールドワーク構想(B班)
第6回	輪読：教科書・3章(A班)、3分間スピーチ(B班)、フィールドワーク準備(C班)
第7回	輪読：教科書・4章(B班)、3分間スピーチ(C班)、フィールドワーク準備(A班)
第8回	輪読：教科書・5章(C班)、3分間スピーチ(A班)、フィールドワーク準備(B班)
第9回	輪読：教科書・6章(A班)、3分間スピーチ(B班)、フィールドワーク実践(C班)
第10回	輪読：教科書・7章(B班)、3分間スピーチ(C班)、フィールドワーク実践(A班)
第11回	輪読：教科書・8章(C班)、3分間スピーチ(A班)、フィールドワーク実践(B班)
第12回	輪読：教科書・9章(A班)、3分間スピーチ(B班)、フィールドワーク報告(C班)
第13回	輪読：教科書・10章(B班)、3分間スピーチ(C班)、フィールドワーク報告(A班)
第14回	輪読：教科書・11章(C班)、3分間スピーチ(A班)、フィールドワーク報告(B班)
第15回	輪読：教科書・終章、まとめ

教科書・参考文献

- 教科書 菅原和孝 『フィールドワークへの挑戦：<実践>人類学入門』 世界思想社
- 参考書 綾部恒雄・桑山敬己編 『よくわかる文化人類学 第2版』 ミネルヴァ書房

授業外での学習

レポート作成のためのフィールドワーク(参与観察、アンケート調査、インタビュー調査、ライフヒストリー調査)は、基本的に各人がそれぞれに、授業外の都合のよい日時に実施する。そのためにも、普段から、様々な媒体を通じて情報・データを収集する習慣、そしてメモを取る習慣を身につけておくこと。

評価方法

ゼミでの活動(輪読のレジюмеとプレゼン、スピーチの内容、フィールドワークの中間報告とレポートの完成度、出席状況など)を総合的に判断して評価する。フィールドワークの対象とレポートのテーマ設定に際しては、視点の独創性をとくに高く評価する。

履修上の注意

「常識」を疑って、自分の目と耳と足で確かめる文化人類学の方法を、十全に理解しておくこと。そのためにも、講義科目「文化人類学/比較文化論」もしくは「宗教学」のどちらか一方または両方を事前に履修しておくことが好ましい。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

教授 櫻井 常矢 (サクライ ツネヤ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次	単位区分	単位数	開講時期
2		2	後期

目的

生涯学習・社会教育は、地域コミュニティやNPOをはじめとする様々な地域づくりの実践、人びとのキャリア形成、そしてそれらを支える社会教育施設の運営や専門的人材についてなど、地域と向き合う社会的な組織や実践に教育・学習の視点からアプローチする研究領域である。本基礎演習は、こうした研究への入門編として、よりシンプルに地域づくりと教育との関係を多様な角度から解説する。また日々の地域づくりやそこで繰り広げられる住民の学習とは実践的かつ共同のものであるため、それに学ぼうとする私たちにもまた同様の関係性が求められる。そのためチームビルディングの手法を取り入れながらゼミ生全員参加による学習スタイルの習得を重視する。

達成目標

本演習では、①地域づくりと教育・学習の関連が理解できること、②学習や調査の基本的手法が理解できること、③ゼミ生同士の相互理解や共同関係を構築し、演習での本格的な調査研究に向けた環境を整えることを目標とする。

スケジュール

- 第1回：オリエンテーション（演習の進め方等について）
- 第2回：グループワーク①（私たちのくらしと教育・学習）
- 第3回：グループワーク②（地域・市民の自立とは何か）
- 第4回：地域づくりの実践に学ぶ①（海外の地域学習支援の取り組み）
- 第5回：地域づくりの実践に学ぶ②（日本の市民活動支援の取り組み）
- 第6回：文献の輪読①（学習社会論に学ぶ）
- 第7回：文献の輪読②（日本の生涯学習政策）
- 第8回：文献の輪読③（社会教育行政の役割と仕組み）
- 第9回：文献の輪読④（地域づくりと教育・学習I）
- 第10回：文献の輪読⑤（地域づくりと教育・学習II）
- 第11回：グループワーク③（輪読からの論点整理）
- 第12回：事例調査の手法①（調査の視点）
- 第13回：事例調査の手法②（ヒアリング項目）
- 第14回：事例調査の手法③（調査のまとめ）
- 第15回：グループワーク④（総括）

教科書・参考文献

教科書 演習中に適宜紹介する

参考書 『テキスト生涯学習』学文社

授業外での学習

次回の演習範囲に関連する内容について、演習内で指定（配布）した資料などをよく読んで予習しておくほか、演習後は必ずノートや配布資料に目を通し学習内容の定着に努めること

評価方法

演習への取り組み姿勢、発表内容等を総合的に判断して評価する。

履修上の注意

毎回の発表、コメント、そしてコーディネイト役などに積極的に取り組む姿勢とともに全員参加での演習づくりを大切にするなど、自分たちで創り上げようとする学生の受講を求めたい。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

教授 佐藤 彰彦 (サトウ アキヒコ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

本演習は、演習I・IIで取り組む学習ならびに研究活動への橋渡しとして、基礎的な能力を身につけることを目的とします。グループワークを主体に、話す・聞く・考える・まとめる・伝えることの基本を学んでいきます。

達成目標

- ①常識にとらわれず自由な発想で物事を考えることができる
- ②相手の話を聞いて理解し、その上で自分の考えをまとめ、伝えることができる
- ③調査の企画・立案～実査～とりまとめ、という調査研究の一連の行為を理解し、実践することができる

スケジュール

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 プレゼンテーションの基礎
- 第3回 プレゼンテーションの実践 (他者に自分を知らせてもらう)
- 第4回～第7回
「1万円の無駄遣い」企画 (他ゼミと共催予定) の準備と
「勝手に政策提言1」の作業を並行しておこなう
→この間、グループワークの発表などプレゼンテーションの実践を含む
- 第8回 「1万円の無駄遣い」企画報告会
- 第9回～第14回
「勝手に政策提言2」
→前半で議論したテーマのなかから政策的課題ひとつを取り上げ、
調査企画～フィールド調査～考察からとりまとめ、という一連の作業をおこなう
→後半の作業を通じて、卒論テーマを探索していく
- 第15回 「勝手に政策提言2」報告会

教科書・参考文献

- 教科書 授業内で適宜紹介。なお、レポートや論文の書き方にかんする教科書を最低1冊は用意し、ひととおり学習しておくこと。
- 参考書 必要に応じて、授業内で適宜紹介。

授業外での学習

授業内で学習した内容を深め、自分のものとするため、関連情報をお調べたり、そのために関係機関などに調査をおこなうことを強く勧めます。

評価方法

ゼミへの参加・貢献状況、成果品のとりまとめ (報告書やプレゼンなど) を総合的に判断して評価する。

履修上の注意

日頃から身の回りで起きていることに興味関心をもって、問い続ける習慣を身につけてください。グループで学習することを意識し、常に自分の役割ややるべきことを考えて行動しましょう。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

教授 佐藤 公俊 (サトウ キミトシ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

基礎演習では、演習I・IIにおいて目的とするところの「能力開発」の基礎となる「学びの技法」を身につけることを目指す。具体的には、プレゼンテーションやディスカッションなど、アウトプットとコミュニケーションの技法の習得のためのトレーニングを行う。素材として取り扱うのは主に公共政策、行政、政治となるが、それ以外のテーマ（経営や観光）なども取り扱うことがある。

達成目標

プレゼンテーション、ディスカッション、ディベートなどの手法を身に付け、演習I・IIを充実した状態で履修することができることを目指す。さらに、またそれらの手法を用いて初歩的な「研究」を行い、最低一つのテーマについて研究を完成させることを目指す。

スケジュール

【後期】

- ①グループ研究のテーマ選定
- ②グループ・ディスカッション
- ③フィールド・ワーク
- ④グループ研究のプレゼンテーション
- ⑤ディベート

以上のことを適時スケジュールを調整しながら15回にわたり行う。

教科書・参考文献

教科書 なし。

参考書 適宜指示する。

授業外での学習

出席が必要なのは基礎演習の時間だけである。課題はほぼ全てグループワークなので、各自時間をやりくりして、協力して行うこと。

評価方法

達成目標の達成度：50%、演習への貢献：50%。

履修上の注意

なし。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

教授 佐藤 徹 (サトウ トオル)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

人口減少、少子・高齢化、住民の価値観の多様化、財政危機の深刻化等により行政には、住民に対する説明責任、サービスの効率化、成果重視の行政運営が求められている。こうしたなか、行政はいかにして住民ニーズに対応した政策を立案・実施すればよいのだろうか。また、行政はどのようにNPOや民間企業などと連携・協働しながら地域課題の解決や公共サービスの提供を行えばよいのか。本演習では、上記の諸課題に対し「行政経営」「都市政策」「政策評価」「住民参加・協働」などを研究テーマとして、理論と実践の両面からアプローチしていく。

達成目標

これから「研究」をスタートさせるにあたり、政策学や行政学の基礎を固めるとともに、プレゼン能力やコミュニケーション能力の向上を図ること。

スケジュール

第1回 イン트로ダクション
第2～4回 「研究」とは何か
第5～6回 リサーチクエスト / 仮説の設定の方法
第7～13回 政策学または行政学に関する入門書を題材としたグループ・ディスカッション
第14～15回 全体総括

教科書・参考文献

教科書 特に指定しない。

参考書 その都度、紹介する。

授業外での学習

地域政策やまちづくりに関するトピックスに関心を持つこと。

評価方法

授業中の発言、グループディスカッションにおける貢献度などを総合的に評価する。

履修上の注意

特になし。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

教授 佐藤 英人 (サトウ ヒデト)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

本演習では現代の都市問題を考える上で基礎となる素養を体得する。前半は都市地理学や経済地理学に関する文献の輪読をおこない、毎回数名から報告を求め、その報告をもとに討論する。後半は3年次に参加するプレゼンテーション大会に向けたグループ研究の企画・立案をおこない、フィールドワークによるデータの収集方法や立論の仕方などを学ぶ。

達成目標

発表や討論を通じて、問題発見能力、問題解決能力、プレゼンテーション能力の素養を高めることが、本演習の目標である。

スケジュール

- 第1回 ガイダンス、輪読の順番決め
- 第2回 指導教員による講義
- 第3回 輪読(1) ※各回2名ずつ発表
- 第4回 輪読(2)
- 第5回 輪読(3)
- 第6回 輪読(4)
- 第7回 輪読(5)
- 第8回 輪読(6)
- 第9回 総合討論
- 第10回 プレゼンテーション大会に向けたグループ研究の立案(1)
- 第11回 プレゼンテーション大会に向けたグループ研究の立案(2)
- 第12回 調査実務の検討(1)
- 第13回 調査実務の検討(2)
- 第14回 改善点・修正点の洗い出し
- 第15回 演習の振り返りとまとめ

教科書・参考文献

- 教科書 リチャード・フロリダ著・井口典夫訳(2014)『新クリエイティブ資本論-才能が経済と都市の主役となる-』ダイヤモンド社, 488p (2,800円+税)
- 参考書 演習の中で適宜、紹介する。

授業外での学習

学期中の土日を利用して、日帰りの国内巡検を予定している。さまざまな地域に対して知的好奇心を持っていただきたい。

評価方法

プレゼンテーションの内容、討論への参加度、レポートの完成度等によって総合的に評価する。

履修上の注意

出席に自信のない者の履修は認めない。発表者が無断欠席した場合、履修停止(不合格)となるので注意すること。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

講師 鈴木 耕太郎 (スズキ コウタロウ)
担当教員 担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次 2 単位区分 単位数 2 開講時期 後期

目的

オリジナルな研究成果 (= 卒論執筆) をあげるためには、そもそも自分がどのような学問をやろうとしているのか、また過去にどのような研究成果ないし課題が蓄積され、今に至っているかをきちんと把握しておく必要がある。本演習では、民俗学および説話文学 (伝承文学) や日本神話学などの基本的な文献を輪読し、ベースとなる知識を理解することを目的とする。あわせて、3年生時のゼミへと進む際に各自がおさえておくべき先行研究にも目を通し、現在に至る研究動向を把握できるようにする。

達成目標

2年後、卒業論文を執筆・提出するにあたって必要となる以下3点を達成する。

- 1: どのような方法で研究するのかを明確化する……研究手法・方法論の確定
- 2: 卒論で取り上げる (予定) のテーマでは、これまでどのような研究成果が蓄積されているのかを把握する……

スケジュール

- 第1回 ガイダンス・自己紹介など
- 第2回～第7回 民俗学・説話文学・日本神話学に関する基礎的文献の輪読 (1回 : 30分×2名)
- 第8回 フィールドワーク (巡見) ……土・日に行う。第1回ガイダンス時に説明。
- 第9回～第14回 各自の卒論 (予定) テーマに関する先行研究の輪読
- 第15回 3年生時の研究計画についての検討 (※)

※なお、要望があれば第15回は第2回フィールドワークを行う。

教科書・参考文献

教科書 指定しない。

参考書 事前には指定しない。必要なものは適宜、指示する。

授業外での学習

輪読に際しては担当外であっても質疑などが出来るように必ず本文を読み込んでおくこと (疑問点や詳しく説明が聞きたい点などは各自、メモを取るなりしておくこと) 。

評価方法

日常評価点 (輪読担当時の発表内容・他者の発表に対する質疑など) に加え、学期末に提出してもらった小レポートの内容などを総合的に鑑みて評価する。

履修上の注意

- 1、演習内では忌憚のない意見を言えることが求められる。教員が指名するのではなく、積極的に自分から議論の輪に加わろうという姿勢を示して欲しい。
- 2、なるべく問題意識や興味関心の幅は、「広げる」ことを意識して欲しい。「これだけしかやりたくない」という態度では、卒論執筆時に困るため。他者の発表なども、自分ならどの点に着目するか、どういう切り口で臨

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

教授 鈴木 陽子 (スズキ ヨウコ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

演習Iで専門的研究に取り組むにあたり、専門的な文献の解読になれること、および基本的な研究スキルを身につけることを目的とする。本講義では扱う判例の基礎知識として、法学上の問題について講義をした上で、問題点を意識しながら判決文を読む。そして判決はその問題をどのように評価したか、判決に対してどう思うかを討議し、各自で判決に対する評釈を行う。その過程で研究のプロセスから講義をすることで、実践的に研究スキルを身につけていく。

達成目標

- | | | |
|--|---------------------|---|
| 1 専門的な文献(特に判決文)の読解に慣れること
レポート等のアカデミックライティングに慣れること | 2 基本的な研究スキルを身につけること | 3 |
|--|---------------------|---|

スケジュール

- | | | |
|------|-------------------|--------------|
| 第1回 | ガイダンス | |
| 第2回 | 研究スキルを身につける | ①研究プロセス・資料収集 |
| 第3回 | 判例研究① 争点についての基礎知識 | |
| 第4回 | 判例研究① 判例を読む | |
| 第5回 | 判例研究① 弁論の作成 | |
| 第6回 | 研究スキルを身につける | ②プレゼンテーション |
| 第7回 | 判例研究② 争点についての基礎知識 | |
| 第8回 | 判例研究② 判例を読む | |
| 第9回 | 判例研究② 弁論の作成 | |
| 第10回 | 研究スキルを身につける | ③論文・レポートを書く |
| 第11回 | 研究スキルを身につける | ④文献の引用・倫理 |
| 第12回 | 判例研究③ 争点についての基礎知識 | |
| 第13回 | 判例研究③ 判例を読む | |
| 第14回 | 判例研究③ 弁論の作成 | |
| 第15回 | まとめ | |

教科書・参考文献

教科書 参考資料を適宜配布する

参考書 特に指定しない

授業外での学習

指定された資料を読む、指示された課題の準備し、ゼミに臨んでください

評価方法

発表とレポート、ディスカッションへの参加姿勢

履修上の注意

予習も含め、授業内においても積極的に授業に参加してください。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

教授 高橋 伸次 (タカハシ シンジ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

現代のスポーツには、さまざまな価値や概念が認められる多様性がある。したがって今日のスポーツを理解するためには、多角的な視点をもつことと、そこからどのように接近すべきなのかを学ぶ必要がある。本演習では、そうしたことに気づかせることを目的とする。

達成目標

スポーツに関するさまざまな資料や文献にあたることでスポーツへの科学的視点をもたせ、スポーツ研究への発想を導く。

スケジュール

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 スポーツに関するさまざまな資料や文献にあたることでスポーツへの科学的視点をもたせ、スポーツ研究への発想を導く。
- 第3回 スポーツ研究への導入 (卒業論文レビュー)
- 第4回 グループ研究 (テーマの選定)
- 第5回 グループ研究 (資料収集)
- 第6回 グループ研究 (資料収集)
- 第7回 グループ研究 (資料の整理、分析、討論)
- 第8回 グループ研究 (資料の整理、分析、討論)
- 第9回 グループ研究 (資料の整理、分析、討論)
- 第10回 グループ研究 (報告書の作成)
- 第11回 グループ研究 (報告書の作成)
- 第12回 グループ研究 (報告書の作成)
- 第13回 グループ研究 (報告)
- 第14回 グループ研究 (報告)
- 第15回 グループ研究 (報告)

教科書・参考文献

教科書 適宜指示する。

参考書 適宜指示する。

授業外での学習

新聞、雑誌、テレビ等のスポーツ情報の収集。

評価方法

受講状況、受講態度、報告の内容等を総合的に判断して評価する。

履修上の注意

スポーツ研究に繋がるスポーツ的発想は、スポーツの経験を通して導かれるものである。したがって、積極的なスポーツ活動をしている学生の参加を希望する。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

担当教員
准教授 高橋 美佐 (タカハシ ミサ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

本演習では、意思決定問題のための確率、オペレーションズ・リサーチ (OR) 分野の基本理論を学び、実際に応用する力を養う。自治体、企業などの組織や個人は将来の計画や日常の運営においてさまざまな意思決定が必要になる。たとえば企業の生産・販売活動で何をどれくらい作ればよいか、リスクを分散するために何にどのくらい投資すればよいか等の問題である。このようなときORでは、必要な情報を集め、問題の構造を明確にして(モデル化)、確率、統計やコンピュータシミュレーションなどの数理分析をおこない意思決定のための判断材料を提供する。基礎演習では、テキストにより基本理論と手法に関する基礎的知識を学ぶ。

達成目標

1. テキストの輪読等を通して、統計学や数理学分野の基礎に関する学習方法を身につける。
2. 数理的手法とモデル化に関する基本的知識を習得し、論理的思考力を鍛える。

スケジュール

- 第1回： ガイダンス
- 第2～11回： テキストの輪読 / ディスカッション
- 第12～14回： 演習課題と応用 / ディスカッション
- 第15回： 学習の振り返り

教科書・参考文献

教科書 オペレーションズ・リサーチ、確率・統計学の分野の入門的テキストのいくつかの候補から、ゼミ生と相談して決定する。

参考書 松井泰子ほか『入門オペレーションズ・リサーチ』今野浩『数理決定法入門～キャンパスのOR～』高橋幸雄ほか『混雑と待ち』、森雅夫ほか『オペレーションズ・リサーチ』など

授業外での学習

次回の内容について、テキスト等をよく読み、予習しておくこと。また、授業後は、学習内容を思い出し定着を図ること。特に報告担当者は、十分な事前準備が欠かせない。他のテキストも参考にしたり、教員のアドバイスが必要な場合は早めにコンタクトをとるなどの心がけが必要である。

評価方法

演習での報告内容、参加姿勢、出席状況などをもとに総合的に評価する。

履修上の注意

特になし。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

准教授 田戸岡 好香 (タドオカ ヨシカ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

政策やルールを策定しても、思ったような成果をあげられないことがある。昨今では、社会問題を考える際に、人の心の働きを適切に理解することが重要だという指摘があり、社会心理学の研究が注目されるようになってきている。そこで、本演習では、社会心理学の観点から人間行動や心に関する研究を行うための基礎知識を身に付けることを目的とする。文献の輪読を通して社会心理学の理論や知見を学び、英語論文を読むための基礎力も培うことを目指す。

達成目標

社会心理学の基礎的な知識を有する。
社会心理学の知識を研究関心に結びつけることができる。

スケジュール

第1回 ガイダンス(ゼミの進め方の説明)
第2回～第7回 文献の輪読
第8回～第10回 社会心理学の研究方法を学ぶ
第11回～第15回 教科書により、英語で社会心理学の基本概念を学ぶ

教科書・参考文献

教科書 大坪庸平・アダムスミス(2017)英語で学ぶ社会心理学, 有斐閣
その他, 授業時にプリントを配布する
参考書 適宜, 授業内で紹介する。

授業外での学習

自分の発表の準備に限らず、指定の資料には事前に目を通して授業に臨むこと。また、自分の興味関心を明確にしていくために、さまざまな書籍やメディアから情報を得るようにすること。

評価方法

輪読の際の報告発表、授業への参加意欲などから総合的に評価する。

履修上の注意

「社会心理学」「社会調査(量的調査)」の授業を履修することが望ましい。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

教授 担当教員
坪井 明彦 (ツボイ アキヒコ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

現在、マーケティングは企業ばかりではなく、非営利組織や地方自治体など、顧客が存在するあらゆる組織にとって必要な考え方となっている。本ゼミでは、地域の問題解決や活性化のためにマーケティングの視点からのアプローチができるように、マーケティングの基本的な考え方を学んでいくとともに、現実の企業活動についての理解を深めることを目的とする。

達成目標

マーケティングの基本的な考え方を理解する。グループ・ワークを通じて、チームワークやコミュニケーション能力を身につける。課題を発見し、課題の解決策を論理的に提示できる。

スケジュール

- 第1回 授業計画、各自のジェネリック・スキルの自己診断・目標設定
- 第2回 マーケティングを学ぶ
- 第3回 競争戦略
- 第4回 セグメンテーションとターゲティング
- 第5回 ポジショニング
- 第6回 消費者行動
- 第7回 マーケティング・リサーチ
- 第8回 新製品開発
- 第9回 価格戦略
- 第10回 流通チャネル戦略
- 第11回 マーケティング・コミュニケーション
- 第12回 ブランド構築
- 第13回 サービス・マネジメント
- 第14回 経験価値マーケティング
- 第15回 リレーションシップ・マーケティング

教科書・参考文献

教科書 青木幸弘 (編) 2015 『ケースに学ぶマーケティング』有斐閣

参考書 適宜指示する。

授業外での学習

毎回、そのテーマに沿った課題がある。事前にテキストを読み、グループで演習問題に取り組むこと。

評価方法

授業への貢献60%、グループでの課外活動40%。

履修上の注意

正規の授業時間だけでなく、その前の課題への取り組み、課外活動など授業以外に多くの時間を割くことになる。また、グループでの取り組みも多い。個人で努力することはもちろん、コミュニケーション能力やリーダーシップも身につけてほしい。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

教授 友岡 邦之 (トモオカ クニユキ) 担当教員 担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

本演習では、演習Iおよび演習IIにおける調査研究・論文作成に必要な基礎能力の涵養をめざす。具体的には、文章の作成と添削、および地域政策学、社会学、文化政策研究、文化研究に関する基礎文献の購読を行う。また、地域づくりに関する実践的な取り組みを紹介し、必要に応じてその現場に接する機会を作る。

達成目標

- ・ 日本語による文章表現能力の向上
- ・ 論文執筆に関する技法の習得
- ・ 地域政策学、社会学、文化政策研究、文化研究に関する学説、概念の習得

スケジュール

- 第1回 文章執筆および添削(1)
- 第2回 文章執筆および添削(2)
- 第3回 文献購読(1)
- 第4回 文献購読(2)
- 第5回 文章執筆および添削(3)
- 第6回 文章執筆および添削(4)
- 第7回 文献購読(3)
- 第8回 文献購読(4)
- 第9回 地域づくりの現場を知る(1)
- 第10回 地域づくりの現場を知る(2)
- 第11回 地域づくりの現場を知る(3)
- 第12回 文章執筆および添削(5)
- 第13回 文章執筆および添削(6)
- 第14回 文献購読(5)
- 第15回 文献購読(6)

教科書・参考文献

教科書 指定しない。

参考書 必要に応じて指示する。

授業外での学習

自主的な読書と文章執筆、および地域社会の現場での活動を必要とする。

評価方法

毎回の演習における課題への対応により評価する。

履修上の注意

大量の読書と文章執筆、および積極的な地域社会の現場での活動を期待する。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

教授 中村 匡克 (ナカムラ タダカツ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

少子化による人口減少や高齢化が進展する中で地方自治体は多くの課題に直面しており、政策の企画・立案に関わる高度な人材に対するニーズはますます高まっています。そこで本ゼミでは、地域政策について考える際の土台を築くために、経済学の考え方（特に、政治経済学の一分野である公共選択論）や計量分析の手法を学んでいきます。経済学の考え方は、地域社会が抱えるさまざまな課題を発見したり解決に導くための政策について考えるにあたって、計量分析の手法は、課題の原因や政策の効果を明らかにしたりする際に役立つものです。なお、4年生のときに取り組む卒業研究は、各自の興味・関心にもとづいて選んだテーマに取り組んで構いません。たとえば、過去のゼミ生は、財政・地方財政、地方分権、地域金融、中小企業、環境・景観、まちづくり、観光・交通、スポーツ振興などの問題に取り組んでいます。

達成目標

本ゼミでは、次のような目標を掲げてさまざまな活動を行っています。
(1) お互いの個性を尊重しあい、良いところをさらに伸ばしていこう。(2) 自ら判断して、積極的に行動できるようになろう。(3) 社会にでてからも強く生きて行ける、たくましさをも身につけよう。(4) 自分自身をよく見つめ直し、将来、本当にやりたい仕事をみつけよう。(5) 一生の宝となる友人・仲間をつくろう。

スケジュール

- 第1回 インタロダクション | 概要やスケジュール、評価方法の説明
- 第2回 研究とは何か? : リサーチクエスションの立て方や先行研究の調べ方、論文の形式など
- 第3回 計量分析の方法 (1) : 表計算ソフトの使い方、データの加工、グラフの作成、基本統計量
- 第4回 計量分析の方法 (2) : 仮説検定の考え方、散布図、単回帰分析
- 第5回 計量分析の方法 (3) : 重回帰分析、多重共線性、ダミー変数
- 第6回 プレゼンテーションの方法 : プレゼンソフトの使い方、プレゼンのまとめ方
- 第7回 プレゼンテーションの実践 : 計量分析を用いた各自の研究成果を発表
- 第8回 テキストの輪読 (1)
- 第9回 テキストの輪読 (2)
- 第10回 デイバート (1)
- 第11回 テキストの輪読 (3)
- 第12回 テキストの輪読 (4)
- 第13回 デイバート (2)
- 第14回 ポスターによる研究成果の発表
- 第15回 まとめと到達度の自己診断

教科書・参考文献

教科書 関連するテキストの中からゼミ生と相談の上で決定します。

参考書 リーディングリストを提示しますが、そのほかに、ゼミ生の理解度や興味に応じて適宜紹介します。

授業外での学習

ミクロ経済学やマクロ経済学、財政学、地方財政論、公共選択論、計量経済学に関する知識は、サブゼミや自主学習を通じて身に付ける必要があります。また、卒業研究で選定したテーマについて自分なりに学習・調査をする必要もあります。

評価方法

ゼミにのぞむ姿勢や発言から総合的に判断して評価します (100%)。

履修上の注意

教員の担当する科目ならびに関連する科目をしっかりと履修してください。またゼミ活動は多岐にわたるため、授業外での学習時間を必要とします。単位のためではなく、自分を磨きたいと考えている学生を歓迎します。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

教授 西沢 淳男 (ニシザワ アツオ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

前期履修の地域史史料講読を受けて、まとめた史料の講読(輪読)をおこないます。地域史研究の基本は史料です。史料なくして研究は出来ません。3年次演習において群馬県を題材としたテキストで史料を使った研究発表を行います。さらに卒論執筆へと役立たせることを目的とします。

達成目標

和漢文を概ね読めることを目標とする。字句の読みや意味は辞典で調べれば良いが、まずは口頭でスラスラと読めることを目標とする。

スケジュール

第1回 : 受講ガイダンス(授業の進め方と担当決め)
第2回~14回 : 担当者を決め史料の輪読
第15回 : まとめ(3年演習へ向けての総括)

教科書・参考文献

教科書 史料を教員が準備をして、配布。

参考書 古文書辞典類他、日本国語大辞典(小学館)、国史大辞典(吉川弘文館)、大漢和辞典(大修館)。他は教員が直接指示。

授業外での学習

特に予習としては各回の当該箇所を目を通し、当日初めて史料を見ることがないようにする。復習として、独特な言い回し方、読みなど十分に記憶しておく。多くは繰り返して同様の表現が出てきます。史料の読みは一にも二にも慣れですので、反復して音読をする。

評価方法

試験はおこなわず、通常の担当箇所報告(輪読)の参加状況(70%)と討論への質問・参加状況(30%)

履修上の注意

ゼミは、皆出席が原則です。ドタキャンも厳禁ですので、特に厳しく対処します。ハウレンソウ(報告・連絡・相談)を厳守すること。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

教授 西野 寿章 (ニシノ トシアキ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

演習Iの準備となる基礎的な演習を行う。具体的には、翌年の山村地域におけるフィールドワーク(現地調査)に備えて、日本の山村の現状を学び、限界化の進む山村と非限界化の様相を示す山村との産業構造の違いなどを考察して、山村の多様性と困難性を理解する。

達成目標

山村地域に関する基礎的な知識を身につけ、フィールドワークを行う山村地域の現局面を理解する。

スケジュール

- 第1回 オリエンテーション：スケジュールの説明、輪読テキストと分担箇所の割り振り
- 第2回 解説①：日本の山村の自然環境(地形条件、植生と食文化)
- 第3回 解説②：日本の山村の歴史(林業地帯の発達とその契機、商品化作物の浸透)
- 第4回 解説③：日本の山村の歴史(山間地域農業の展開と流通)
- 第5回 解説④：日本の山村の過疎問題の発現と要因
- 第6回 解説⑤：過疎対策、山村地域政策の展開と経済のグローバル化
- 第7回 解説⑦：世界の山村における地域政策(オーストリア、フランス、ドイツなど)
- 第8回 輪読①：指定されたテキストを輪読する
- 第9回 輪読②：指定されたテキストを輪読する
- 第10回 輪読③：指定されたテキストを輪読する
- 第11回 輪読④：指定されたテキストを輪読する
- 第12回 解説⑧予備研究：次年度に予定される調査地域の地域特性や産業史など
- 第13回 解説⑨予備研究：次年度に予定される調査地域の現状分析など
- 第14回 解説⑩予備研究：次年度地域調査における研究分担と分担内容について
- 第15回 解説⑪予備研究：次年度地域調査の役割分担の決定

教科書・参考文献

教科書 初回前にメール等で連絡する

参考書 増田寛也編著『地方消滅』中公新書。小田切徳美『農山村は消滅しない』岩波新書。神野直彦『「分かち合い」の経済学』岩波新書。

授業外での学習

11月の週末に1泊2日の山村巡検を実施する。詳細は、オリエンテーションで連絡します。

評価方法

積極的に授業に参加し、しっかりとした輪読レジュメを作成しているかによって評価する。

履修上の注意

演習Iの地域調査は、山村地域を調査地域とするので、留意すること。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

教授 新田 浩司 (ニッタ ヒロシ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

憲法、行政法について親しみ、条文解釈や判例研究を行うための基本的な知識を身につける。また、ビブリオバトルやディベートを行うことにより発表するスキルを身につけることを目的とする。

達成目標

教科書の輪読等を通じて、受講生は、行政法を中心とした法律に親み3年次からの判例研究の基礎知識を身につけることを目的とする。

スケジュール

- 第1回 ガイダンス(講義概要の説明)
自己紹介、今後の進め方
- 第2回 ワールドカフェ
- 第3回 法律の学び方①
- 第4回 法律の学び方②
- 第5回 ビブリオバトル
- 第6回 輪読①
- 第7回 輪読②
- 第8回 輪読③
- 第9回 ディベート
- 第10回 輪読④
- 第11回 輪読⑤
- 第12回 輪読⑥
- 第13回 ディベート
- 第14回 判例の学び方
- 第15回 まとめ

教科書・参考文献

教科書 金井洋行=新田浩司著『プロローグ行政法』八千代出版

参考書 別冊ジュリスト『行政判例百選〔第7版〕II』有斐閣
他適宜指示する。

授業外での学習

新聞等のニュースに注目し、法学的見地から分析してみる。記事を切り抜き、どのような法的問題があるのか調べてみる。

評価方法

報告、プレゼンテーション能力：50%、質問に対する応答の仕方：20%、参加態度：10%

履修上の注意

社会における法の役割、とりわけ行政法の果たす役割を具体的な事件を通して立体的に把握するために、毎日の事件、出来事について主体的に考える能力を養うよう努めること。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

教授 福間 聡 (フクマ サトシ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

本ゼミでは、哲学・倫理学文献をゼミ生と共に読み解き、その中で論じられている問題について熟議します。中心的なテーマは「コミュニティにおける正義」であり、このテーマに関連する諸問題、マクロには国家間の正義であるグローバル・ジャスティス（途上国への援助、移民の受け入れ、国際司法、人道的介入）や一国内での財の再分配の問題、またミクロには医療資源の適正な分配や雇用の確保、所得の無条件的最低保障や教育に対する平等の機会といった問題を検討します。こうした「正義」にまつわる諸問題を国内外の研究者の文献を読解することを通じて、また、メディアやマスコミで取り上げられている社会的な事象を踏まえながら考察します。

達成目標

社会的・公共的な問題について哲学的・倫理的に考察している文献を読み解きながら、いかなる社会が望ましいのか、現代社会の一員としていかに私たちは考え・行動すべきなのかについて考える力を養う。演習への橋渡しとして、ゼミ生の読解力と文章力の発展を第一の目標とします。

スケジュール

第1回目 インTRODクション 今後の進め方についての打ち合わせ
第2回目～第8回目 指定した教科書の輪読・ディスカッション
第9回目～第14回目 ゼミ生が選択した文献の輪読・ディスカッション
第15回 まとめ

* 輪読・ディスカッションで行うこと

- ① 担当部分の考察・発表
- ② 担当者が疑問に思ったことについてのゼミ全体による討議
- ③ 自分の考察・発表に対する反省コメント

教科書・参考文献

教科書 森村進『自由はどこまで可能か -リバタリアニズム入門』（講談社 2001）、森村進『幸福とは何か』（筑摩書房 2018）
参考書 適宜授業内で紹介します。

授業外での学習

レジュメの担当者以外も文献を熟読し、問題意識を持ってゼミに臨むこと（コメントの提出が必須）。授業後は自分が考えていたことを発言できたか、また参加者の意見を適切に理解することができたかを反省し、次回のゼミでの改善点を明確にすること。

評価方法

ゼミでの活動を総合的に評価して判定します。

履修上の注意

本を読み、映画やドキュメンタリー映像を見たりしながら、社会的な問題に対して常に関心を高めておくこと。またそうした問題を哲学・倫理的な観点から考察するよう努めること。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

教授 細井 雅生 (ホソイ マサオ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

基礎演習は、学生各自の問題意識、研究関心に基づく最初の演習である。演習では、個々の受講生の関心を軸とするが、本演習は基本的には社会福祉分野、特に児童福祉、家庭福祉、地域福祉等が中心になると思われる。ただ、児童福祉分野は、いわゆる児童虐待など施設、里親、家庭、児童相談所等専門支援機関にまたがる問題、保育等子育て支援、非行、障害児と家族などきわめて幅は広く、また、家庭福祉、地域福祉の課題には高齢の問題まで当然視野に入ってくる。この基礎演習の目的は、講義等で学びつつある内容から得られた「なんとなく面白そう！」のような初発の興味・関心を自分自身の生き方を考えることとかがわかるような問題意識へと深めていくことである。したがって、文献の探し方、選び方、読み方、から、ひとにわかる発表の仕方、文章の書き方学ぶことになる。希望に応じて、施設見学やボランティアなど、現場での学びも重視したい

達成目標

- 1) 曖昧模糊とした興味を、学問研究上の「問い」へと結びつけるスタートラインに立つこと
- 2) 研究論文の具体的な検索の仕方や、論文の批判的な読み方の獲得
- 3) 読書ノート、問題発見ノートの作り方を習得すること
- 4) 形式ばらない、自由な議論の方法を身につけること

スケジュール

- 第1回 自己紹介 教員からのオリエンテーション
- 第2回 各自の「関心のあるテーマ」の15分発表 (レジュメをつくって発表する!)
- 第3回 各自の「関心のあるテーマ」の15分発表 (レジュメをつくって発表する!)
- 第4回 それぞれの発表テーマについてのフリートーキング
- 第5回 それぞれの発表テーマについてのフリートーキングと司会者一発表者のペアづくり
- 第6回 テーマの中から議論できそうなものを選定し、ワールドカフェあるいはディベート等で深めてみる
- 第7回 テーマの基礎になりそうな基礎文献の輪読
- 第8回 テーマの基礎になりそうな基礎文献の輪読
- 第9回 テーマの基礎になりそうな基礎文献の輪読
- 第10回 司会ときちんと打ち合わせした上で各自テーマ (発展編) 30分発表
- 第11回 司会ときちんと打ち合わせした上で各自テーマ (発展編) 30分発表
- 第12回 司会ときちんと打ち合わせした上で各自テーマ (発展編) 30分発表
- 第13回 司会ときちんと打ち合わせした上で各自テーマ (発展編) 30分発表
- 第14回 それぞれの関心あるテーマのフリートーキング
- 第15回 ふりかえりと今後に向けて

教科書・参考文献

教科書 特に定めない。開講後輪読できそうなものを選定する

参考書 各自の関心あるテーマに即して、紹介・文献検索

授業外での学習

関心テーマや希望に即して、福祉施設等の見学を企画する

評価方法

発表のレジュメ内容、発表、討論、輪読等の取り組みで総合評価する。

履修上の注意

ゼミナールはいろいろな意味で自己を発見し、他者理解とは何かを学ぶ機会でもある。まして、福祉の鍵は他者への想像力。自分と他者への想像力を鍛えるつもりで、自分を柔らかくして臨んでください。学びを楽しみましょう。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

担当教員
教授 増田 正 (マスダ タダシ)

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

政治学の関係領域のうち、とくに主権者教育と選挙啓発についての理論と実践に関する学習と討論を行い、責任ある自立した市民社会の一員として、熟議民主主義の実践力を涵養する。
3年次の演習Iへの橋渡しとして、主権者教育と選挙啓発についての文献、報告書などを集中的にレビューする。少人数制のメリットを活かして、司会を中心にしながら、発表者、討論者、質問者間のやり取りを活発化し、単なる個人的な意見や感想を超えた、公共性、社会性のある建設的な議論に導きたい。TCUE投票ファクトリーやG-vote18への関りを通じて、若者の低投票率問題に具体的にアプローチしていきたい。

達成目標

基礎演習では、ゼミ(チーム)としてのまとまりを保ちつつ、主権者教育と投票啓発についての関りを通じて、若者の投票率低下の問題を改善するための具体策を検討し、次年度以降の演習においてすぐに行動できるようにスタートアップの準備を整えるようにしたい。

スケジュール

- 第1回 ガイダンス、自己紹介、役割分担と前年度活動報告書の確認
- 第2回 主権者教育の事例1 デイベート
- 第3回 主権者教育の事例2 模擬投票、選挙カフェ
- 第4回 主権者教育の事例3 議員との意見交換会
- 第5回 主権者教育の事例4 18歳選挙権
- 第6回 主権者教育の事例5 選挙公約の比較
- 第7回 投票啓発の事例1 若者選挙ネットワーク(全国団体)
- 第8回 投票啓発の事例2 新潟県
- 第9回 投票啓発の事例3 埼玉県
- 第10回 投票啓発の事例4 青森県
- 第11回 投票啓発の事例5 学生団体
- 第12回 ぐんまシチズンシップアカデミーについて
- 第13回 G-Vote18について
- 第14回 若者リーダーフォーラムについて
- 第15回 総括授業 演習のまとめと活動報告書の作成・更新

教科書・参考文献

教科書 堀江湛編『政治学・行政学の基礎知識』(第3版)一藝社(2014)

参考書 大山耕輔監修 笠原英彦・桑原英明編著『公共政策の歴史と理論』ミネルヴァ書房(2013)

授業外での学習

個別報告の準備と発表後のフィードバック、グループ作業の準備・発表内容の集約等について全体の運営方針を確認しながら個別または集団で作業を行う。

評価方法

報告や討論などの主体的な参加度に応じて、平常点で評価を行う。

履修上の注意

欠席時の直接連絡を義務付ける。毎回出席が原則である。希望者は演習I・IIに参加してよい。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

准教授 丸山 奈穂 (マルヤマ ナホ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

観光と文化、観光と地域住民、持続可能な観光に関する現状や課題を様々な視点から研究する。観光学に関する基礎的な知識を輪読を通して身につける。レジュメ作成、発表、プレゼンテーションなど演習I,演習IIに必要なスキルを習得する。

達成目標

- 1: 観光学に関する文献を読み、ディスカッションを行う。
- 2: 最近の観光現象のトレンドを知る。

スケジュール

- 第1回 インタロダクション
- 第2回 観光学とは何か
- 第3回 輪読 1 (全体)
- 第4回 輪読 2-1 (グループ)
- 第5回 輪読 2-2 (グループ)
- 第6回 輪読 2-3 (グループ)
- 第7回 輪読 2-4 (グループ)
- 第8回 輪読 3-1 (グループ)
- 第9回 輪読 3-2 (グループ)
- 第10回 輪読 3-3 (グループ)
- 第11回 輪読 3-4 (グループ)
- 第12回 群馬の観光資源について 1
- 第13回 群馬の観光資源について 2
- 第14回 群馬の観光資源について 3
- 第15回 プレゼンテーション

教科書・参考文献

教科書 受講生と共に検討して決定する

参考書 観光社会文化論講義 (くんがる)

授業外での学習

指定された文献を事前に読み、専門用語を確認し、質問事項をまとめてくること

評価方法

ゼミでの活動、学習態度などを総合的に判断して評価する

履修上の注意

ディスカッションへの参加が大切なので、与えられた文献を授業前に読み、テーマについての事前学習を行うこと

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

准教授 宮田 剛志 (ミヤタ ツヨシ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

日本経済の現局面とそのもとで発現している食料・農業・農村問題に関する研究を行うゼミナールです。脆弱化と再建が並進する農業・農村の現状を分析し、調査研究のための準備を行なっていきます。日本経済の中には、他の先進国が将来経験する課題にはやくから直面していたとされる性質のものも多く含まれているといわれています。「課題先進国」とよばれるゆえんです。世界中で進行することが予測されている高齢化（65歳以上人口が20%を超える国が2030年には34カ国？）、すぐに古くなる「仕事のスキル」、資源価格（特に食料価格）の「大きな変動」等々です。では、これらの課題が日本の食料・農業・農村問題にどのように発現してきたのかを正確に理解するための準備を行っていくことを目的とします。

達成目標

「課題先進国」とよばれる日本経済にはやくから発現していた課題を正確に理解していくことを達成目標とします。例えば、世界中で進行することが予測されている高齢化（65歳以上人口が20%を超える国が2030年には34カ国？）、すぐに古くなる「仕事のスキル」、名前も聞いたことのない企業の「新たなライバル」としての登場、資源価格（特に食料価格）の「大きな変動」、挑戦する（政策）課題の変化等々です。

スケジュール

- 第1回 「課題先進国」となった日本
- 第2回 日本だけが陥ったデフレとは？
- 第3回 なお残る日本の優位と「課題先進国」化
- 第4回 デフレ化の経済政策
- 第5回 新興企業による「破壊的技術」とガラパゴス化現象
- 第6回 名前も聞いたことのない企業の「新たなライバル」としての登場-新たな競合の出現と競争のルールの変化-
- 第7回 「日本的雇用慣行」の変容
- 第8回 労働需給の変化と雇用のミスマッチ
- 第9回 世界中で頻発するすぐに古くなる「仕事のスキル」
- 第10回 仕事そのものの性格を変えていく技術
- 第11回 年齢を重ねる意味が変わる-世界中で進行する高齢社会の課題-
- 第12回 世界中で進行する高齢化のトレンド
- 第13回 労働力の老化と縮小
- 第14回 資源に訪れる新たな機会-需要の絶えざる増加と行き詰まる供給力-
- 第15回 挑戦する（政策）課題の変化

教科書・参考文献

- 教科書 金森久雄他編『日本経済読本 第19版』東洋経済新報社、2013年。日本経済新聞社編『これからの日本の論点』日本経済新聞社、各年次。
- 参考書 内閣府『経済財政白書』各年次。リチャード・ドップス他『マッキンゼーが予測する未来』ダイヤモンド社、2017年。HBR編集部『共感力』ダイヤモンド社、2018年、他。

授業外での学習

関連する統計・資料等は大学の図書館や関係官公庁等で入手し整理しておいて下さい。

評価方法

上記の全スケジュールをこなすことが何よりも必須です。成績は取り組み姿勢、報告等の内容によって評価を行います。

履修上の注意

問題意識や共感力等をしっかり持って課題に取り組むことが第一です。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

教授 森 周子 (モリ チカコ)

担当教員 担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

* 日本および諸外国の社会政策・社会保障制度に関する基礎的な知識を得る。

達成目標

* 今後のゼミ活動に向けての研究力、プレゼンテーション力、論文執筆力などの素地を作る。
* 日本および諸外国における社会政策・社会保障の現状・課題について自分なりに分析できるようになる。

スケジュール

第1回目	ガイダンス、自己紹介、輪読
第2回目から第13回	基礎文献の輪読
第14回目	ゼミナール大会に向けたテーマ発表
第15回目	ゼミナール大会に向けたテーマとチーム決め

教科書・参考文献

教科書 棕野美智子・田中耕太郎『はじめての社会保障』有斐閣アルマ、最新版。

参考書 講義中に具体的なテーマに即して適宜紹介。

授業外での学習

ゼミナール大会に向けて、選択したテーマ、および、他のゼミ生が選択したテーマに関する予習・復習、情報収集を欠かさないこと。

評価方法

報告内容 (50%)、質疑応答 (30%)、受講態度 (20%)。

履修上の注意

社会政策・社会保障への問題意識や関心を常に持ち、選定したテーマに関しても幅広い考察・検討を欠かさないこと。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

准教授 森田 稔 (モリタ ミノル)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

本演習では、3年次のグループ研究と4年次の卒業論文に必要なデータ分析のノウハウと経済学的感性を身に付けることを目的とします。

達成目標

3年次のグループ研究と4年次の卒業論文に必要なデータ分析ノウハウと経済学的感性を身に付ける。

スケジュール

【後期】

第1回目：本講義のガイダンス
第2回～7回目：データ分析の考え方と手法について学習
第7回～14回：データ分析についての実習
第15回目：まとめ

教科書・参考文献

教科書 中室牧子・津川友介(2017)『「原因と結果」の経済学』ダイヤモンド社
その他文献は、講義内でアナウンスします。
参考書 講義内でアナウンスします。

授業外での学習

前期は輪読と個人報告の報告資料の作成、後期はグループ研究とその報告資料の作成

評価方法

ゼミ活動への取り組み状況と報告内容、その他を総合的にみて評価します。
ただし、無断欠席をした場合は1回につきマイナス9点として減点します。

履修上の注意

第1回目のガイダンスで説明します。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

准教授 八木橋 慶一 (ヤギハシ ケイイチ)
担当教員 担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

本ゼミでは、社会問題の解決に取り組む事業、いわゆる「ソーシャルビジネス」について学びます。ソーシャルビジネスに関連する基礎的な文献や資料を輪読し、その内容について議論をします。学期末には、ソーシャルビジネスに関連する課題についてレポートを作成します。ゼミでの学習により、演習以降での専門的な研究に必要な基礎知識の習得、文章作成能力の向上を目的とします。

達成目標

- ①専攻分野についての基礎的な知識を習得する。
- ②レポートの作成能力を高める。

スケジュール

第1回目 打ち合わせ
第2回目から第11回目 基礎的な文献・資料の輪読
第12回目から第15回目 レポート課題についての報告

教科書・参考文献

教科書 講義で指示します。

参考書 適宜指示を出します。

授業外での学習

テキストを必ず予習してください。報告準備は入念に行ってください。

評価方法

平常点 (受講状況、報告内容など) 50%、期末レポート50%

履修上の注意

欠席が多い場合、単位は取得できません。また期末レポートの提出は必須です。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

准教授 安田 慎 (ヤスダ シン)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

本演習では、観光史・観光文化に関する基本文献を輪読しながら、関連する基本的な概念や論文に組み立て方について学んでいく。
さらに、ラウンドテーブルや校外学習、フィールドワークを通じて、観光の歴史や現場についての理解を深めていく。

達成目標

- ・観光史・観光文化に関する基本的な概念を説明することができる。
- ・観光史・観光文化に関する論文や書籍のまとめ方や議論の仕方を習得する。
- ・観光史・観光文化に関する自分の興味関心のある分野を見つけることができる。

スケジュール

第1回 オリエンテーション
第2回 輪読1 (担当教員)
第3回 輪読2 (学生)
第4回 輪読3 (学生)
第5回 輪読4 (学生)
第6回 輪読5 (学生)
第7回 輪読6 (学生)
第8回 輪読7 (学生)
第9回 輪読8 (学生)
第10回 輪読9 (学生)
第11回 輪読10 (学生)
第12回 輪読11 (学生)
第13回 輪読12 (学生)
第14回 輪読13 (学生)
第15回 演習のまとめ

教科書・参考文献

- 教科書 ・山口誠. 2010. 『ニッポンの海外旅行』ちくま新書.
・岡本亮輔. 2015. 『聖地巡礼』中公新書.
- 参考書 関連文献は授業内外で指示する。

授業外での学習

- ・授業外でも積極的に観光の現場に足を運んでみて下さい。
- ・授業外に毎月1冊のブックレポート (4000字程度) を書いて頂きます。

評価方法

- ・演習内でのディスカッション、演習内課題 : 50%
- ・演習外での課題 : 50%

履修上の注意

- ・演習内外での積極的な関与が基礎演習の雰囲気構築します。ぜひ主体的な取り組みを。
- ・演習の時間外に学年を超えたフィールドワークやイベント (合宿等) を行いますので、積極的なご参加を。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

教授 吉武 信彦 (ヨシタケ ノブヒコ) 担当教員 担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次 2 単位区分 単位数 2 開講時期 後期

目的

演習の研究テーマは、国際関係論、国際交流史である。国際関係に生ずる様々な問題を理論的、歴史的に解明し、将来を展望することを目的とする。それを通じて、激動する国際関係をみる「眼」を養ってもらいたい。国際的な相互依存関係の進む現在、そうした視点は国内社会の諸問題を考える上でも極めて重要であろう。

達成目標

以下の3点をめざしてほしい。①国際関係の諸問題を批判的に分析できる能力を磨き、自分の意見をもてるようになること。②自分の意見を他人に対して論理的に説明でき、文章でも表現できるようになること。③演習の活動を通して、同期、先輩、後輩との間で切磋琢磨し、コミュニケーション能力を身につけること。

スケジュール

ゼミでは、以下の活動を主に行う。

- ①今後、ゼミ活動で必要となる基本的な技術を学び、実践する。特に、初年次ゼミで学んだ輪読、報告の仕方、レポートの書き方などについて、最初に確認をする。レポートの書き方については文献を読みたい。また、毎回、数人の学生に1分間スピーチをしてもらう。
- ②国際関係論、国際交流史に関する入門書を輪読し、理論的、歴史的な見方を学ぶ。課題の文献は、全員が事前に読み、質問等を考えておくこと。また、文献を輪読した後、その内容に関して毎回レポートを提出すること。
- ③時事的な国際問題にも関心をもってもらうため、各自テーマ（たとえば、EU、日中関係、アメリカ外交など）を自由に1つ決め、インターネット、新聞、雑誌などを利用して情報を集め、1ヶ月半に1回のペースでそのテーマの動向をブリーフィングしてもらう。テーマは、第1回目の講義にて確定するので、それまでに候補を考えておくこと。

【後期】

- 第1回目 オリエンテーション（演習の概要説明、進め方、スケジュールの確認）
第2回目 輪読、報告の仕方、レポートの書き方などについての確認
第3回目～第4回目 レポートの書き方などに関する文献の輪読
第5回目 ブリーフィング①（各自のテーマに関する報告1）
第6回目～第9回目 専門書の輪読①（国際関係論に関する入門書1）
第10回目 ブリーフィング②（各自のテーマに関する報告2）
第11回目～第14回目 専門書の輪読②（国際関係論に関する入門書2）
第15回目 ブリーフィング③（各自のテーマに関する半年間のまとめ）

教科書・参考文献

教科書 演習で指示する。

参考書 演習で指示する。

授業外での学習

輪読する文献は、各章の担当者以外も事前に読み、内容に関する質問を考えてくること。また、担当者は、章の内容に関して詳しいレジュメを用意し、当日、全員に配布すること。時間があれば、関連文献や資料にも目を通すことが望ましい。

評価方法

試験は行わない。通常の報告（60%）、議論への参加（20%）、レポート（20%）に基づき成績をつける。無断欠席、レポートの未提出は一切認めない。

履修上の注意

演習生は、演習Ⅰと演習Ⅱに参加してもよい（できる限り勉強時間を確保し、先輩・後輩間の関係を円滑にするため）。
随時、フィールドワーク等の行事を行なう予定である。できる限り参加してほしい。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

准教授 吉原 美那子 (ヨシハラ ミナコ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

学校と家庭、地域、企業との連携による教育」、「地方分権と教育行政改革」を共通テーマとして、地域の人々とともに作り上げる地域の教育政策について考察を深めるために、教育学の基礎知識を固め、それらを応用していくスキルを身につけることを本演習の目的とする。

達成目標

1. 教育に関する基礎的な知識を獲得する
2. 批判的思考、客観的思考のプロセスを習得する
3. 協働作業の中で自らの能力を活かすスキルを身につける
4. 知識や思考を最大限に活用する力を育成する

スケジュール

- 第1回 ガイダンス (授業の進め方、課題の提示)
- 第2回 ワールドカフェ① 教育について語ろう
- 第3回 ワールドカフェ② 前回のまとめ
- 第4回 グループワーク① 教育学の基礎知識を習得する
- 第5回 グループワーク② 教育政策の現状を把握する
- 第6回 文献購読① レジユメの作り方
- 第7回 文献購読②
- 第8回 文献購読③
- 第9回 プレゼンテーション① 効果的なパワーポイントの作り方と話し方
- 第10回 プレゼンテーション② グループでプレゼンテーションの準備
- 第11回 プレゼンテーション③ 発表
- 第12回 プレゼンテーション④ アクティブ・ラーニングとは
- 第13回 プレゼンテーション⑤ アクティブ・ラーニングの構想
- 第14回 プレゼンテーション⑥ アクティブ・ラーニングの実践 (発表)
- 第15回 総括

教科書・参考文献

教科書 特に指定しない。ただし、第1回の授業にて必要とされる文献等を指示する。

参考書 『どう考える？ニッポンの教育問題』シリーズ等、その他は授業中に説明する

授業外での学習

グループワークや文献購読、プレゼンテーションには必ず授業外における準備が必要となる。決められた手順に従って資料を準備しておくこと。またプレゼンテーションの後には必ずリフレクションシートを記入すること。

評価方法

ワールドカフェ及びグループワークの参画 (30%)、文献購読における課題提出と発表 (20%)、プレゼンテーション成果 (50%) を基準に、最終的には総合的に判断して評価する。

履修上の注意

授業のスケジュールや内容は、履修者の関心や進捗状況によって変更することもあり得るので留意されたい。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

准教授 米本 清 (ヨネモト キヨシ)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

都市・地域経済学は経済学の中でも最も現実の世界と密接に関わらざるを得ない分野の一つである。少なくとも短期・中期においては、何が事実上困難なのか、ある政策は当面、誰にどのような影響をもたらすのか、といったことを深く考察しなければならない。

本演習では、都市・地域経済学の理論を応用し、実際の社会・経済問題について分析する。特に、低成長・少子高齢化時代における都市・地域空間構造の変化、中心市街地の空洞化、地域間の人口移動とその要因、災害の地域経済や企業・住民立地への影響を中心に学習を進める。さらに、選好・効用の理論を応用した都市・地域分析の方向性を探る。

達成目標

演習における学習・研究・その他活動内容を理解するとともに、入門的な学習を行う。

演習生として主体的に学習・研究・その他活動を行えるようになり、3年次における本格的な学習・研究の準備を整えることを目標とする。

スケジュール

【後期】

第1回 導入：

演習の概要を説明し、自己紹介などを通じて今後の方向性を確認する。

第2回～第5回 初回発表：

演習の開始時点で自ら興味を持つトピックに関して各自で発表を行い、議論をする。

第6回～第10回 輪読：

受講者で基本的な参考書（都市・地域経済学の文献）を輪読する。

第11回～第14回 輪読・議論：

上の参考書を用いて、より内容を深めた輪読と議論を行う。

第15回 前期まとめ：

次年度以降の研究準備をする。

教科書・参考文献

教科書 学生の希望を考慮しつつ、その都度決める。

参考書 その都度、配布する。

授業外での学習

自分の回の発表に備えて学習・研究を行い、スライドの作成を進めること。

評価方法

輪読や研究発表時の発表内容（60%）

その他各行事や全体的な活動状況（40%）

履修上の注意

このゼミナールで学習・研究する内容が、1)卒業後の社会生活において役に立つ、2)学問的な意義を持つ、のいずれかまたは両方になるよう努力してほしい。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

准教授 若林 隆久 (ワカバヤシ タカヒサ)
担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

基礎演習では、演習の目的である①経営学や組織論の知識や考え方を身に付けることと②コミュニケーションに関する能力を高めることに加えて、③これから学習を進めていく上での学習環境作りに重点を置きます。座学におけるディスカッションだけではなく、実務家との関わり、フィールドワーク、ゼミの運営といった実践でも学習を進めていくので、その基盤となる関係性づくりや組織づくり(組織開発)に意識的に力を入れます。ゼミでの活動を通じて、経営学や組織論の知識や考え方を学ぶとともに、あわせて、論理的に考える力、問題を発見・解決する力、自分の意見を表現する力、人と関わる力、といったコミュニケーションに関する能力も高めていきます。

達成目標

1. 経営学や組織論の基礎的な知識、概念、専門用語、考え方を身に付ける。
2. 現実の企業や組織に対して、それらの考え方を適用し、自分なりの考えを述べるようになる。
3. どうすれば他者に自分の考えを上手に伝えられるか、どうすれば他者と円滑に共同作業や議論を行えるかといったことを実践を通じて身に付ける。

スケジュール

- 第1回 インタロダクション
- 第2~4回 組織づくり・関係性づくり
- 第5~7回 プレゼンテーション
- 第8~13回 テキストの輪読とディスカッション
- 第14・15回 実務家インタビュー

※ 人数や講義の進行状況などに応じて、講義の順番・回数・内容は変更になることがあります。
※ 学生の希望に応じて、フィールドワーク、ワークショップ、グループ研究、課題解決型学習、ゼミ合宿などを実施します。

教科書・参考文献

教科書 いくつかの候補の中から受講者と相談して決定する。

参考書 講義の進行状況に応じて、適宜紹介する。

授業外での学習

テキストの該当部分を読み、身近な組織や実在の企業の事例と結びつけて内容を腑に落ちるように理解する。報告の担当となった場合は、レジュメを用意しディスカッションテーマを定めたと報告を行う。その他、ゼミの活動内容や運営に関して、準備やグループワークを行う。

評価方法

受講状況および演習での活動状況をもとに総合的に評価する。

履修上の注意

ゼミ内での「つながり」を重視したゼミ運営を行います。学年内だけではなく学年間でも交流を持ちます。ゼミにおける活動・運営・懇親を楽しく積極的に行える人を求めています。活動内容であっても人間関係作りであっても、自分から働きかける意欲を重視します。

科目名 基礎演習
Title Introductory Seminar
科目区分 演習

非常勤講師 倪 鏡 (ニイ ジン)

担当教員

担当教員との連絡方法

E-Mail

配当年次
2

単位区分

単位数
2

開講時期
後期

目的

農山漁村文化協会の日中農業交流事業に携わった勤務実績と、JC総研での研究経験を活かし、地域と世界への関心を引き起こし、複眼的視点を持つ教育を行う。
大学では、主体性を持ち学習し、スキルアップを実現する能力を身につける必要がある。本ゼミを通じ、高校までとは異なる学び方、知識の集め方、知識の使い方を習得し、大学の学びを充実させ、将来のキャリア形成のための基礎的能力を養うことを目的とする。

達成目標

- 1) 文献の読み方、まとめ方、発表の仕方など、大学での基礎的学習能力を身につける。
- 2) 輪読を通じて、食と農への理解を深め、演習I、IIへ進む基礎的専門知識を身につける。

スケジュール

- 第1回 インタロダクション - ゼミから学ぶ
- 第2回 大学で学ぶ - 本、論文の読み方、使い方
- 第3回 発表 = プレゼンテーションの仕方
- 第4回 ディスカッションの方法とルール
- 第5回 テキスト輪読 (1) 食料危機は本当にやってくるのか? ①
- 第6回 テキスト輪読 (2) 食料危機は本当にやってくるのか? ②
- 第7回 テキスト輪読 (3) 「先進国 = 工業国、途上国 = 農業国」は本当か? ①
- 第8回 テキスト輪読 (4) 「先進国 = 工業国、途上国 = 農業国」は本当か? ②
- 第9回 テキスト輪読 (5) 自給率で食料事情は本当にわかるか? ①
- 第10回 テキスト輪読 (6) 自給率で食料事情は本当にわかるか? ②
- 第11回 テキスト輪読 (7) 土地に恵まれない日本の農業は本当に弱いのか? ①
- 第12回 テキスト輪読 (8) 土地に恵まれない日本の農業は本当に弱いのか? ②
- 第13回 テキスト輪読 (9) 食料は安価な外国産に任せて本当によいのか? ①
- 第14回 テキスト輪読 (10) 食料は安価な外国産に任せて本当によいのか? ②
- 第15回 総括 (必要に応じて発表会を行う)

教科書・参考文献

- 教科書 『農業がわかると、社会のしくみが見えてくる 高校生からの食と農の経済学入門』 生源寺眞一著 家の光協会
- 参考書 『新版 よくわかる食と農のはなし』 生源寺眞一 (著) 家の光協会

授業外での学習

テーマに関する文献・著書を事前に読み、発表の準備を整えること。興味のある事項に関しては、他の参考書等を調べ、積極的に理解を深めることが望ましい。

評価方法

報告・発表能力：40%、質問の仕方：20%、質問に対する応答の仕方：20%、授業への参加状況：20%

履修上の注意

演習は「受け身」で出席するのではなく、いま自分たちが生きているのがどんな社会で、それがどの方向に向かっているのか、自分がそれに今、そして今後どのように関わっていきけるのかを日々考えながら出席し、学習するよう心がけて下さい。
なお、欠席時にはメール等で全員に連絡すること。